

収蔵資料  
調査報告書

18

戦争関係資料 2

2016.3

宇治市歴史資料館

# 収蔵資料 調査報告書

18

## 戦争関係資料2

歴史資料館では、昭和59年(1984)の開館以来、資料の収集に努めて参りました。市役所内の各部署とも連携をはかり、本市における歴史資料保存施設としての役割も果たしています。

今回は、戦後70年を機に、宇治市平和都市推進協議会から寄託されている戦争遺品の史料紹介と、これらを活用した展覧会について報告するとともに、館蔵の戦争関係資料についてまとめました。

平成28年 3月

宇治市歴史資料館

### 目次

- |   |                    |    |
|---|--------------------|----|
| 1 | 戦争関係資料の概要          | 2  |
| 2 | 資料目録 館蔵戦争関係資料      | 4  |
| 3 | ある音楽青年の軍隊日記—紹介と翻刻— | 68 |

# 1 戦争関係資料の概要

## ■資料収集の経過

戦争関係資料については、すでに平成18年（2006）に刊行した『収蔵資料調査報告書8 戦争関係資料』（以下『報告書8』）において紹介したことがある。本書では、その後の収集資料と調査成果を報告する。

『報告書8』で述べたように、戦後50年から60年まで節目ごとに、宇治市平和都市推進協議会の主催により、当館を会場に戦争関係資料を展示してきた。戦後70年を迎えるにあたり、その前年である平成26年（2014）にプレ企画として「戦争遺品展—こどもたちが見たもの—」を開催し、翌27年「戦争遺品展—戦後70年—」を開催した。その概要については下記のとおりである。

### 戦争遺品展—こどもたちが見たもの—

- 会期：平成26年（2014）7月12日（土）  
～9月7日（日）
- 会場：歴史資料館 収蔵展示室
- 開催日数：50日
- 観覧者数：2,748人（推計）
- 展示点数：資料112点・パネル34点

企画展「おぐら池—へり・マンナカ・チュウドオリー—」に併催。

宇治市平和都市推進協議会所蔵資料及び当館蔵の戦争関係資料に加え、京都文教大学所蔵の国定教科書を展示した。当時の作文や写真などの資料を用い、こどもの目を通した戦争を紹介した。



「戦争遺品展—こどもたちが見たもの—」展示風景

### 戦争遺品展—戦後70年—

- 会期：平成27年（2015）7月18日（土）～9月6日（日）
- 会場：歴史資料館 展示室・収蔵展示室
- 開催日数：44日
- 観覧者数：3,420人（推計）
- 展示点数：「戦時下の暮らし」資料185点・パネル28点

「馬とピアノとカーネーション『山北さんの軍隊日記』」資料69点・パネル25点  
展示室では、宇治市平和都市推進協議会所蔵資料及び当館蔵の戦争関係資料に加え、京都文教大学所蔵の国定教科書など、「戦時下の暮らし」にまつわる資料を展示。

収蔵展示室では、「馬とピアノとカーネーション『山北さんの軍隊日記』」と題し、昭和15年（1940）から昭和16年にかけて書かれた軍隊生活の記録を取り上げた。陸上自衛隊信太山駐

屯地ならびに株式会社不二家より提供いただいた写真資料を加え展示した。詳しくは、巻末「3 ある音楽青年の軍隊日記—紹介と翻刻—」参照。

また、下記の会場においても戦争関係資料や写真パネルなどの展示を行った。

西宇治図書館 平成27年8月1日（土）～23日（日）

東宇治コミュニティーセンター 平成27年8月6日（木）～23日（日）

市役所市民ギャラリー 平成27年8月10日（月）～28日（金）



「戦争遺品展—戦後70年—」展示風景

## ■宇治市平和都市推進協議会の資料について

宇治市平和都市推進協議会とは、昭和37年（1962）に設立された団体で、現在は宇治市長を会長に15団体で構成される。事務局は総務部総務課におかれる。戦後50年を機に展覧会を企画し、広く市民に呼びかけ戦争遺品を収集してきた。これらの資料は展覧会終了後原則として所蔵者に返却したが、希望される方については宇治市平和都市推進協議会に寄贈いただいた。同資料は、一括して当館に寄託されており、その数は433点にのぼる（『報告書8』）。

## ■館蔵の戦争関係資料について

開館以来約30年、様々な資料が当館に収蔵されてきた。総件数は1,800件を超え、その中にはわずかながら戦争に関わるものも含まれる。本書では次項で、『報告書8』以降に当館が収集した戦争関係資料を紹介する。資料数は決して多くはないが、これまでの展覧会が契機となって収集された資料もあり、展覧会のひとつの成果ともいえよう。

## 2 資料目録 館蔵戦争関係資料

○ 番号は、収蔵番号（例：1-142）一個別番号をしめす。

番号	資料名	数量	備考
1-124-35	鉄兜	2	
1-124-36	水筒	1	
1-881-01	火薬製造所復活反対運動資料	1	南山城平和を守る会 昭和29年7月
1-881-02	要望書	1	昭和29年7月
1-881-03	昭和二十九年十二月定例宇治市議会会議録抄本	1	
1-881-04	旧陸軍造兵廠宇治製造所木幡分工場再開誘致趣意書	1	昭和30年1月
1-881-05	請願書（原稿）	1	昭和29年9月
1-881-06	請願書（写）	1	昭和27年6月
1-881-07	火薬製造所再開反対署名	1	昭和29年7月
1-888	衣料切符	1	農商省 昭和19年
1-1065-01	軍事郵便	1	
1-1069	宇治川架橋演習アルバム	1	大正7年頃
1-1241	支那事変の想ひ出（写真集）	1	緒方部隊酒井隊 昭和13年
1-1322	補充兵手牒	1	大正8年簡閲点呼済
1-1325	大日本帝国政府戦時郵便貯金切手 第27回	1	昭和19年11月
1-1326	横田隊写真帖	1	垣部隊横田隊 昭和18年1月
1-1336-01	軍盃 退営紀念（大）	1	
1-1336-02	軍盃 退営紀念（中）	1	
1-1336-03	軍盃 退営紀念（小）	1	
1-1336-04	軍盃 歩兵第十九連隊除隊紀念	1	
1-1336-05	軍盃 歩兵第八連隊方六中隊退営紀念	1	
1-1336-06	軍盃 凱旋紀念	1	
1-1336-07	軍盃 祝戦捷	1	
1-1336-08	軍盃 除隊紀念	1	
1-1336-09	軍盃 除隊紀念	1	
1-1336-10	軍盃 歩二〇満州派遣凱旋紀念	1	
1-1336-11	軍盃 近歩一記念	1	
1-1336-12	軍盃 輜重兵四退営紀念	2	
1-1336-13	軍盃 除隊紀念	1	
1-1336-14	軍盃 騎兵二〇満州派遣凱旋紀念	1	
1-1336-15	軍盃 歩兵第十連隊退営紀念（大）	1	
1-1336-16	軍盃 歩兵第十連隊退営紀念（中）	1	
1-1336-17	軍盃 歩兵第十連隊退営紀念（小）	1	
1-1339	慰問袋	2	
1-1364-01	防空頭巾	1	
1-1364-02	ゲートル	1	
1-1367-01	割増金附報国債券 第八回 金五円	1	日本勸業銀行 昭和16年6月
1-1367-02	割増金附戦時貯蓄債券 第参回 金七円五拾銭	1	日本勸業銀行 昭和17年6月
1-1367-03	割増金附戦時貯蓄債券 第壹回 金七円五拾銭	1	日本勸業銀行 昭和17年2月
1-1367-04	割増金附戦時貯蓄債券 第六回 金七円五拾銭	2	日本勸業銀行 昭和17年12月
1-1367-05	割増金附戦時貯蓄債券 第九回 金五拾円	2	日本勸業銀行 昭和18年6月
1-1367-06	割増金附戦時貯蓄債券 第拾貳回 金拾五円	2	日本勸業銀行 昭和18年12月
1-1367-07	割増金附戦時貯蓄債券 第拾貳回 金七円五拾銭	1	日本勸業銀行 昭和18年12月

番号	資料名	数量	備考
1-1405-01	日の丸寄書き	2	
1-1405-02	千人針	1	
1-1405-03	襟章	3組	
1-1434-01	懐旧 第七号	1	桜火会宇治市部 昭和41年1月
1-1434-02	懐旧 第八号	1	桜火会宇治市部 昭和42年2月
1-1434-03	懐旧 第九号	1	桜火会宇治市部 昭和43年3月
1-1434-04	懐旧 第十号	1	桜火会宇治市部 昭和44年3月
1-1434-05	懐旧 第十一号	1	桜火会宇治市部 昭和45年3月
1-1438	読売ニュース焼付版	165	昭和18～19年
1-1477	宇治村忠魂碑銘板	1	帝国在郷軍人会宇治村分会 昭和9年11月3日
1-1549	ナツヤスミニッキ	1	昭和18年
1-1690-01	旧紙幣 日本銀行券 拾銭	8	
1-1690-02	旧紙幣 日本政府紙幣 五拾銭	7	
1-1690-03	大日本帝国政府軍用手票 拾銭	1	
1-1690-04	大日本帝国政府紙幣 五拾銭	7	
1-1690-05	日本銀行兌換券 五円	1	
1-1690-06	日本銀行兌換券 拾円	1	
1-1690-07	日本銀行券 百円	2	
1-1690-08	満州中央銀行 百円	1	
1-1690-09	中国連合準備銀行 壹分	1	
1-1722	軍用手票 銀拾銭	1	大日本帝国政府 明治37年
1-1726	支那事変写真全輯三 黄河・徐州作戦	1	朝日新聞社 昭和13年8月20日
1-1747	詔書（対米英）	1	昭和16年12月8日
1-1763	京都飛行場平面図（コピー）	1	京都府土木部／京都飛行場 昭和18年3月21日
1-1784	我等の思ひ出（アルバム）	1	東京陸軍航空学校大津校 昭和18年卒業
1-1785	ボクラノ空ダ（ポスター）	1	日本国際航空工業 昭和16年頃
1-1786-01	履歴表	1	横須賀鎮守府 昭和12年4月～20年9月14日
1-1786-02	支那事変従軍記章之証	1	賞勲局 昭和15年4月29日
1-1786-03	辞令（支那事変ニ於ケル功ニ依リ勲八等白色桐葉章及金参百円ヲ授ケ賜フ）	1	賞勲局 昭和15年4月29日
1-1786-04	大日本帝国政府支那事変行賞賜金国庫債券 参百円	1	大蔵大臣 昭和15年
1-1786-05	勲章佩用心得	1	賞勲局
1-1786-06	辞令（任海軍三等兵曹）	1	横須賀鎮守府 昭和17年5月1日
1-1786-07	履歴書	1	戦後作成したもの
1-1786-08	郵政省辞令書	1	昭和25年11月13日
1-1786-09	割増金附特別報国債券 第四回 金壹円	1	日本勸業銀行 昭和17年1月
1-1786-10	大日本帝国政府割増金附戦時郵便貯金切手 第貳回 金貳円	2	昭和17年7月
1-1786-11	割増金附戦時報国債券 第七回 金五円	3	日本勸業銀行 昭和18年2月
1-1786-12	割増金附戦時貯蓄債券 第九回 金七円五拾銭	1	日本勸業銀行 昭和18年6月
1-1786-13	割増金附戦時貯蓄債券 第拾壹回 金七円五拾銭	1	日本勸業銀行 昭和18年10月
1-1786-14	割増金附戦時貯蓄債券 第拾壹回 金拾五円	1	日本勸業銀行 昭和18年10月
1-1786-15	割増金附戦時貯蓄債券 第拾貳回 金七円五拾銭	2	日本勸業銀行 昭和18年12月

番号	資料名	数量	備考
1-1786-16	海防艦戦記	1	海防艦頭彰会 昭和57年5月5日
1-1793	日記	1	昭和19～21年
1-1794	日記	1	昭和14・20年
1-1795	回想(原稿)	1	戦中の回想録
1-1803-01	新制重砲兵須知	1	軍事普及会編纂 昭和8年12月18日
1-1803-02	広島特報	2	NHK広島放送局 昭和55年8月6日
1804	鉄兜	1	
1805-01	週刊毎日 一月二日一月九日合併新年倍大号 「進め一億皆戦士」	1	毎日新聞社 昭和19年1月2日
1805-02	週刊毎日 一月十六日号「一億の柱で建てよ大東亜」	1	毎日新聞社 昭和19年1月16日
1805-03	週刊毎日 一月二十三日号「一億がみな決戦に散る覚悟」	1	毎日新聞社 昭和19年1月23日
1805-04	週刊毎日 一月三十日号「出るぞまだまだ底力」	1	毎日新聞社 昭和19年1月30日
1805-05	週刊毎日 二月十三日号「忠魂安かれ我等あり」	1	毎日新聞社 昭和19年2月13日
1805-06	週刊毎日 二月二十六日号「一億一心皆戦士」	1	毎日新聞社 昭和19年3月26日
1805-07	週刊毎日 四月二日号「乗るな流言語るな秘密」	1	毎日新聞社 昭和19年4月2日
1805-08	週刊毎日 四月九日号「銃後も戦地だ心に武装」	1	毎日新聞社 昭和19年4月9日
1805-09	週刊毎日 四月十六日号「国民皆兵挙って防空」	1	毎日新聞社 昭和19年4月16日
1805-10	週刊毎日 四月三十日号「興す戦だどこまでも」	1	毎日新聞社 昭和19年4月30日
1805-11	週刊毎日 五月十四日号「つなげ一億心と心」	1	毎日新聞社 昭和19年5月14日
1806	饗庭野演習場之図	1	京都・小林又七商店
1807-01	信太山演習場近傍図	1	
1807-02	野砲兵第四連隊史並びに関連諸部隊史	1	信太山砲四会 昭和57年4月11日
1809-01	戦時中のアルバム	1	金沢工兵第九連隊 昭和12～16年
1809-02	軍隊手牒	1	
1809-03	大日本帝国政府支那事変行賞賜金国庫債券 参百円	1	昭和15年



1-1785 ボクラノ空ダ(ポスター)

日本国際航空工業、昭和16年頃

読売新聞社のコンクールに当選した図案が、日本国際航空工業株式会社のポスターになりました。戦闘機が家々の上空を飛行し、それに応えるかのよう、日の丸が高く掲げられています。

七月二十四日 木曜 晴  
石井班長が転属した野戦高射砲隊は戦地へ発った。羨しい限りだ。  
今日金曜日だと思つたら、未だ木曜日だった。日曜日がないので何曜だか解らぬ。何日になれば外出出来る事やら。  
午後、劇「激」しい夕立ちがあつた。

七月二十五日 金曜 雨  
日米関係いよいよ急を告げ、太平洋波高し。英米ソ仏(ドゴール派)蔣蘭印の対日包圍工作着々進み、ABC D戦線の完成迫る。  
いよいよ闘ふか。船舶砲兵隊の動員説も今度こそは実現しそうだ。実現する事を只々神に祈るのみ。一日否一刻も早かれと...。  
中隊当番、否々での生活が耐らなく嫌になつ

しかなかった。海が恋しい。又船舶砲兵隊は征くと云ふ噂がパット拵つた。これから船舶砲兵隊が必要になるので、断然今度こそは征けると思ふが。  
二十三日。丁度一年前の今日の午後、香櫛園スカールハウスで召集の知らせを受けたのだ。二時ごろだったか。あの日も素的な天気だった。今、兵営より海を視めつゝ、あの日の事を思ひ出すと感慨無量だ。今頃まで内地なんかにくすぶって居ようとは夢にも思はなかつた。来年の今日は？今夜も十数条かの照空灯が夏の夜空に入り乱れて居る。全く壮感でもあり、戦の前夜、嵐の前の不気味さを感じさせられる。

た。日夕点呼後、酒ぐせの悪い准尉のかいほうをさせらる。一死報国を誓つて来た軍隊で、こんな事をせなければならぬとは、泣くにも泣けぬ気持だった。日直勤務に就き乍ら、神清(聖)たる可き舎内で...。准尉の人格たるや全く〇だ。

七月二十六日 土曜 晴  
〔この日は氣候欄の「晴」に印をつけるのみ〕

勇ましく堂々出発して征った。何処へ行く事だ  
ろう？羨ましい限りだ。明日から又続々応召兵  
が入隊して来るとの事だ。自分たちはどうなる  
のだろうか。戦線に発ちたい。そして撃つて撃  
つて撃ちまくりたい気持で一ぱいだ。戦線へ発  
つ日の一日一刻も早からん事を只々神に祈るの  
み。

七月十三日 日曜 晴

午前一時、突然起こされた。急に命令が出て、  
午前五時半馬受領に郡山に出張するから、これ  
から準備しろとの事。五時半準備完了し、本部  
前より隊のポロ自動車に乗って、暁の街を一路  
大阪駅へ飛ばす。愉快だった。戦闘帽に長靴の  
我々の姿は注目の的だ。思ひがけなかった師団  
獣医部長M大佐自らの見送りに感激し、又使命  
の重大さを感じつゝ、午前八時十分発東京行き  
に乗込む。全く思ひもよらなかった東京行きに  
は全く嬉しかった。車窓より視める風景：愉快  
だった。然し沿線到る所の応召兵の群と、続々  
すれちがって西下する戦車、装甲自動車を満載  
した貨車に驚き、全国的の大動員に、日ソ宣戦  
布告のいよいよ近きを感じず。静岡附近より連日  
の降雨で不通箇所続出し、立往生には全く弱つ  
た。熱海の灯は美しかった。いつ再び来れる事  
やら。横浜を通過していよいよ深夜の京浜をば  
く進する。品川：高架になった。東京市内だ：。  
ビルの街を進む。好きな有楽町を通過して東京  
駅着は五時間も遅れて、正に午前二時だった。  
東京。懐かしい東京。もっと早ければ銀座へ行

きたかったのだが。懐かしい福井が居るかも知  
れないと思ふと耐らなかつた。この東京の何処  
かに。

七月十四日 月曜 晴

待合室のベンチでうつゝとした。午前四時すぎ  
に発つ一番電車で東京駅を発車して、未だ明け  
きらぬ東京の街々を視めつゝ上野で下車する。  
そして上野発盛岡行き列車に乗り込み、午前五時  
四十分上野を發つて、東北本線を一路郡山に向  
ふ。時間があれば銀座も歩きも出来たろうに。  
懐かしい福井が居るかも知れぬ東京。東京まで  
はるばる来て居り乍らと思ふと、耐らなく名残  
り惜しかった。東北に入つてすっかり変わった車  
窓の風景をあかずに視めつゝ、宇都宮を通過し  
て十一時郡山市に到着す。東北の街、郡山は意  
外に大きな街だった。駅前で昼食をして、タク  
シーに分乗して微発場開成山競馬場に向ふ。到  
着して驚いた。この馬の群れ。何千頭も居るだ  
ろうか。大阪師団司令部よりの微発委員連の中  
に、N少尉の顔もみへた。同じく受領に来て居  
る22、23、24、25、31部隊の兵隊。  
遠くへ来て同じ大阪の人々が会ふと何となく懐  
しさを感じず。旅館で旅装をとぎ、早速検査の手  
伝をしたが、公用公用で三度も街へ出、見物す。  
全くセイカイだった。今夜より旅館だ。思ひが  
けなかつた夕食、疊、ふとん、タオル張りの風  
呂……………。

七月十五日 火曜 晴

体は綿の様だ。疲が出たのだろう。前田、牧村  
は上等兵に進級した。応召兵は相変らず続々入  
隊して来る。石井班長もY上等兵も、突然山の  
高射砲部隊に転属したとの事。練兵場に新設さ  
れた厩に、着物や背広の応召兵が厩当番につい  
てるのには頭が下る。

七月十九日 土曜 雨

第三次近衛内閣成立す。外相豊田海軍大将新任、  
陸軍東條、海軍及川留任す。  
今日は衛兵。雨だ。雨は何日まで降り続く事や  
ら。全く憂うつになる。午前中、行く場所なく  
舎内に待期のまゝ時間を費す。午後、被服手入  
其他なれど、衛兵の準備、特に守則の研究をや  
る。二回目、実に半年ぶりの衛兵に、守則など  
すっかり忘れて仕舞ひ、其上、副官は部隊一の  
ウルサイI曹長。時間が来て自信は無かつたが、  
心臓で行つてパス。火薬庫二番に服務す。

七月二十日 日曜 晴・曇・雨

火薬庫二番、中隊当番。  
日曜日だが、外出は許可されない。何日になれ  
ば許される事やら。雨は幸にも上つた。厩当番  
一番よりみしたが、睡いには全く弱る。夜が  
明けて、控中についてコクリとなる。  
相変らず人と馬は続々とやってくる。将校や部  
隊の出入は劇「激」しい。やつと交代が来て無  
事勤務が明けた時の気持。中隊へ帰るなり初年  
兵がほとんど皆迎へに来て、巻脚絆までほしい

五時起床す。昨日寝てなかつたので睡かつた事。  
然しぐつすり寝た。思ひもよらなかつた旅館で  
の寝心持は素的だった。疊、ふとん。：起床し  
ても点呼もない。朝食の出来るまで、週刊朝日  
の寝ころんで読む。其中に女中が寝床を上げて  
くれた。朝からさしみの御吃「馳」走。全く召  
集解除になつて旅行でもしてる気分だ。朝食後、  
自分一人郡山駅と検査場との連絡勤務の為、ス  
テーションへ行く。駅事務室に居たが、連絡と  
てなく、全く退屈の極み。続々出発し又到着す  
る応召兵の群を感慨深く視める。……………。明朝  
搭載開始、夕出発に。今夜街へ出たかつたが：  
：。

七月十六日 水曜 雨

今日いよいよ積込みをやつて大阪へ発つ。  
目を覚ませば雨だ。雨雨雨。そして汽車搭載、  
原隊へ：。朝食をしてから午後七時十五分出発  
するまでは、実にあわただしい一日だった。上  
げた上げた。上げ通しに上げて仕舞つた。然し  
よく無事に搭載を完了して出発出来たと思ふ。  
僅かだったが愉快だった。こんな街に珍しく感  
のよかつた茶房モナミ、可愛い東北娘：。  
貨車の中より離れゆく東北の街郡山に淡い名残  
りを感じつゝ、雨の夜の東北本線を一路上野へ  
向ふ。

七月十七日 木曜 晴・曇

目を覚ませば列車は大宮附近をばく進して居  
た。午前四時に少し前だ。雨は上つた。僅かの  
てくれたのには驚いた。引続き中隊当番とは。  
今夜は早く寝よう。睡い。今夜、西の宮球場で  
新響の野外大演奏会が行はれるとの事。

七月二十一日 月曜 曇・雨

独軍猛進撃に、モスクワ、最後の日「迫る」。  
中隊当番。例に依り暇な事。退屈な程だ。別に  
特筆すべき事もなく一日を過す。  
此数日来、食事の給与が無茶に悪くなった。ぜ  
いたくは云へぬが。昨日も南京、今日も南京、  
明日も南京？南京、南京には全く弱る。今夜よ  
り急に、第一号廠舎に在る〇〇砲部隊より照空  
演習が始まつた。何條もの光が真暗な夜空に交  
さして何か不気味さを感じさせられる。

七月二十二日 火曜 晴

六月の始めからジメジメ降り続いた雨は、今朝  
くつきり晴れた。空には一片の雲すらなく、夏  
の太陽がカンカン照りつけて居る。兵窓より南  
海の浜が美しくくつきり見える。六甲の山々も、  
神戸の街々も。コバルト色の空、青い海。浜寺  
は賑つてるだらうなあ。海が恋しい。

七月二十三日 水曜 晴

独空軍、大挙「モスクワ」大空襲。  
英米ソ蔣、対日包圍協定成立。仏印蘭印泰の態  
度。米参戦？兵役期間延長。：世界大動乱？日  
〇宣戦？いぜん〇〇は続く。今日も〇砲部隊の  
軍装検査が営庭で行はれて居た。今夜半にでも  
発つのだろう。羨ましい限りだ。今日も海は美

停車で手にした号外に、近衛内閣総 二字欠、  
辞」職を知る。大宮を發つていよいよ東京市中  
へ入る。好きな有楽町附近の通過を楽しみにし  
てたのに、未だ睡る目黒附近より貨物線に入つ  
て東京を遠くうくわいしつゝ、横浜より東海道  
に入つて仕舞つたのにはガツカリした。離れゆ  
く東京に名残りを惜みつゝ、列車は一路大阪へ  
：。

真鶴、熱海：何日再び来る事が出来るやら。四  
十数輛、物凄く長い此軍用列車に、沿線の人々  
は万歳万歳を送つてくれる。これに答へる我々。  
しつかりやらねばと思ふ。途中何度か、戦車や  
装甲自動車を満載した貨車とすれちがった。こ  
の大動員。日ソ戦ふ日のいよいよ近きを感じず。  
富士が見へなかつたのには残念だった。浜松附  
近より空は晴れて、久しぶりに夏の陽がさんさ  
んと照りつけた。九時すぎ列車は吹田に着く。  
これから貨物線をへて、天王寺へ。

七月十八日 金曜 晴

大命、近衛文磨公に三度降下す。  
天王寺を發つてうつゝと寝た。オッサンにゆり  
起こされると、列車はもう府中に着いて、迎へ  
に来た応召兵に依つて積下しを開始されて居る  
ではないか。時間は午前二時に少し前だ。積下  
しを終へ、無事連隊へ帰って床へ着いたら、時  
計は四時を打つて居た。起床ラッパは知らなか  
つた。朝食に起こされたが睡い事。後、申告を  
済して、十時すぎより又床に入り、昼食後も夕  
手入までかやをかぶつて寝る。よく寝た。然し

。十二時家に帰る。突然の帰宅に、母と驚きと喜び。

六月二十七日 金曜 雨

一年ぶりに寝た我家の床。結んだ夢。目を覚せば七時すぎ。ラヂオは朝の音楽、ヴァイオリンをやつた。音楽を聴いて新聞を読む。八時ごろ起き、好物の玉子で朝食をして、ひる近くまでピアノを弾いてレコードを聴く。今日はゆつくりとベートーヴェン「皇帝」。何度聴いても素的だ。時間の経つのは早さに昼前軽い中(昼)食を済し、軍服に着換へて名残り惜くも家を出、難波へ出、地下鉄で淀屋橋へ。雨の散歩道。柳の木の下を、昔を思ひ出しつゝ朝日会館へ。ボワイエの「邂逅」を見にゆく。一年ぶりの会館。アーベント、映画、素的だった邂逅。カーネーションはどうしてるのだろうか。今一度逢ひたい。果して邂逅出来る日が訪れるだろうか、神に祈る。カーネーション。会館を一人淋しく出る。もう三時半。大急ぎで店へ行った。果してあの返事が来たらうか。悲観した。未だ返事が来ないとの事だ。最後の期待も…と思ふと耐らなくなつた。逢ひたい。せめて今一度。不二屋でクリームソーダを飲んで、夢の様な気持で、重い足を引ずつて、希望も薄らいだ雨の連隊へ帰る。

六月二十八日 土曜 雨

起床ラッパは鳴る。昨日の朝と今朝。外は相変わらず劇(激)しい雨。厩へ。雨にぬれねずみに

今日午前午後共、戦用被服庫の使役。

七月三日 木曜 晴

今日も戦用被服庫の使役。

焼けつく様な中を十一時すぎ、初年兵は二泊三日行軍より真黒になつて帰つて来た。

午後宇都宮師団長に御転任になつた前大阪師団長李王塚殿下の御来隊ある。

初年兵疲労の為、本日日夕点呼十九時三十分、八時半消灯す。

後、一人営庭に立つて大阪の空を視む。星が無数に輝いて夏の月が照っている。

今夜朝日会館で、クラブサン演奏会が行はれてゐる。月の光に、演奏会の夜、会館のバルコニーの自分の姿を思ひ出す。涼しい。

七月四日 金曜 晴

連隊本部不寝番一番。

今日は常用被服庫の使役。

使役使役でいつまでこんな無意義な日々を過ぎねばならないのだろう。軍隊へ来て…召集されて、こんな日々を過そうとは夢にも思はなかつた。

噂は消へた。…我々はどうなるのだろう。この要員になつたてなんて云ふ、ぞつとする様な説も出てゐる。…考へれば考へる程解らなくなる…。

今後、外出は願出る事になつたので、明後日願つたら、六日よりの防空演習に師団司令部行きを達せられた。全くセイカイだ。連隊本部不寝

なつて水飼、馬手入…。梅雨期とは云へ何日まで降り続くのだろう。

…こんどこそは、と思ふ噂も次第に薄らいで来て悲観すら出て来た。悲観説なんて自分は聞きたくない。自分は信じたい。我々はどうなるのだろう。心も暗い。何日になれば晴れる事やら。今日は切藁切りの使役。汗とほこりと油にまみれて働く。

一日いや一刻も命令の早からん事を只々神に祈るのみ。

六月二十九日 日曜 雨

今日も目を覚ませば雨。雨雨雨。

一昨日鑑た、ボワイエの「邂逅」がいやに印象に残り、邂逅の二字が我が心に大きくクローズアップされて胸に迫る。

雨の日曜の兵舎で昔の日を思ひ出し、邂逅に邂逅せん事を祈る。

カーネーションはどうしてるのだろうか。今一度逢ひたく思ふが。

六月三十日 月曜 晴

遂に雨は晴れた。幾時よりはお仰ぐ青空さんま

んたる夏の太陽降りに降つた雨が。

厩当番。寝藁が久しぶりに外へ出された。雨の日の厩はいやだ。午後、明日からの初年兵行軍軍装検査の為、馬の大部は出たが、午前中のエラかつた事。六月もいよいよ今日限り。いぜん悲観説が出て全く腐る。…あゝどうなる事だろう。何日まで厩当番に就かねばならないのだろ

番に服す。

七月五日 土曜 晴

連隊本部不寝番で睡かつた事。

今日朝手入時準備をし、八時より防空演習参加部隊の軍装検査があり、午後二時より講堂で防空演習に関する講義がある。明日、香櫨園行きを楽しみにしてたのだが…。然しセイカイだ。愉快に思ふ。明夜は大阪。

夜突然、連隊本部はサット緊張した???連隊長、大隊長、動員当任に公用兵は飛ぶ。???動員??????

〔七月六日〜九日 無記入〕

七月十日 木曜 晴

中部軍司令部に於ける最後の夜は遂に明けた。準備をして十時すぎ、楽しかつたこの生活に

名残り惜みつゝ、〇〇でひつかへつてると云ふ噂と馬の待つ信太山へ…。城内より森の宮へ出、省線で天王寺へ出て驚いた。山の手線停車場は応召兵と欽送者の群で一ぱいではないか。やはり噂は本当なのか。何とも云へぬ気持で特別電

車で信太山へ。応召者の見送りはこゝまでしか許されならしい。続々歩んでゆく応召兵の群。

連隊へ一歩入つて驚いた。この応召兵の群。営内には天幕が方々に張られ、営外との連絡電話

が設置されてつゝある。あわたしき将校の歩み。緊張しきつた顔。続々入隊して来る応召兵。やはり噂は事実だった。〇〇は下令されたのだ。

う。

夜になつて晴れた。夏の星が無数に輝いて月が美しい。今夜、宝塚で東京交響楽団の大演奏会が開かれて居る。何日になれば演奏会へ行ける事やら…。六月も間たゞ中に過ぎた。明日は七月…………。

七月一日 火曜 晴

くつきり晴れてコバルト色の空に真夏の太陽がさんさんと降りそゞいで居る。七月…。七月は再び巡に來つた。召集を受けて入隊した七月が。七月。今月こそはと只々神に祈る。

初年兵の二泊三日行軍で、初年兵は今朝演習に出発した。静かな舎内。古兵のみで出した寝藁のエラかつた事。午前中給与庫の使役で昼寝し、午後ガス演習に行く。府中へ出、アイスキャンデーを喰つて、川へ行き、微風の川辺で昼寝して、四時ごろ隊へ帰る。

パテレウスキーはニューヨーク(ニューヨーク)で逝去したとの事。

七月二日 水曜 晴

帝国、けさ御前会議を開き、「現情勢に対処の重大国策を決定」。

独、伊、ルーマニヤ、スロバキヤ、クロアチヤ、スペイン、ハンガリー、ブルガリヤの八ヶ国、国民政府を承認。汪政権国際的飛躍。新秩序建設に巨歩。重慶政府完全に抹殺。

独、ヴォルガ河の線で、ソ連に最後の止め、鋒を転じて英本土へ?

さすが急だったので、背広や着流しの軍衣の姿がいやに目につき、思はず頭が下る気持がする。誰の顔にもサツと緊張の色が浮んだ。来る可き日は遂に來た。この大〇〇。高射砲員の大召集。防空演習。日〇宣戦布告の日のいよいよ近きを感ず。サアやるぞ。命を捨てゝ、我が大君の御為に…。支給被服の返納を達せられた。???練兵場に厩が急造されて居る。馬の徴発にN少尉の一隊は北海道へ発ち、二十二、二十五、三十一部隊等より兵隊が乗込んで來た…。自分も何日突然出張を命ぜられるかも知れないので、中隊より放れる時は事務室と連絡を取る様にとの事。???

七月十一日 金曜 曇・雨

信太山へ帰つての第一夜は明けた。南京虫と蚊と蒸暑さで寝苦しかつた事。目を覚ませば厩へ。馬馬馬…。朝、襦袢、袴下、水筒、飯ごう、巻げはん等を全員返納す。被服全支給品返納、新品支給は何を意味するか???息つく暇もなく、寝台は全部返納し、続々入隊して来る応召兵の為、二班は階上へ上つた。今日は給与庫の使役。…連隊内いぜん目の廻る様だ。伝令は飛ぶ。使役兵。続々と到着する応召兵…。

七月十二日 土曜 雨

目を覚ませば今日も劇(激)しい雨が降つて居る。雨雨雨。梅雨も上つたと思つたのに。何日まで降り続く事やら。雨の中を今日、加古川の〇〇砲連隊へ行く召集兵たちは、新しい軍装も

六月十六日 月曜 晴

いよいよ明日に迫った饗庭野行きに、いぜん腹具合が思はしくないが、今更どうにもならず、午前九時よりの軍装検査を受ける。検査最中に診断だと云つて来たが、今頃どうなるか。激務休の患者を演習に参加させるなんて、先の週番下土に全く腹が立った。昨夜から食事をしてないので、昼から行はれた汽車搭載の苦痛。準備は完了した。もうどうあつても行く。当分お別れになるので久しぶりに酒保へ来、丁度来合せた高田に例の船舶第二次要員の件を語ると、彼の喜び…。彼を喜ばせてやろうと思つたら、彼は自分に又々素晴らしいニュースを聞かせてくれた。今日遂に高田の経理部入の命令が出ない事について、主計中尉より彼を呼んで、「実は船舶砲兵隊要員は近く召集解除になる予定だから」と、明確に云つたとの事。第二次要員の召集解除になった事と共に、いよいよ近く確実らしい???彼の言葉を聞いて夢の様な気持ちでならない。

六月十七日 火曜 晴・曇・雨

饗庭野へ出発の朝。午前二時半起床。三時五十分、折柄降りしきる雨の中を信太山へ。一番電車で天王寺へ出、未だ覚めやらぬ大阪の屋根を大阪駅へ。五時四十八分発東京行き列車にて施所へ向ふ。車窓雨に煙る京の街を一年ぶりに視めつゝ、七時頃施所(膳所)に着けば、先着の貨車より既に馬が全部下されてあつたのには思ひがけなくも全く嬉しかった。砲車を下し、八

のだろう、盛にドンドンやりだした。其度にガラス窓が大きく震へる。いくら睡ても睡い。まるで演習場へ昼寝に来た様だ。又原隊へ帰らねばならないかと思ふといやになる。樂してるので、当分エライ事だろう。

六月二十二日 日曜 曇

独、突如対ソ宣戦布告。

二十二日午前五時独大軍は国境突破し、未曾有の大進撃開始す。

独空軍数千モスクワ猛爆。戦線実に七百余里。ルーマニヤ、フィンランド両軍もソに進入し、伊も対ソ宣戦布告す。世界は正に大動乱へ…。来る可き日は遂に来た。日独伊同盟に依る日本の態度? 帝国対ソ宣戦布告か???面白くなつて来た。

六月二十三日 月曜 曇

独羅連合軍奮戦。ソ軍早くも後退。当面目標はハリコフ、オデッサ大爆撃。奮波北部の要地失陥。伊、海軍で協力。地中海で英ソを阻止。英ソを強力支援、ウオロシーロフ元師国防相就任、赤軍総指揮。相変らず陰気な今にも降り出しそうな梅雨空。今日も朝からドンドン砲撃をやっている。独ソ開戦と日本の動向?今日は砲声がいやが上に力強く聞へる。来る可き日、待望の秋は遂に来るだろう?我々船舶砲兵隊の活躍。ソ連空軍は大挙空襲して来るだろう?我陸海空呼してウラヂオストックを攻撃するだろう?動員?動員?今日は入浴当番。将校は演習より帰

時雨の大雨を発ち、雨上りの比良山ろくをチリチリ照りつける夏の陽を一ぱいに浴び砲車にゆられ、眼下に画の様に美しく静かな琵琶湖を視めつゝ、夕方近く近江舞子に到着。白い砂の松原に馬撃場を設置し、今夜はこゝで露營。明払曉こゝを發つて、今宵同じこの畔に露營している各部隊相前後して、湖畔を一路饗庭野へ向ふ。宿舎だと云つてたが、思ひがけなかつた舞子の浜での露營。：幼き日、姉とよく来たこゝ。姉とよく通つたこの道、この浜。へびの出ると云つてたあの大きな杉…。厩当番について夕闇迫る湖畔を視めつゝ。

六月十八日 水曜 晴・曇

○時十五分厩当番を明けて、宿舎のお寺へ行く途中、Kさんの家を見出した。懐かしかった。訪ねたかったが、こんな深夜では。宿舎へ入つてごろ寝をしたと思つたら、三時に起された。蚊と寒さには弱つた。四時朝食を済し、四時半集合、六時前近江舞子を後に、すがすがしい朝の湖畔を一路今津へ進む。白ひげ神社の前を通つて：意外に早く十時前今津の町へ入る。この橋、この郵便局、この神社、何もかも昨年のもゝだ。あれからもう一年も経つたのだ。入隊して間なし、不安な気持ちで歩いたこの町を感慨深く通る。十時、思ひ出の廠舎に入る。早速に馬手入だ。午後は休みだつたが、馬料上げの使役に行き、全くエラかつた事。一寸サボつて酒保で飲んだビールの味。夕方達せられて、今演習間、一号廠舎将校宿泊所勤務を命ぜられ、荷物

つて入浴に来るし、燃へずに全く上げて仕舞つた。

〔六月二十四日無記入〕

六月二十五日 水曜 晴

独軍ソ連要塞突破。国境線を百軒突入す。主力大決戦迫る。独空軍レニングラード、黒海のソ艦隊を猛爆。撃墜破既に二千。匈対ソ断交。帝國閣議頗る緊張す。

演習最後の日の今日は、朝来素的に晴れた。琵琶湖が青く満々たる水をたゝへて居る。最後の破声も静まり、午前中を以て演習は終了した。正午部隊は解散した。一時より二十七部隊がトップで汽車搭載を開始。一まず廠舎へ帰つて夕食。六時、ガソリンカーにて今津を後に、行軍して来た道を車窓より感慨深く視めつゝ、夕暮迫る湖畔を一路大津へ。八時前浜大津着。夜の街大津を歩いて大津駅へ。八時四十四分発姫路行きに乗る予定が、列車事故の為一〇〇分遅延、十時十分大津発。久しぶりに夜汽車の旅行気分を味はいつ十一時すぎ大阪駅へ着き、省線で天王寺で十二時発終電車にて信太山へ。

いぜんに比し全く少なくなつたものゝ、未だ青白く小さなニヤケタ非国民が酔っぱらつて乗っていた。何の為我々は激しい演習を続け、何十万の皇軍が戦っているのだと思ふと、ブン撲つてやりたい気持ちで一ぱいだつた。一時前信太山着。折柄降り出した雨の中を、一時すぎ連隊へかへる。

をまとめて行く。セイカイだ。

六月十九日 木曜 雨

雨。四時起床した。雨の中を遠く離れた廠舎へ食事を取りに行き、将校の朝食準備と中食仕度の忙しかった事。全く上げて仕舞ふ。雨の中演習は開始されて、将校連は出て行つた。後仕末をやつと終へてホットした気持ち。これから夕方まで自分の時間だ。皆は山で猛演習をやつてる事だろうに。雨に泥まみ(泥まみれ)。

六月二十日 金曜 曇・雨

上げた朝食の準備も今朝は馴れた。演習に将校が出て行つて、後片付をし終つた時の気持ち…。もう夕方まで何もする事はない。退屈な事此上もない。山では泥まみれになって激烈な演習が続られて居るのに。昼寝をす。夕方余りの退屈さに酒保へ行つてSと飲んだビールのうまさ。ニュース。：原隊より重用事項打合せの為、N曹長が到着した。部隊当番の話では、盛んに「船載砲要員」と云ふ言葉が交されて居るとの事。今夜深更に到つた部隊長、副官、T大尉の会談は何か???何かある、近く。動員か?解除か?

六月二十一日 土曜 曇・雨

相変らず物凄く蚊と虫と寒さになやまされて睡れなかつた。夜中相当降つてた雨も朝には上つた。然し山は泥々だろう。部隊の苦勞を察する。今日も朝の仕事を終へて寝る。はひの多いのは全く弱る。宿泊所のすぐ裏山に砲列をひいた

六月二十六日 木曜 雨

床へ入つたらもう二時を打つてた。我々は七時まで就寝を許可された。ぐつすり寝た。朝食後休養だ。久しぶりに会つた懐かしい友。あの噂の最中に演習に発ち、演習場で聞いた素的な噂の数々にハリキツて帰つて来たのに。帰つてみて意外に噂が薄れていつてるのに悲観し、耐らなく心配になつて来た。我々はどうなるのだろうか?全く気が苦ひそうだ。雨の中一時より府中駅にて砲車馬匹の積下し作業が開始。三時すぎ終り、隊伍を整へ隊へ帰り、こゝに部隊は解散す。後、急の達しで、演習参加者全員、今夕食後外泊を許可との事に。全く嬉しかった事。夕食もせず準備し申告をする。みんなの顔は崩れそうだ。外泊外泊、入隊して始めての外泊。物凄く降つてた雨も小降りになった。六時半隊を出、夕暮の信太山駅へ。折よく来た急行で大阪へ大阪へ、夜の大阪へ。七時、夜の大阪へ着く。先ず地下鉄で心齋橋へ出る。今夜は時間に制限もない。難波で下車、夜の心齋橋へ。一年ぶりの夜の心齋橋。メツチェン群。素的だ素的だ。何とも云へない。T兵長とUとSと四人バーに飛び込み、とんかつを喰つてビールを飲む。ぐつと飲みほしたビールのうまさ。バーを出て新ぎんざへ行く。飲んだ飲んだ、愉快だつた。愉快で愉快で耐らなかつた。今頃点呼をやつてるだろうと思ふと。こんな世の中があるのだと思ふと。十時頃こゝを出て、もう人通りも少ない雨の心齋橋を一人帰る。昔の夜を思ひ出しつ

薫風の六月……。

外出者は楽しそうに出て行った。今日は当然出るられる番だのに。全く腐つてる所へ、Nの交代へ炊事へ行く。憂鬱の極み。昼の休憩時に一人分院へ友井を見舞に行く。丁度日曜に、何処かのメツチェンのグループが沢山慰問に来て居た。ピンポンをする者、オルガンを弾く者、彼等が一寸羨ましく感じられた。…六月。自分等は果して征けるのだろうか？夜、厩当番一番に服す。

外出はなく其上炊事の交代で厩当番で腐つてる所、遂に自分の夏略衣を十二月初年兵のNが着てたのを発見したので、ぶん撲つてやった。軍隊へ入って始めて。

六月二日 月曜 晴

厩当番一番。朝手入後、師団馬検査準備の為、馬は一頭も残らず水洗ひに川へ出て行った。馬の居ない厩当番。午前中は全くセイカイだった。昼すぎ馬は帰って来た。午後、月例身体検査がある。少しやせた。夜、勤務を明けて入浴に行きたかったが、夏服返納で忙しく行けなかった。

六月三日 火曜 晴

明日に迫った師団馬検査に五時起床。川へ水洗ひに行く。今日は乗馬で。暑かったが愉快だった。裸馬に裸でまたがって、川の中で洗った気がした。

馬にも自信がついて来た。清い流れ、青い堤、

遠い峰の入道雲…。夏だ…。

午前中で馬洗ひを終り、連隊へ帰って午後引続き馬手入。

中支より帰還兵が還つて来た。夜、返納被服整理に、床へ入ったら十一時が過ぎてた。睡むかった事。

六月四日 水曜 晴

師団馬検査。南京虫と蚊に悩まされつゝ四時半起床。六時頃より最後の馬手入をなし、八時より検査は始まる。一頭一頭、厩庭にて。優秀な成績に終了。午後、給与庫の使役。仕事なく倉庫の中にて睡る。二三時間もぐっすり睡たか。いくら睡つても睡い昨年。

検査は済んだ。いよいよ明日は外出だ。九時消灯……。

六月五日 木曜 晴・雨

ぐっすり睡つた。今日は外出。馬手入を終へて舎内の水洗してやつと、九時宮門を出る。…さすがN少尉の週番だ。…大阪へ着けば十時。一人、大鉄で志ることを喰つて地下鉄で店へ。久しぶりにショパンの協奏曲を聴いて、正午帰宅。突然の帰宅で母の喜び。そしてピアノを弾いて、母と松坂屋へ食事へ行く。とんかつを喰べたかったんだが無く、ピフテキを喰ふ。うまかった事…。藤田が留守宅を毎日の様に訪ねてくれるとの事…。若し自分が戦地へ行ったら、還つてからの資金に何か店を出したいとの母の気持ちに涙が出た。…兄は節格いい勤先があつたのに

止してブラジルへ行くとか…。兄には悩む。考へねばと思ふ…。後、丸井を訪ね、再び心斎橋へ出、折柄降り出した雨の中を信太山へ帰る。

六月六日 金曜 晴・雨

目を覚ませば雨は激しく降っている。今日は給与〔養〕庫の使役。

点呼時、饗庭野演習参加者の発表がある。噂は聞いてたが、砲手として自分も達せられた。各中隊共、船載砲要員は饗庭野演習には参加しないのだが、若しも演習中に命令が出る様な事はないだろうか。耐らなく心配になって来た。一応准尉に話してみようと思ふ。航空兵科への転属希望者有無を聞かれたので希望したが、同じく達しあつた自動車要員共、船載砲要員は駄目との事。それを聞くと、征ける事は征けるらしい。

六月七日 土曜 晴

厩当番二番。

午前中兵器庫の使役。午後饗庭野演習参加部隊演習に参加。演習のある予定だったが中止となり、夜、厩当番二番に服す。

六月八日 日曜 晴

厩当番二番は異常なく明けた。今日は日曜。勤務を明けた後の気持…。夜明け方相当冷へて薄ら寒さを感じたが、素的な上天気だ。

外出者は楽しげに出て行った。いつも乍ら彼等の後姿を羨めしく視めつゝ見送る。灯の消へた様に静かな中隊で、種々考へぬいた上、結局思ひきつてカーネーションへの便りを、若場に代筆して貰ふ可く手紙を書く。果して逢へるだろうか。昼から友井を病院に見舞に行く。涼しい木蔭。静かだ。久しぶりにオルガンを弾く。きれいなメツチェンが沢山慰問に来てた。彼らが羨ましく感ず。友井より、「娘時代」を借りる。

六月九日 月曜 晴

饗庭野演習参加部隊の演習第一日。第三分隊の三番砲手だ。全員集合して堂々山へ行く。運動の後、砲列布置、砲撃…。中隊の十榴すら何も解らぬのが、各中隊選抜優秀砲手の中に入って、しかも野砲で、何が出来るか。全く中隊人事の出たら目には、あきれると共に全く弱つた。其上、三分隊の第二中隊では三番砲手がぐら置きたと云ふ。武装…。

六月十日 火曜 晴

今日は分隊教練。勝手の異ふ野砲砲手として。全く弱る。午前午後共演習。然し中休みの長いだけセイカイだ。一時間近くの休みにぐっすり睡る。夜中二時頃目が覚めたので、四時半頃まで例の「娘時代」を読む。中々面白い本だ。例の手紙を、今日大阪へ公用に出たKに依頼し

て出して貰ふ。果して返事が来るだろうか。

六月十一日 水曜 雨

劇〔激〕激しい雨が朝から降つて居る。演習中止かと思つたら、委員砲廠へ集合だ。そして演習をやる。雨の日はいやだ。

六月十二日 木曜 晴

演習に行くたくもあり、又いやな様な気持。いぜんとして腹具合悪く、今日演習ないのを幸、診断を受ける。就業激務休。

六月十三日 金曜 晴

起床同時病馬厩へ行く。今日饗庭野行の演習があり、交代でも出してゝくれたらうと思つてたら誰も行かず、結局三分隊は三番砲手欠のままやつたとの事。相変らず退屈此上もなく、ボソッと長い一日を過す。然しこゝの厩当番なら毎日ついてもと思ふ。

六月十四日 土曜 曇・雨

初年兵準備射撃が例に依り浜寺海岸に於て行はれるので、全員午前四時起床だ。初年兵が出発して後、退屈だった事。昼からウトウトして居たら、富士演習参加者が帰つて来た。非常にエラかったとの事だった。

六月十五日 日曜 晴

明日から饗庭野行きだ。体に自信がなかつたのに、当分演習に行くのだから断然出る。當門を出るなり丁度来合せた本線葛葉行バスに飛乗る。いつも演習で重い足を引ずつて通る道を、今日はバスで。素的な上天気、美しい景色。意外に早く葛葉へ着いた。山の手線と異つて電車はすぐ来た。懐かしい本線。景色も問題ぢやない。丁度途中だったから、住の江で下車して兄を訪ねる。子供の喜び。断然今後本線に決めて、十時前家に帰る。今日はバカに早いので、着物に着換へて藤田を訪ねる。着物を一年ぶりに着て、やはり素的だ。後、帰宅して、レコードを聴きピアノを弾く。今日はゆっくりする。一時、藤田が来たので心斎橋へ出、久しぶりに彼と心ブラし、四時四十分発で帰る。腹具合いぜん悪く、不二屋のクリームソーダも月ヶ瀬の冷しるこも喰べられず、未練を残して隊へ。

雨の厩はいやだ。昼休みに、急に中隊当番を達せられ引つぐ。明日こそはと外出を楽しんでたのに。

五月十八日 日曜 曇

今日の日曜日こそはと楽しみにしてた外出。外出簿にまで名がのつてたのに、昨日達せられた中隊当番で取消されて仕舞ふ。先月三十日の延刻外出は二十九日に変更され、当然出らる可き四日は厩当番。十一日も厩当番。そして今日は中当なのだ。全く腐った。朝から陰気な雨空だった。が、週番士官T少尉で八時呼集して出て行った。残留者は舎内の清掃だ。全く泣くにも泣けない気持だった。検査検査の準備で体は綿の様に疲れきって仕舞った。あと一週間待たねばならない。我々はどうなるのだろう。何もかも絶望だ。

五月十九日 月曜 晴

「命に依り、船載砲要員氏名至急明日二十日八時までに提出せられ度し」。動員室より中隊への通達だ。……船載砲要員……至急……氏名……提出……動員室……思ひもよらなかつた此通達に全く夢かと思つた。通達を持って来た船載砲要員の顔もくづれそうだ。征ける???夢にも忘れなかつたあの懐かしの船舶砲兵隊へ?我々はこの通達をどんなにか夢み待ちに待つた事か。それが今現実とならんとするのだ。やれ通達が来たとか、要員氏名の提出したとか、何度この通達が噂され、喜びもつかの間消へ去つた事か。其

五月二十五日 日曜 曇・雨

厩当番一番。待ちに待つた今日の外出。実に一月ぶりの外出だ。折から降り出した小雨の中を防雨外套着用で出る。電車のスローで大阪へ着けば正に十時すぎだ。さすが大阪はいい。一月ぶりの大阪。例により店へ行つて、シエラザートを聴き帰宅す。一月ぶりの我家にくつろいで聴いたエンペラーの素晴しさ。……そして母に、或は命令が出そうだと喜びを一寸語る。……後、藤田を訪ね、心齋橋へ出、新ぎんざへ行き、衛生兵のUと会つたのでアルハンブラと「教文字欠」へ行つて、四時四十分発で信太山へ。……後、厩当番に服す。

五月二十六日 月曜 曇

厩当番一番。午前中初年兵分業演習と新馬、放馬運動で馬の大部が出て行って全くセイカイだった。が、午後俄に降り出した雨に馬は全部帰つて来るし、寝わらを厩内に積まれるし、戦場の様な雑(騒)ぎに全く弱つた。勤務を終へて、入浴に入った気持は何とも云へぬ。Y上等兵は、我々船載砲要員は来月二三日に召集解除だと、何処から聞いてきたのか一寸喜ばせてくれたが、船舶砲兵隊要員の派遣があつた様に雑(騒)がれ喜ばれて居たのに急に噂は消へて、悲観説が俄然有力になつて仕舞つたのには悲観す。

五月二十七日 火曜 曇

海軍記念日。然し陸軍には何等関係はない。友

通達が、今この目でしつかと見たのだ………：………。感慨無量……。嬉しくて嬉しくて今の気持は書現せぬ。さあやるぞ、力の限り……。耐らなく嬉しくなつて来た………。

五月二十日 火曜 晴

船舶砲兵隊要員の誰も彼もが待ちに待つた素的なニュースがもう各中隊にパツと拡がつてか、誰の顔も見ても崩れそう。輸送指揮官は四中隊のG准尉だとか、十日以内に出発だとか、何処から耳にしたか、噂は噂を作る。昨日の朝まで誰もかもう行かないだろうと悲観し、この数ヶ月は噂すら出なかつたのに。恐らく征けるものなら船舶砲兵隊へ行けると思ふが、野砲兵第一〇四連隊だとか、輸送監視隊だとか、新設部隊だとか? 然し征ける事は確実らしい。

五月二十一日 水曜 晴

確定???情報を集めればいずれにしろ征けるらしい。昨日出る可き予定の高田の経理室入りの命令は取止めとなり、五中隊より要員中から富士の演習参加者は突然交代を命ぜられたとの事……。然し果して船舶砲兵隊へ行けるか?今日何処からか、一〇四へ補充する為に船舶要員解除を宇品へ申込み、返答次第でどうなるか解らぬなど云ふ悲観説も出た。???

五月二十二日 木曜 曇・雨

今日は木曜日。中隊当番について五日も過ぎた。

井は急に今朝信太山分院に入院して仕舞つた。何処が悪いんだろう?熱もなし只エライと云ふのみで、胸だろう?と云つて入院してしまつたのだ。つくづくヤブ医者だと思ふ。入隊以来、彼とは全く苦楽を共にして来たのに。さすが淋しさを感ず。若し命令が出たら恐らくは別れて仕舞はねばならぬだろう。……今日は放馬の監視。中隊では経理検査準備で全く上げてるのに、セイカイだ。薄ら寒さを感じず。夜は十一時まで延灯で準備だ。何故こんなにアゲねばならぬだろう。

五月二十八日 水曜 晴

くつきりと晴れた。初夏の朝だ。信太の丘の彼方の雲も初夏を思はせる。今日もYと放馬の監視だ。青草の上に半ば横になつてると、ついウツツとして来る。そしてカーネーションの事を思ふ。どうしててるのだろうか。戦線へ発つまでに今一度逢ひたく思ふが。午後の陽はチリチリと照りつける。夕暮ゴルフ場よりの帰りか、山から下つて来た美しいメツチェンと話す。

五月二十九日 木曜 晴

今日は厩当番の中間交代。昨、一昨日の放馬の監視で楽をしたのでエラかつた事。準備準備で上げ通しに上げた今日の経理検査は、監視もなく終了す。全くきつねにつまゝれた感じだ。さすが検査を終へた安堵と、今日急に発表された明日の検閱慰勞休暇で、みんな急

早いものだ。相変らず暇な事。此頃日の経つのが無茶に早く感ず。今日は別にニュースとて無かつたが、家へ便りをす。夜になつて雨がバラついて来た。

五月二十三日 金曜 晴

起床前まで劇(激)しく降つてた雨は、起床ラッパが鳴つた頃よりカラリと晴れて素的な天気。……コバルト色の空、雨にぬれた新緑が朝日にまばゆいばかりに輝いてる。朝食時、下士集よりラヂオのレコード演奏でベートーヴェンの交響曲第七番が流れて来た。素的だった。俄然悲観説が有力になつて来た。単なる調査に過ぎないと云ふ……。何だか耐らなく不安になつて来た。悲観していると、日夕点呼の時T少尉が突然、「山北待望の時が来た。戦地へ行けるぞ。……或は還れる方で早いかも知れんが」と思ひもよらなかつた事を云はれた。征ける???還れる???夕刻、人を遠ざけて於(行)はれた秘密の中隊將校集合は何を物語るか???何が何だかさっぱり解らなくなつて来た。

五月二十四日 土曜 曇

今日の昼前達しがあつて、中隊当番は下番になつた。経理検査準備で目の廻る様な内務班へ帰らねばならないのかと思ふと残念だったが、いよいよ明日の日曜日こそは約一月ぶりに待望の外出が出来ると思ふと嬉しい。楽だつた一週間。この一週間は無茶に早かつた様な気がする。

に朗かになつて仕舞つた。思ひがけなくも一日には外出だ。心配してた勤務もない……。

五月三十日 金曜 晴

検閱慰勞休暇。古兵のみ外出を許可され、八時前外出者は出て行つた。残留者、午前中舎内の清潔とある。慰勞休暇に、何処まで使ふのだろう。然し思ひがけなく今日の休みに、明後日に外出できる喜びに、初年兵を指揮して、久しぶりに軍歌を思ふ存分歌つてやる。午後は休与(養)。酒保へ行つて、一度撮らう撮らうと云つて今日やつと、酒保の裏庭に高田と写真を撮る。後、前田と高田と三人病院へ友井を訪ねる。白衣の勇士?全く呑気そうで一才羨ましく感じた。夜、夏衣服三装甲外出用の支給がある。程度がいいので断然気をよくする。明後日はこれを着て外出だ。

五月三十一日 土曜 晴

五月も今日が最後。いよいよ明日から六月だ。今日はMと放馬の馬看守。さんさんと降りそぐ五月の太陽の下で。明日は外出だと思ふと全く嬉しい。

然し点呼後、外出者の達しがあつたが、意外、自分の名は無かつた。全く意外だ。無茶だ。明日は当然出る番に。七月組は全部外出するのに。勤務勤務に一月も外出出来ず、やつと二十五日に外出出来たと思つたら。……全く憂鬱だ。

六月一日 日曜 晴・曇  
厩当番一番。

五月三日 土曜 雨

厩当番一番。  
今日は砲廠の検査で、今日も準備の為全員午前四時半起床だ。

後、雨がパラついて来たが、遂には本降りとなる。昨日厩当番中間交代をしたのに、今日は上番厩当番、しかも一番だ。三十日の外出を二十九日にこみ上げられ、当然明日は外出の番だのに。全く無茶だ。無茶にも程がある。中間交代と勤務は一日置きなんだから。まるで召集されて厩当番をしに来たかの様だ。  
戦線へ征きたい。そして思ふ存分戦ひたいのだ。おゝ懐かしの船舶砲兵隊。

五月四日 日曜 曇

厩当番一番。  
楽しみにしてた今日の外出日。何もかも目茶苦茶だ。今にも降りだしそうな空模様寝わらを厩内に積まれる。然し今日の外出は、明日よりの検査準備の為と本日初年兵父兄会がある為取止めになったのには、いさゝか腹の虫も収まらなかったが残念だった。明日いよいよ中隊の被服検査だのに何も準備出来なかった。

五月五日 月曜 晴

いよいよ今日は中隊の被服検査。何の準備も出来ず、上げ通しに上げて遂に今日となったが、どうにか事なく済んだ。全く検査検査に苦勞する。

五月六日 火曜 曇

カーネーションの夢を見た。どうしてるのだろうか？今一度逢ひ度く思ふが。  
今日はSと医務室の使役。夕刻三十四連隊より約三百帰還す。

昨日やつと中隊の被服検査が終つてホッとしたのもつかの間、明後日連隊の検査があるとの事。舎内は準備に全く戦場の様だ。何から手をつけていいか。全く上げる。一分の暇とて無いのだから。検査検査でこんなに苦勞するとは。十時まで延灯。然し内務班の仕事で自分の事何一つ出来ずに床に入つて仕舞つた。やつと自分の体に残つた喜び。目をつぶればもう朝だ。目の廻る様な朝が。いつまでも起きていて、この今の気持を味はひ続けたいと思ふが。自分の時間、自分の体。

五月七日 水曜 晴

今朝戦友が決つた。自分の戦友は同志社大学出で、しかも福岡と親友だと云ふ梶本だ。何かの縁か？世の中は広い様でせまいものだと思ふ。初年兵達は大津川へ引率されて、自分とそして戦友の古兵の洗濯物を持って洗濯に行つた。準備せねばと思ひつゝも準備する時間も無く、全く上げる。上げた上げた、上げられるだけ上げた。十一時まで延灯だったが、床に入つたらもう十二時も過ぎていた。検査検査に全く苦勞する。

五月八日 木曜 晴

連隊本部不寝番一番。

もなく残念だった。ずい分帰らないので心配して来てくれたとの事だった。  
五月十三日 火曜  
厩当番一番。  
目を覚せば雨だ。今日、明日の兵器検査準備で午前中砲廠へ行き、午後厩へ行く。睡かつた事。夕手入時歯科診断に行つて、大急で帰つて厩当番勤務につく。明日の起床は三時だとか。  
今日勤務につけば、今日の日曜こそは喰ひ込む様な事はなからう。

五月十四日 水曜 晴

厩当番一番。  
師団兵器検査で全員午前三時起床だ。然し勤務者は別とあつて、「起床」の声もうつゝに午前五時半起床し厩へ行く。もう馬手入は済んで、五時半より正味六時まで勤務した。長かつた事。然し今日は中隊に居て検査に上げるよりは、勤務について居てよかつたと思つた。

五月十五日 木曜 晴

明後日に迫つた馬検査に、今日は昼食携行、全員まつきよ川へ馬洗ひに行く。連隊各中隊隊人馬の列は続く。正に壯観だ。六中隊は各中隊よりうんと上流で、各々裸になつて川の中で馬を洗ふ。馬にまたがり馬の体中石けんをつけて水をぶっかける。青い堤、清い流れ、ジリジリと照りつける初夏の太陽、遠い山の峰の雲ももう夏だ。自然はいいと思つた。暴れる馬。一日を馬

連隊経理検査の今日。起床同時又しても厩当番交代に。何の準備も整理も出来ず厩へ行く。もう今となつては絶体絶命。午前中厩陣営具検査に上げた上げた。厩当番本来の任務より命ぜられるまゝに、其方でフラフラになる。ボロは遠慮もなくたまる。舎内の事が心配だ。泣くにも泣けぬ気持だった。厩の準備の最中に、隊長以下巡視に来た。ボロが取つてないと、厩週番上等兵は大隊長より叱られていた。然し仕方ないが軍隊では通らぬ。巡視が終つてホッとする暇もなく、中隊の検査を終へて水飼に来た。検査前に自分の寝台の下につゝこんであつた真黒の略衣作業衣が出て来た。班長が怒つてるとの事だ。絶体絶命。厩として舎内の二つの件に、当然受く可きものは受けねばならないだろうと思つて、夜の点呼は遂に来た。点呼中は全く生きた気持はしなかつた。内務班に集合。然し幸、今日本部不寝番に舎内を飛び出す。

五月九日 金曜 晴

慰勞休暇とは名のみ。午前中兵器庫の使役、午後になつて下士官集会所に於ける映画「土と兵隊」を見る。此前と同じく画面の暗いのとよく切れるので睡て仕舞ふ。然し以前見た此映画を、今兵隊として見て別の感がした。

五月十日 土曜 晴・雨

此間還つて来た帰還兵は今日召集解除になるのだ。夜中の雑「騒」がしなかつた事。苦しい思ひ出とそして喜びに、睡むれなかつたのだろう。

洗ひに過して、見異へる様に美しくなつた馬にまたがつて、日に焼けて真赤になつて夕方連隊へ帰る。  
皇后陛下には本日関西に行啓、京都皇宮に入らせらる。

五月十六日 金曜 晴・雨

ふと目にした新聞に、ドイツ副総統ヘス氏が突然飛行機にて敵国イギリスに脱出せしとの事、驚く。今日は蹄工場の使役。中隊ではいよいよ明日に迫つた連隊の馬検査に、午前中は最後の馬手入に、午後中隊の馬検査に物凄く忙しそうだったが、退屈すぎる程呑気な一日を過す。夜俄に降り出した雨に、真暗な中で雨にぬれて入れた寝わらのエラかつた事。今夜有る可き作業衣袴の検査はなく、ホットした。点呼後、班長室で陣営具検査の為のペンキぬりをし、班へ帰つたら十一時過ぎていた。外は雨だ。

五月十七日 土曜 雨

中隊当番。

目を覚せば昨日の雨はなほも降り続けている。今日は連隊の馬検査だのに。自分はM中尉の使役で常用被服庫へ行く。今日は別になす事もなく時間を過す。午前中の使役を終つて厩へ行く。正に馬検査の最中だ。この数日全く汗みどろになつて手入したのに、皮肉にも雨は増々劇「激」しく馬も人もずくぬれだ。靴に水が入つて来て足は泥々。いやに冷へて無茶に寒さを感じず。やつと検査は終つたものゝ、昼飼時の混乱たるや。

五月十二日 月曜 晴

近づいた馬検査の準備で今日は厩修理の為の砂取の使役。今日は馬を使用せず車を引いて、何日も行く川へ砂取りに行く。指揮者は上等兵に我々六名。全くセイカイだ。休憩、休憩、休憩。外はいいと思つた。そして喰つた喰つた。……一寸エラかつたが愉快な一日だった。六時前連隊へ帰ると面会との事。母が来てくれていた。三時間も待つたとの事だったが、面会時間

何日の日我々にも此朝が巡り来る事か。目を覚せば雨だ。起床時より戦用被服庫へ、解除者被服受領と整理に行く。九時、彼等は雨の中を喜ばしげに帰つて行つた。今日は一日中こゝの使役。中休みにウツツとしてカーネーションの夢を見る。睡い、実に睡い。今後より雨は上つて天気となつた。明日の外出が楽しみだ。

五月十一日 日曜 晴

待ちに待つた今日の外出。然し自分の名は無かつた。三十日の外出が二十九日にこみ上げられ、四日には出られるだろうと思つたのに、喰ひ込みの厩当番で外出なく、今日又々出られず全く悲観す。そしてしかも朝になつて病馬厩の厩当番に行つてくれとの事に腐りきつて仕舞ふ。余りにも無茶苦茶だのに。全く鬼みたいだ。然し初年兵は午前中初の引率外出で出て行つたし、又二三日後に迫つた師団兵器検査に、残留古兵全員兵器庫の使役との事に、馬一頭きりの厩当番で返つて楽をしたと思ふ。

五月十二日 月曜 晴

近づいた馬検査の準備で今日は厩修理の為の砂取の使役。今日は馬を使用せず車を引いて、何日も行く川へ砂取りに行く。指揮者は上等兵に我々六名。全くセイカイだ。休憩、休憩、休憩。外はいいと思つた。そして喰つた喰つた。……一寸エラかつたが愉快な一日だった。六時前連隊へ帰ると面会との事。母が来てくれていた。三時間も待つたとの事だったが、面会時間

だるうか。第一期検閲を数日の後に、今日より分戦。

起床同時、厩当番交代に行く。朝早く実にはエラかった事。夜、又歯が傷み出し弱る。

四月十八日 金曜 晴・曇

陰気だった空は昼前よりカラリと晴れた。午前中兵器庫の使役。午後急の達しで、検閲予行編成に九番砲手を達せられ、始めてのくら置き。しかも武装をせるものの、又く上げて仕舞ふ。このまゝの編成で検閲を受けるとすれば全く弱る。砲列を敷いて射撃をするにも何も解らないのだから。夜は十時頃まで、他の編成で夜間射撃演習があった。

四月十九日 土曜 晴

午前中練兵場で昨日のまゝの編成で演習があった。汗ばむ。後武装準備で、午後中隊長の軍装検査がある。始めてのくら置きに上げた上げた。本日上番厩当番二番だが、夕方より馬術に出る。一寸自信が出来て来たが、結局馬術を終へて夜の厩当番復務時間も過ぎ、中隊へ帰って寝る。

四月二十日 日曜 晴

午前一時起床。厩へ行く。友井と共に……………夜中放馬もなく喜んでたのに、起床ラッパが鳴って馬手入に来る間際になつて放馬し、朝の馬術に馬具が不足してるとの事に、全く弱つて仕舞った。今日は日曜。やっと厩当番を明けてホ

ッとする暇もなく、舎内の清潔整頓。十時すぎやつと終つて酒保の裏庭へ行く。睡い。前田と青くなつた桜の木陰で横になつて仕舞ふ。午後酒保へ行って、牧村と前田と話し乍ら又寝る。目を覚せば三人のみ。日はもう西に片向いて仕舞つてた。未だ睡むい。日曜日の夜。

四月二十一日 月曜 曇

松岡外相帰朝の途、満ソ国境に到着せりと。宮球発熱に夜中又々たゞき起され、獣医室へ。馬馬馬……

検閲の為、午前五時起床。九番砲手で弾薬車長の馬に武装をし、六時すぎ集合して山へ。七時すぎより検閲は始まる。エラかった事。やつと午前中検閲を終へ、ホットした気持で午後友井と砲車の手入。だが余り疲れ切つてか、中休のまゝ睡つて仕舞ふ。睡く体中がだるい。一度ぐつすり寝てみたと思ふが。点呼で明日、又々厩当番中間交代を達せらる。昨日明けたところなのに。

四月二十二日 火曜 曇・雨

厩当番中間交代。目を覚せば雨すら降っている。厩当番中間交代。目を覚せば雨すら降っている。雨の日の厩……。交代、勤務交代。全く一日置きに真白になつて予行をす。今日は人手なく、夕手入を半ば終へて歯科診断に行く。明日明後日は再び休みだ。

だ。二十七日は日曜、二十九日天長節、三十日例大祭で、二十九三十日は延刻と来てるから全くせいかい。今日一日ゆつくり休みたかったが、何やかで休めなかつた。交代してくれた〇に全く済まなく思つた。

四月二十六日 土曜 晴

朝少し冷へた。午前中兵器庫、午後給与〔養〕庫の使役。後、歯科診断にゆく。明日は外出だ。

四月二十七日 日曜 晴

楽しい外出日。外出の早い週番士官S少尉に、八時すぎ営門を後に、九時すぎ大阪へ着く。例の如く、地下鉄で店へ行き、思ひがけなくベイトーヴェンピアノ協奏曲第四番を聴く。十一時前帰宅。どてらにくつろいで昼食した。うまかつた事。外出しても別に行く当もないので、二時頃までピアノを弾きレコードを聴いて後、心齋橋へ出る。相変らず非常な人出だ。久しぶりにニュース映画を見て、再び心齋橋を歩く。思ひがけなく狩野と奥さんに出遇ひ、支那そばを喰べに行き、昔よく遇つたメツチェン達にも出遇つた。心齋橋が懐かしい。三十日の延刻外出を楽しむに、四時四十分発にて帰る。

四月二十八日 月曜 晴

厩当番一番。然し明日の観兵式予行と準備で、朝手入後、Iが交代に来てくれる。午前中砲車の武装と手入だが、準備は既に完了し、砲廠の裏の芝の上に寝る。睡い。午後一大隊のみ観兵

式予行。日照り続きのこの数日に全く砂ぼこりに真白になつて予行をす。今日は人手なく、夕手入を半ば終へて歯科診断に行く。明日明後日は再び休みだ。

四月二十九日 火曜 曇・雨

伯太練兵場にて午前十時十分より天長節観兵式が行はれ、砲手として参加す。

観兵式後、昼食を済し、正午連隊のトップを切つて折柄いんいとどろく皇礼砲の中を外出す。今日は午後八時まで延刻だ。然し昼からは平日と変らぬ。明日だったのだが。降り出した雨の中を大阪へ着いて、店へ行きレコードを聞いて、三時前帰宅したが母は不在だ。明日帰ると云つて置いたので、一人で食事をし、四時頃友井が来たので心齋橋へ出る。非常な人出だ。思ひがけなく、丸井と奥さんに遇ひ、平野屋でクリムソーダーを飲む。久しぶりに味はふ夕暮の大阪。丸井と別れて久しぶりに飲むべく、新ぎんざへ行く。入隊後始めて味はふ、あの雰囲気。いつ再び味へる事やら。タンゴを聴きつゝ飲んだ。愉快だった。いつの間にか時間は経ち六時すぎに驚き、今一度夕暮の心齋橋、夜の心齋橋を見ずに、名残りを惜みつゝ阪和へ。六時四十分発急行にて隊へ帰る。

四月三十日 水曜 晴

愉快だった昨日の外出。ぐつすり寝て目を覚まして現実の悲哀を感じる。靖国神社大祭。起床同時馬運動に参加。人員少

四月二十三日 水曜 晴

歯痛み、夜中何度か目を覚ました。今日は歯科診断を受ける事を決す。友井がずつと行つてるし、古兵が少いので遠慮してたのだが、医務室へ行き、後、午前中舎前の手入をし、午後兵器庫の使役。そして夕手入時、五時すぎより歯科診断に友井と公用で府中の歯医者へ行く。公用。一步外へ出た気持。素的だ。七時前夕陽、六甲の峰の彼方に没すのを視めつゝ帰る。今夜の達しで明日上番厩当番一番を達せらる。昨日の中間交代に、しかも今度はくらい込みだ。全く無茶だ。無茶苦茶だ。

四月二十四日 木曜 晴

今日は兵器庫の使役。使役、使役。我々は軍隊へ何しに来たのだろうか？今夜再び厩当番だと思ふと全くゆううつ極み。歯科診断に出るのが少し遅れ、帰るまで交代を出して貰つて診断に行く。今日は一寸手術をしなくてはと云つたので、麻すいもせずに切られたのには涙が出た。後、痛んだ。七時すぎ帰って結局勤務を交代して貰つた。〇に。全く済まないと思つたが。

四月二十五日 金曜 晴

靖国神社臨時大祭。午前十時より遙拝式が営庭で行はれ、今日の外出者は十一時すぎより出て行つた。平常通りだから全く時間はない。今日外出の番だったが、歯で厩当番の交代をして貰つた位だから遠慮して置いた。二十七日明後日

なく無理矢理に参加す。然し此間の馬術に何か乗れる様な気がしてたところ、今日の馬術で急に自信づいた。愉快だった。明けて間のない信太山を馳せる時。青い池、丘より森へ。素的だった。何故もつと馬術に出なかつたかと後悔した。

今日の外出者は九時前延刻で出て行つた。昨日に比し全く羨ましい限りだ。午前中馬具の手入に、一日中何も出来なかつた。昨日の事を思ひ出す。愉快だった。余り遊び過ぎたか、ふところがいやに淋しい。

五月一日 木曜 晴

花の四月も間たゞ中に過ぎて、早風香る初夏五月を迎ふ。新緑の五月。然し我々はどうなるのだろうか？この今日の朝は珍しく冷へた。いよいよ明日明後日に迫つた連隊兵器検査に、一日中厩兵器の手入と準備に過す。

五月二日 金曜 晴

厩当番中間交代。五月二日。父死して十六年目の今日。静かに在りし日の面影をたどると感慨無量のものがある。今度の外出日にも久しぶりに墓参をしたと思ふが、今朝急に達せられて又々厩当番中間交代で、父を追憶しつゝ勤務につく。本日厩兵器検査に、全員午前四時半起床。睡く、又疲労した事。明日は砲廠の検査。同じく準備で起床が早いとの事。明日上番厩当番一番を達せらる。しかも明後日日曜は喰ひ込みだとは。

命令が発せられた。……絶望？MもSも、七月入隊兵の数名が又々疾べいに依り召集解除の命令が出た。…昼から遂に雨になった。…今夜は憲チャンの結婚式。

三月三十日 日曜 晴・曇

今日も陰気な寒い朝だ。友井は延刻で八時、外出者は九時、出て行った。寒い。気になって河上に便りを書き、昼前まで床に潜る。酒保へ行き、午後、嬉しや日が照って来た。幾日目に見える春の陽。風は未だ冷たいが、酒保の庭で日なたぼっこをし乍ら寝て仕舞ふ。友井は八時前帰って来た。夜、城に便りを書く。

三月三十一日 月曜 晴

野砲兵第三十四連隊から原隊が帰って来て復員になると云ってた三月。三月中にはあこがれの宇品へ行くか、或は一先ず召集解除になるだろうと云ってた三月も、意外十二月入隊補充兵の派遣に、何事もなく過ぎ去って仕舞った。一体どうなり何日までこのまゝの日々が続く事だろう。午前中銃教練、午後派遣補充兵身体検査に、前田と厩当番の交代にゆく。明朝より五時半起床だ。

四月一日 火曜 晴

早や四月の声を聞く。全く早いものだ。今日から午前五時半起床だ。美しい夜明け。だが未だ朝の中は冷へる。八時すぎになってやっと暖かになった。何と云ふ麗かさ。四月の太陽

はさんさんと降りそそぎ春風がそよいで居る。急に暖かくなって宮庭の桜もパツと開いた。派遣する兵隊は早朝より外泊しに行った。羨しい限りだ。何日征ける事やら。午前中中隊教練だ。…勇しいと思った。午後銃教練。

四月二日 水曜 晴

桑磯号は今早朝遂に死んだ。午前午後共、今日は常用被服庫の使役。夕方、編上靴の検査其他で人手なく、全く忙しかった。明日は外出に、久しぶりに入浴したかったが行けなかった。派遣外泊より帰って来た山内より、亀井に再び召集が来て、明後四日入隊する事を聞く。明日訪ねてやる。

四月三日 木曜 晴

楽しい外出日。午前五時前、中隊非常呼集で馳〔駆〕足、府中の神社へ参拝す。八時半外出者呼集。丁度来合せた急行で九時すぎ大阪へ着く。祭日に上天気で郊外へ。郊外。流れ出るハイカーの群で一ぱいだ。地下鉄で店へ行き、レコードを聴いて十一時前帰宅。どてらにくつろいで久しぶりにゆつくりレコードを聴きピアノを弾く。二時すぎ家を出て、物凄く人出の心斎橋を一人歩き、明日入隊する亀井を訪ね、フランス屋敷でお茶を飲み、四時四十分発急行にて帰る。

四月四日 金曜 曇・雨

午前中N少尉の銃教練。午後給与〔養〕庫の使

の使役。

四月十一日 金曜 晴

今日も春日和。初年兵入隊第二日の朝。自分達のあの日の朝を思ひ出し、微笑ましく視めつゝ。…午前中古兵馬術だが、舎内に居残り、午後厩で日なたぼっこをしつゝ馬具の手入をす。

四月十二日 土曜 晴

明日は楽しい外出。今日は医務室の使役。朝久しぶりに洗濯をして医務室へ。午前中は一寸掃除をし、午後何ら仕事なく裏庭で日なたぼっこをし乍ら寝て仕舞ふ。三時間も寝たか、目を覚せば正に四時に全く驚く。

四月十三日 日曜 雨

楽しい今日の外出日は雨。雨の中を外とう着用。満員電車にゆられ、蒸風呂の様な思ひに大阪へ。…大鉄でしるこを喰って、地下鉄で店へ。久しぶりにタンゴ「夢去りぬ」とベートーヴェン「運命」の第二楽章を聴き、雨の中をびしょぬれになって帰宅。昼食をして再び心斎橋へ出て、丸井の新家庭を訪問す。早速玄関に出迎へてくれた御夫妻。…思ひがけなくも荻野が来て居て嬉しかった。久しぶりに三人楽しく語り、丸井ののろけ、宮沢氏のいい奥様ぶりに楽しい一時を過し、四時すぎ彼の家を出、四時四十分発急行にて信太山へ。夜、厩当番二番。

四月十四日 月曜 晴

役。十時すぎ、演習中雨がパラついて来、厩へ寝わらを入れに行く……。雨の中の馬手入。今夜は酒保は珍しくすいて居た。夕方、帰還兵が約六百名堂々帰還す。彼等の心中……。班長は下士官現戦に行つて不在。明日上番厩当番一番を達せらる。明後日曜はくらい込みだと思ふとゆううつになる。

四月五日 土曜 曇・雨

特筆す可き事なく。夜、厩当番一番に勤務す。四月六日 日曜 曇

厩当番一番。楽しかるべき日曜。だが今日は厩当番一番だ。友井もそして外出者は嬉しげに外出して行ったのに。

朝来天気悪く、寝わらを厩内につまれば、放馬の連続に全く弱って仕舞った。相変らず冷へる。厩当番を明けて風呂へ入った時の気持。

今夕突然、近々在隊補充兵全員野戦へ征くと云ふ噂がパツと拡がった。十二月補充兵出發延期に、一緒に発つとか。今度の噂は本当らしく、むしろ征きたいと思ふ。山砲でも。

四月七日 月曜 曇

午前四時半起床。今日は騎銃射撃演習だ。パラついて来た雨に、外套着用長靴で行く。寒い……。

上野芝。射撃。弾こん見へず三発、五点二発。自信ある射撃も、騎銃の照準不得手に一寸悲観

日ソ中立条約成立。

突然、松岡、モロトフ両外相、昨夜モスクワで調印。締約国が攻撃された場合、他の締約国は中立厳守。外蒙古と満州国領土を各保全。

…其後に来るもの?? 厩当番で一時間起床。昨日に引替へ今日は天気。午前中初年兵入隊式に参列したが、厩当番を明けたところで寝むかった事。午後兵器庫の使役。僅か三十分程馬具を洗ったのみ。

四月十五日 火曜 晴

午前午後とも兵器庫の使役。夜、久しぶりに入浴の使役をす。よくこの使役で温泉場を語り気分を出したMが、召集解除になって、何処かの温泉場で思ひ出してるかも知れない。十二月入隊補充兵がいよいよ明後日戦線に発つ。羨しい限りだ。我々はどうなるのだろうか?一寸二三日前噂してた漢口への馬受領にNが行くとの事。全く羨ましい。

四月十六日 水曜 晴

午前午後共営庭にて全員講話。初夏を思はせる様な上天気にくクリコクリ。全く睡むかった事。

四月十七日 木曜 晴

全員午前四時半起床。十二月入隊補充兵は元気に南支の戦線に出發して行った。全く羨ましい限りだ。何日の日、自分達も堂々戦線へ征く事

四月八日 火曜 晴  
夜中非常に冷へた。やつと天気になったが冷い朝だ。おゝ寒い。此間、南支よりの帰還兵約五百は今朝懐かしい我家へ帰って行った。歓喜と感激に満ちた顔々。どんな心中だろう? 今日午前午後、戦用被服庫の使役。寒い。夕方、思ひがけなく城が面会に来てくれる。嬉しかった。カーネーションは東京へ行つてるとか? 戦線に発つまでに今一度逢ひたく思ふが。

四月九日 水曜 曇・雨

今日も陰気な冷たい朝だ。いつになれば春の陽ざしを浴びられる事だろうか。今日は常用庫の使役。昼前より冷たい雨となる。明日は初年兵の入隊。明日から又賑かになる事だろう。夜になって雨は一層劇〔激〕しくなってきた。雨に兵舎の灯が霞んで居る。数日中にいよいよ三十四連隊より二年兵が多数帰って来るとの事。

四月十日 木曜 晴

くつきりと晴れた。幾日ぶりにか浴びる春の陽光。今日は初年兵の入隊。早朝より続々入隊して来る壮丁。入隊して三度迎へる初年兵を、あの日を思ひ出も新たに迎ふ。今日も戦用被服庫

今日は素的な上天気だ。彼等は素的な旅を続けて居る事だろう。現戦でこゝ数日間暇だった連当も、演習が終つて今日より再び忙しくなる。だが数週間続いた自分の連当も下番になりよいよ今日交代する。中隊へ。忙しかった。然し去り難い気持がする。中隊へ帰つて、検査とそして勤務勤務に又追はれる事だろう。いつまで無意義な日々が続き、自分達はどうなるのだろうか。あこがれの船舶砲兵隊へ。只只神に祈るのみ。

三月十六日 日曜 晴

中隊へ帰つて第一日目の今日。作業衣を着て実に久しぶりに厩へ行く。馬馬馬：馬手入。日曜。素的な上天気の内務班の半数以上も外出して行つた。残る者T上等兵以下僅か数名。今日一日を本当に伸び伸びした気持で久しぶりにくつろぎ、身の廻りの精「整」頓などに過す。今日は誰か面会に来てくれるだろうと思つたのに、誰も来なかったが、河上より、僕の為にマーチを作曲して送つて来てくれた。朗らかな山北君にとある……。仲「中」々面白くよく作つてある。嬉しかった。

三月十七日 月曜 曇

日朝点呼時管内靴の検査が週番士官自ら行ひ、突然の事に全く驚く。此二三日前から中隊当局が急に気合が入つて来たのには、全員全く上げる。不意打の検査、検査。誰がいつどんな事です上げられるかも知れない。全く一寸の油だんす

：何か久しぶりに愉快さを感じた。土、微かに出た青い目。春の陽を浴びて：自然に還る。土の親しみ。急に田園生活がしてみたく感じた。初年兵が入つて目の廻る様に忙しく上げ通しに上げた食事当番も明けた。明日は外出。丸井の新家庭訪問が楽しみだ。

三月二十三日 日曜 曇

楽しみにして今日の外出。目を覚せば陰気な空模様だ。九時前外出者呼集があり、バラついて来た雨に外とうけい行で出る。大鉄でしるこを喰つて、今日は天王寺線で帰る。そして今日は時間があるので、久しぶりにどてらくつろぎピアノを弾き、博哉のヴァイオリンの伴奏をしてやる。音程はタヨリナイが自分一人で練習したとしては：家に居ればみてやるのだが。演奏会によく行くらしく、苦笑する。母の東京行を急に中止したとの事。考へされる。一時頃家を出、店へ行く。そしてフランクの交響変奏曲、シヨパン、協奏曲、ヴァルスヴリアント、エコセーズ、ファンターゼアンプロムチュ等を聴く。全く素的だ。何時までも聴いてたかったが、二時すぎになつたのでタクシーを飛ばして丸井の新家庭を訪問したが、朝からお二人でハイキングに行ったとの事。再び心斎橋へ出て、四時発急行にて信太山へ帰る。

三月二十四日 月曜 曇

おゝ寒い。陰気な空模様再び冬が舞戻った様だ。今日は医務室の使役。使役に行つたものゝ

ら出来ず戦々恐々とした有様だ。午後、隊長自ら急に舎内の清潔清「整」頓の巡視があつたとの事。

午前中馬術に出る様命ぜられたが、呼集に遅れ厩の使役。午後全員訓話があり、後、種とう、舎前修理の使役をす。全く忙しき。一日が無茶に長く感ず。日夕点呼に又シボられ、やつと消灯ラツパを聞いて床へ入つた時の嬉しさ。

三月十八日 火曜 晴・雨

南国九州へ新婚の旅を続けてる丸井より、別府から便りが来た。：幸福に満ち満ちた彼の便り。今夜朝日会館で井上園子とローゼンシュトックのピアノ二重奏の演奏会がある。ハイドンの主題による変奏曲（ブラームス）其他、素的だろうなあ。七時すぎ。もう開かれてる事だろう。あの風「霧」いき。階段を一人掃除し乍らふと感へた。小島も先生もそして演奏会でよく逢つた人々も、或は旅より帰つて丸井が聴きに行つてるかも知れない。朝からの雨は上つて、星が無数に輝いている。演奏会の夜よく見た星が。

三月十九日 水曜 晴

明日いよいよ山砲の初年兵が入つて来る。今日は午前午後とも入隊準備。舎内の清潔清「整」頓に多忙なこと。窓をふきつゝ視める。舎外信太の丘にもめつきり春らしさを感じず。春だ。

三月二十日 木曜 晴

仕事なく、午前中は当番室で火を囲んで雑談。午後、晴れて来たので医務室の裏山で日なたぼっこをし、芝布の上で寝て仕舞ふ。風は冷たい。今夜の入浴の気持よかつた事。明日は起床後面会所の使役との事。全く成かい「正解」だ。

三月二十五日 火曜 晴

カーネーションの夢を見た。どうして居るのだろうか？今一度逢ひたく思ふが。今日は素的な天気だが、朝の冷たかつた事。日朝点呼後、面会所の受付に行く。午前九時前より押しかけて来た面会人の群。山砲要員初年兵の出発を明日或は明後日にひかへ、全く物凄くばかしの面会者。受付に大多忙を頂「極」む。あらゆる階級のあらゆる種類の人々。面会後の掃除がエラかつたが、愉快な一日だった。

三月二十六日 水曜 晴

今日も冷い朝だ。いよいよ明朝に迫つた初年兵の出発に、朝来今日も面会人の群が押しよせて居る。今日は石取りの使役。府中を経て大津川岸へ行く。霞たなびき全く春の麗さを感じず。やはり外はいいと思ふ。午後は舎前の掃除。訪独伊中の松岡外相、突然モスコにてスターリン、モロトフ外相と会談す。

三月二十七日 木曜 晴・曇

不寝番二番。午前〇時十五分起床。T上等兵と久しぶりに不

厩当番一番。

初年兵入隊。早朝より万歳の声と楽隊が聴へる。自分たちの入隊の日のあの感激を思ひ出し、今の自分たちを思ふ時、全く悲しく感ず。

今日の日課、全員馬術。久しぶりに思ひきつて乗る。入隊見送人の群の中をさつそう？と南門を出、練兵場で少し走つてあこがれの山へ……。ゴルフ場の近くで美しいメツチエンと出逢つた。さんさんと降りそゞぐ春の陽、春風……。青い池、緑の芝。馬に乗つてラララと、春の唄。でも歌ひ出したくなるが、走る毎ビクビクもの。遂に見事二度まで落馬す。馬だけはうまくなりたいと思ふが。

三月二十一日 金曜 晴

厩当番一番。暑さ寒さも彼岸まで。今日は彼岸の中日。朝から全く麗かな日和だ。そよぐ春風、さんさんたる春の陽を浴びて外出者は出て行つたのに、今日は厩当番一番。外出の番で楽しみにしてたのに。一日中厩で劇「激」激しい勤務の一日を過す。今日は全く疲れきつて仕舞つた。勤務を終へて中隊へ帰ると母から便りが来てた。東京へ行くとか。

三月二十二日 土曜 晴

厩当番の疲れでぐつすり寝た。昨夜バラついてた雨も上つて今日もいい天気だ。午前中馬術だが、未だ自信がないので止し、午後新しく作つた獣医室の島の使役に行く。鉄とつて麦まく。

寝番二番につく。明け方の冷へ込みに、睡むかつた事。初年兵いよいよ出発に、午前四時起床さす。午前六時、初年兵は暁の静かさを破つて出発して行つた。羨しい。おゝ寒い朝だ。小雨がバラついて来た。午前中昨日と同じ場所に石取りに行き、午後は砂取りに忠岡の海岸へ行く。空は晴れたが、風の強い事。久しぶりに磯へ立つて沖を視む。波は高い。海、好きな海。あこがれの船舶砲兵隊。

三月二十八日 金曜 晴

おゝ冷へる。全く冬が舞戻つて大寒の様な寒さ。朝手入の蹄洗など手が千切れそうだ。午前中馬のガスマスク装だつ法、午後銃剣術だった。寒風はだをさす。舎内に居てもじつとしてられない寒さだ。：点呼も済んだ。今夜は早く寝よう。城から端書が来た。カーネーションと秋逢つたきりで其後消息ないとの事。彼の返事を楽しみにしてたのに、全く悲観す。どうしてるのだろうか？

三月二十九日 土曜 曇・雨

おゝ寒い。風こそ収まったが陰気な雨空に無茶に冷へる。全く冬だ。ヂツとしてられないこの寒さ。午前は兵器庫、午後は戦用庫の使役。今日急に、十二月補充兵が戦線に近く発つ噂がパツと出た。確実らしいのに。自分たちは一体どうなるのだろうか。今度こそはと思つてた三月も早や過ぎ去らんとして居る折柄、船舶砲兵隊要員中よりガス教育要員の教育を受ける者の

早や三月の声を聞く。一月には一先ず解除か、船舶砲兵隊へ行ける事だろうと思つてたのに。……。

今日から起床午前六時。朝相当冷へたが日中の麗らかさ。午前中初年兵の検閲も終了し、隊長の訓示がある。いよいよ派遣も近いらしい。羨ましい限りだ。

夕方より再び連隊本部当番につく。偶然出逢つた野砲三十四の少尉殿に敬礼したところ、精華、貿易共に一年先輩の和田に驚く。初年兵は明日から外泊とか。自分は明後三日外出との事。カーネーションに便りをす。仏印全面的に我調停案を拒否。遂に何等回答なく、一両日中に我決意伝達か。

三月二日 日曜 曇  
仏印問題。明日、陸、海、外務最高会議。其後に来るもの？

初年兵の外泊。友井も前田もMもKもみんな外出で出て行つた。中隊に残る者僅か数名。静かな事。朝から曇天。一日中いやに冷へる。おゝ寒い。明日は外出。カーネーションに逢へるだろうか？今一度逢ひたく思ふが……。

三月三日 月曜 晴  
昨夜の雨は上つた。素的な日和。待遠しかつた今日の外出。N少尉の週番としては珍しく早く、九時前営門を出る。暖かだ。懐かしい大阪へ。午前十一時に明治製菓の二階へ行く。…福井…

整理を依頼されて、寝むい目をこすりつゝ連隊本部で十二時前まで過す。やつと仕事を終へて中隊へ帰り、床に入つたのは十二時半。

三月八日 土曜 晴  
素的に晴れた。何と云う麗かさ。春だ……。思ひがけなく河上より手紙が来る。連隊当番今日が下番だが交代はなかつた。然しむしろ嬉しく思ふ。初年兵が発つた後、中隊へ帰つて人手の少い厩へ行き、激しい勤務につくより……。やつと夜になつた。明日は日曜日。明後日は陸軍記念日。

三月九日 日曜 晴  
冷たい朝だ。冷へる。だが空には一片の雲すらなく晴れ渡つて居る。…外出者は午前八時前と云ふ早朝、営門を出て行つた。朝の寒さも次第に暖かくなり、全く羨ましい限りだ。初年兵が発つてカラッポの隊に、日曜と云ふのにさすが面会人はまばらだつた。誰か来てくれはしないかと待つたが、誰も来なかつた。明日は外出だがプランもなし、若し早かつたら京都へ姉でも訪ねようか。  
今日の暇にやつと気になつてた加納先生への便りを書く。

三月十日 月曜 晴  
軍隊で迎へた第三十六回陸軍記念日の今日。今日も朝から素的な日和だ。…外出。いらいらするの、精神訓話が始まつたのが九時。其中、

思ひ出の場所……。十一時半まで待つたが遂に來なかつた。果して手紙が手に入つたのだろうか。田舎に居るのだろうか。楽しみにしてたのに。軽い淋しさを感じつゝ家に帰る。急な帰宅と元氣になつたので母の喜び。早速どてらにくつろいで喰つた昼食のうまかつた事。よく帰つたと思つた。二時ごろ家を出、久しぶりに難波でニュース映画を見る。思ひがけなくジャック・テイボの音楽シリーズ。思ひ出のトッキー音楽集を見、嬉しかった。心齋橋を一人ブラつき、店へ寄つて、四時発急行で帰る。

三月四日 火曜 曇  
おゝ冷へる。又しても冬が舞戻つた感がする。外泊してた初年兵も今夜全部帰つて來た。点呼後、丸井よりの來信を知る。丸井から？？？彼が結婚するのだ。宮沢氏。素的だ……。彼の結婚が何だか我事のように嬉しく感じられ、兵舎の薄暗い電灯の下で、彼の便りを何度も何度も読んだ。お母さんもさぞ喜んで居られる事だろう。是非一度訪ねて彼の話でもゆつくり聞こうか。今夜はいやに寒い夜だ。遠くから消灯ラッパが聞へて來た。向ひの中隊の灯が一つ一つ消へてゆく。自分たちにとって一番楽しい一時。さあ寝よう。彼の嬉しそうな顔でも夢み、二人の幸福を祈りつゝ……。

三月五日 水曜 晴  
嬉しい……。彼丸井の結婚が全く我事のように嬉しさを感ず。一刻も早く手紙を書いて自分の喜び

隊長も来て、やつと終つたのが正に十時すぎだ。外出した所で福井の消息も解らず、家に帰つた所で母は京都へ行つて不在。今ごろから京都へも行けず、気懸ねして出て帰りのあの気持を味はふよりは止そうかと思つたが出る。急行も来ず、普通で大阪へ……。だが意外にも偶然、南田辺より大井さんが乗つて來、初めて遂に話を交した……。感のいいメツチェンだ。お茶を飲みに行つたが、休みで残念だったが、何だか急に愉快になつて仕舞つた。後、地下鉄で店へ行き、レコードを聴いて帰宅。友井が誘ひに來て心齋橋へ出、アルハンブラへ行つて四時発の急行にて隊へ帰る。忙しかつた今日の外出。やはり出てよかつたと思つたが、命令の一日も早からん事を只神に祈る。

三月十一日 火曜 晴・雨  
松岡外相。独伊ソ訪問。突然発表さる。外相、ヒットラー、ムッソリニー重大会談。全世界の大センセーション。太平洋の波高く、南方作戦、春季攻撃の折柄。其後に來るもの？？？……。今日も晴。将校現地戦闘演習に全將校出張。それに中ルサイN軍曹も参加して連隊本部の暇な事。N軍曹一人居らねばこんなに静かかと一同あきれれる。今日の暖かさ。いや暖かと云ふより、むしろ蒸暑さを感じる程だ。頭がいやに痛む。変な天気だと思つたら、夜に入つて遂に雨となつた。昨日大井さんと逢つた事、早速方々で冷かされたのは弱つた。  
三月十二日 水曜 晴

を伝へたい気持。忙しい勤務のすきにやつと書き上げた彼への手紙を、中隊のポストへ入れた嬉しさ……。  
昼、又思ひがけなく小島より、丸井と狩野結婚の端書が來た。珍しくも彼自身のペンで例の如きユーモアで。丸井は十三日、狩野は二十九日。全く目出度続きた。いよいよ初年兵は明早朝戦線へ発つ。羨ましい限りだ。今夜送別会があつた。彼等は無量の感であろう。自分たち戦友の發つた前夜の事を思ひ出しつゝ……。

三月六日 木曜 晴  
初年兵いよいよ出發の朝。全員午前三時三十分起床す。午前五時半意(威)風堂々出陣する彼等を羨ましくも又、南支へ戦友を送つた朝の感激を胸に見送る。何日の日、自分達が見送られて戦線へ發てる事やら。彼等が出て征つた後、何か知ら淋しさを感じる。  
午後三時すぎ、師団公用で思ひがけなく大阪へ出る。……そして意外に時間をくつて、午後八時すぎ隊に帰る。

三月七日 金曜 曇・雨  
タイ仏印紛争調停。東京会議成功。仏印問題解決す。船舶砲兵隊の活躍のいよいよ近きを感じ張切つて居たのに。いさゝかがつかりする。仏印への夢、又しても破る。目を覚ませば雨……。春雨だ。暖い風。雨が上ればうんと暖かくなるだろう。雨は夕方まで降り続いた。やつと勤務を終へて帰ろうとしたところ、将校現戦の書類

三月十二日。今日は誕生日。  
タイ仏印講和圓滿成立し、仏印問題遂に解決。帝国外交の大成功。  
朝、非常に冷へて寒い朝だったが、昼ごろより暖かくなる。今日も暇な事。  
今日は誕生。今日の誕生をこんな所で、そしてこんな心しの中に迎へるとは夢にも思はなかつた。明日はいよいよ丸井の結婚式。  
船舶砲兵隊への命令の一刻も早からん事を只神に祈る。

三月十三日 木曜 晴  
三月十三日。今日いよいよ親友丸井の結婚の日だ。彼のこのよき日を祝すが如くに、朝來雲一片すらなく、麗かな日和だ。まるで自分の事如く嬉しさを感じず。彼の為、公用に出た途、慶祝電報を北浜「野田屋」へ打電して居いた。彼は歓喜の絶頂にある事だろう。彼とそして奥様、宮沢氏の幸福を心より祈りつゝ。

三月十四日 金曜 曇・雨  
目を覚ませば雨だ。丸井は新婚旅行に別府へ、もう発つたろうか？せめて今日は晴れてくれればと思つたのに。  
雨は夕方には上つた。もうこれからの雨は一雨毎に暖かくなつてゆくのだ。明日は晴れるだろう。

三月十五日 土曜 晴  
連隊本部当番(下番)。

何の準備も出来ず今日となった。中隊では検査検査で万々いろいろなきを期しているのに、若し引掛ったなら、どうして詫びよう……。絶対絶命……。

夕方より師団公用に出る。電車が来ず待つ間の寒かった事。やつと大阪へ着けばもう日はとっぷり暮れていた。夜の大阪。師団司令部へ行って帰り、大手前公園を演奏会の夜よく歩いた頃を思ひ出し、将来の事を色々考へつゝ……。

二月十四日 金曜 晴

今日は連隊本部の内務検査に、起床時刻より三十分早く六時に行く積りで、不寝番に五時半に起す様に云って寝、三十分間ウツラウツラして起き様としたところ、正直に五時三十分それも少し前にたゞき起されて仕舞ったのは弱った。九時、隊長の巡視が始まるまでの忙しかった事。結局早く起きて朝食も出来ず昼食を喰べる。腹が減つたのでうまかつた事。各中隊は正に戦場の様な雑〔騒〕ぎだ。やつと時間をぬすんで昼、襦袢とまくらおゝいを洗濯し、夜、点呼後、作業衣のほころびを直し、幾分か肩の荷を下した気持だが、心配だ。消灯十時半。

二月十五日 土曜 晴

遂に来た、連隊内務検査の当日が。いつもと変らぬ起床ラッパは鳴る。今日となつてはくそ度きようが出来て連隊本部へ行く。各中隊では数時間後に迫つた検査に、最後の準備に正に戦場の様だ。午前中、厩其他の検査、午後、いよいよ

……。

二月二十二日 土曜 晴

今日も就寝。昨日に比し幾分気分もよくなつたが、いやに寒気がする。今日も床の中で一日を過す。……………。

二月二十三日 日曜 晴

今日の休日は平常通り服務すべし。いよいよ迫つた〔一字欠、随〕か。時検閲と初年兵検閲準備に、今日は休みなし。演習だ。気分は余程よくなつた。熱も引いたらしが、未だ頭が重いので就寝す。今日母が面会に来てくれるのだ。昼すぎ、前田が知らせに来てくれた。今まで寝てゝ、面会だと云つて起きる訳にもいかずと思つてたが、皆が行けよと云つてくれるので、面会に行く。優しい母。懐かしい母。不二屋のシュークリームのうまかつた事。心配させてはと思つて、出来るだけ元気そうにす。五時前母は帰り、一人淋しく夕暮の兵舎へ。

二月二十四日 月曜 晴

今朝は日朝点呼に立つ。全く久しぶりだ。点呼後、厩へ行かず舎内へ。朝食後、診断を受く。熱も下つた。気分もほとんどよくなつたが、未だ少し寒気がして頭が重い。診断の結果、就業。気管が少しく悪いとの事だつた。いよいよ明日に迫つた〔一字欠、随〕か。時検閲に、一日中最後の持場の清掃。夜、再び連隊本部当番服務を週番下士官に報告に行くと、明日厩当番

よ中隊の検査は始る。六中隊よりだ。さすが不安だつた。不安で耐らなかつた。夕食時、恐る恐る中隊へ帰つて無事検査が終つたと聞いた時の気持……。久しぶりに夕食もうまかつた。明日は外出。うれしい消灯ラッパは鳴る。

二月十六日 日曜 晴

外出の許可が出た。天気はよし。内務検査も無事済んで今日は心も軽い。午前九時すぎ営門を出る。春の様な麗かさ。郊外へ出るハイカーの群を一寸羨ましく視めつゝ大阪へ。友井は京都へ行き、今日はずつと天王寺線で帰宅すれば、母は京都へ行って不在にガツカリした。姉の心ざしで昼食をし、後、レコードを聴いてると、藤田が訪ねて来てくれたので久しぶりに彼の伴奏をし、後、心齋橋へ出、店へ。丸井と会ふ。そして心ブラシ、アルハンブラでお茶を飲んで、地下鉄で阿辺〔倍〕野へ。楽しかつた今日の一時を淡いタンサン水の様を感じつゝ、四時発急行にて大阪を後にす。車中、偶然乗合してた三中隊〔一字欠〕より入隊以来巡り会ふ日を守つてた、放送局文芸課の佐々木氏を紹介された。全く思ひもよらなかつた奇遇。コンダクター大沢壽人と親友で、加納、朝比奈、長井の諸氏とも知合ひとか。全く嬉しく思つた。

二月十七日 月曜 雨

楽しかつた昨日の外出。ぐつすりと寝た。「起床」の声に驚いて飛起きれば外は雨だ。雨雨雨……。

……。

二月二十五日 火曜 晴

師団随時検閲第一日。厩当番昼間交代。遂に来た随時検閲の当日が。午前五時半起床し、厩へ。今日は早速に厩当番昼間交代。人も馬も砲車も武装。午前九時、気ヲ付ケのラッパの音響き、師団長官殿下御台臨。軍装検査は始る。午前十時すぎ軍装検査終了、全員帰つて来る。終、最後の清掃をし、午後一時、厩巡視は初る。六中隊をトップに。やつと無事終つた時の気持。舎内巡視が免かれたのは全く盛会〔正解〕だ。あれ程大雑〔騒〕ぎをして迎へた今日の日も過ぎ去つた。検査検査で苦労した。全く肩の荷を下した。

二月二十六日 水曜 晴

師団随時検閲第二日。随時検閲第二日目の今日。今日は将校のみだ。朝より素的な天気だ。将校がシボラれる日。幾分上げ気分で右横左横してる将校連もいつもと異ふ風景だ。午前中一般兵は各内務班で班長より学科がある。外は麗か、ついコクリとやりかける。午後診断があり、もうすつかりいとの事だ。診断より帰つて、母と姉に全快の便りす。

二月十八日 火曜

別に特筆す可き事もなく、今日も無意義な暗い一日を過す。我々はどうなるのだろうか。もう噂すらする者もない……………。絶望……。だが自分は何とかなるとは思ふが。

二月十九日 水曜 曇

風〔風邪〕を引いたのか体の具合が思はしくない。「当番」「当番」。自分等はどうか。中隊へ帰つても……………。〔一字欠、随〕か。時検閲は迫る……。

二月二十日 木曜 晴

依然体の具合がどうも悪い。勤務が耐なくエラさを感じず。風〔風邪〕を引いたところ、疲れも出てるんだらう。熱があるのだから。体中が熱いと思つたら、夜になっていやに寒気がして来た。やつと勤務を終へて中隊に帰つて床に入つたが、頭は火の様だ。おゝ寒い。

二月二十一日 金曜 晴

熱の為か寝苦しい夜だつた。「起床」、だが起きられない。熱が高く寒気がし、頭は割る様に痛んで、寝汗でビツしよりだ。到底起きられぬ。週番下士と班長に報告に行くのがヤツト。足はフラつく。許可を得て就寝。だが気掛だ。一日中ウツラウツラする。頭がひびく。苦しい……。

……。

二月二十七日 木曜 晴・雨

初年兵演習の為、全員午前六時起床す。暖かな朝だ。初年兵は八時頃より山へ出て行く。自分は兵器庫の使役。全く久しぶりの使役だ。麗らかな日射し心持よき春風に、春だなあと思ふ。若し夢が現実とならばとふと思ふ。……。昼思ひがけなくも新馬厩で「七月の宇品へ行つた補充兵が三月征くそうだ」と云ふ古兵の立話を耳にす。嬉しかつた。又しても噂だらうが。夕方よりあんなにいい天気だつたのが俄に曇りだし、遂に雨となる。雨雨。雨の夜。

二月二十八日 金曜 雨

仏印問題悪化。最悪に即応最後案貫徹の為。仏印在留民引揚。帝國政府訓令を発す。英支密約。重慶正規軍二万、北部ビルマ進駐……。目を覚せば雨。初年兵の出発がいよいよ急になつて、検閲も繰上つて今日からだ。劇〔激〕しい雨の中は検閲に行く。今日は給養庫の使役。初年兵の外泊。出発後の馬手入。入隊兵準備等の忙しさを思ふとぞつとする。自分等はどうか……。二月も又またぐ中に過ぎ去つて仕舞つた。明日は早三月だのに。

三月一日 土曜 晴

……。

指揮班演習（第三日）。

窓を打つ風と寒さに、何度か目を覚す。ザコ寝の夜は明けた。六時すぎ今日は起床ラッパもなく起き、温い朝食に温まって、再び山へ行く。今日はもう、電線のでっしゅうだ。身も千切れる様な寒風の中を。……やっとしてっしゅうを終って、山直村より福田村へ。陣地転換し、正午、三日間にわたる指揮班演習を終る。民家の軒で昼食。二時まで休憩し、美しい風景の中を岸和田へ出、山の手線にて三時すぎ帰営す。兵舎でも、演習から帰って今夜はベットに寝られると思ふと、我家へ帰った様な気がする。我家……：期待し、信じきって居た一月も過ぎ去って仕舞った。絶望だろうか。……いよいよ明日付で一等兵進級があると云ふ。然し半数のみ進級で残り二ヶ月遅れるとの事だ。心配だ。全員が進級出来ると思つたのに。何もかも絶望だ。夢だった。この一月の長かった事。力なく床に入る。おゝ寒い……。

二月一日 土曜 晴  
連隊本部当番（上番）。

二月一日。何もかも夢だった。あんなに期待し信じきって居た、一月も淡い夢として過ぎ去って仕舞った。二月七日も恐らく駄目だろう。絶望……。  
余りにも無意義な日々が全く苦痛に耐へない。MもHもUも南支の戦線に残敵の影を追つて元気に闘つて居る事だろうに。今日午前中は使役。午後連隊本部当番の交代に連隊本部へ行く。

初年兵の演習出発で全員午前五時に起床す。三四日前よりの無茶な暖かさに、今日位には天気も崩れるだろうと思つたのに、初年兵が発発して間なしに一寸パラついたのみで、今日も素的な上天気だ。午後、思ひがけなかった堺への公用で、喜んで営門を出る。何と云う麗らかな天気だろう。全く春だ。ハイキングでもしたらなあ、等とふと考へる。  
堺へ行って……：午後四時の急行にて帰る。

二月七日 金曜 晴  
初年兵が演習に行つて二日目。今日も静かだ。灯の消へた様に。本部へ来ても部隊幹部将校連が演習に行つて不在に、仕事もなく、日当りのいい室で炭火を囲んで雑談に一日を過す。  
明日午前四時ごろに演習部隊が帰つてくるとの事。

二月八日 土曜 晴  
午前一時、初年兵演習部隊帰るに、起こされる……。楽しい夢路をたどつて居たのに。寝い……。午前三時前やつと再び床へ入る。思ひもよらなかつた。特に全員起床八時三十分、皆の喜びたるや。然し、連当で七時前、一寸寝坊をして本部へ行く。朝相当冷へて来た。今朝など小雪がバラついてた。然し日中は相変らず暖かだ。  
今日交代のだが、達しがなかつたのか、誰も来なかつた。久しぶりに夜入浴に行く。明日は外出だろうか。マネーは無し。いよいよ迫つた

二月一日付を以て、いよいよ一等兵進級が決定せられたとの事だが、今夜は発表なかつた。

二月二日 日曜 晴  
陸軍一等兵に進級す。

朝から素的な上天気だ。全く春の様な麗かさ。：今日は日曜日だが、射撃演習に汽車「二字欠」「搭」か」載で平日通り勤務がある。連隊本部へ行つて、朝の忙しさには全くアゲて仕舞つた。一日中忙しかった。休む暇もない。天気はよし、日曜日なので面会所はあふれる如き面会人だ。夕方、思ひがけなく母が面会に来てくれ、友井と三人長らく語る。今夜いよいよ進級発表があるとの事だ。中隊で十四名。半数だ。こちらの事は全く知らないで駄目だろうと思ふが、八時半点呼ラッパが鳴つて、今中隊で発表して居るだろうと思ふと何とも云へぬ気がした。勤務を終へ中隊へ帰ると、早速みんなから、「お目出度う」と浴びせられ、友井の言葉で進級を知る。消灯ラッパが鳴つて、只一人懐かしい一ツ星の肩章を取はずし、星二ツの肩章に取換へた気持……。さすが嬉しかった……。

二月三日 月曜 晴  
陸軍一等兵の肩章を付けて……。  
友井も前田もそして中野も高田も井本も、みんな揃つて進級したのだ。

今日騎銃実弾射撃に、全員午前四時三十分起床。早々馬の準備に、新米一等兵ぶりを発起し汗ダク。後、朝食後、連隊本部へ行く。昨日に比し内務検査の準備が何も出来てないので。

二月九日 日曜 晴  
夜中、最近のまんぢゆの喰べすぎか、急に歯が痛みだし、そして寒さに何度か目が覚めた。冷い朝だ……。何日もの様に本部へ行つてると、Mが外出だと知らせに来てくれた。マネーは無いし、内務検査の準備も全く出来てないし、……行きしなは嬉しいが帰りの気持が全くいやだ……。九時すぎ、朝食もせず飛び出す。友井と。：大阪へ着いて地下鉄で店へ。レコードを聴いて、シャツウへ行き、正午帰宅す。思ひがけなかつた巻焼のうまかつた事。例によりくつろぐ暇もなく家を出、二時、丸井とカレドニヤで会つて心齋橋を歩く。何度も何度も。「二ツ星」になつて、むしろ「一ツ星」への答礼に忙しいのも嬉しい。不二屋でお茶を飲んで心齋橋に名残りを惜みつゝ地下鉄で阿辺「倍」野へ。四時発急行にて信太山へ。……。

二月十日 月曜 晴・雨  
目を覚ませば冷い雨が降つて居た。雨……だが昼ごろより雲間が出来て遂には青空となる。素的な上天気だ。  
今のまゝの日々がいつまで続くのだろうか？今の空の様に。心ゆくまで晴れわたる日が来ようか？  
二時過ぎより師団司令部へ公用に行く。昨日来て今日再び来る懐しの大阪。天気はいいがさすが風は冷たい。久しぶりに歩む大阪城内。……

要了「領」が分つたので、今日は左程忙しくは感じられなかつた。営庭を歩きつゝ、二ツになつた肩の星がいやに気になる……。やはり嬉しいものだ……。中隊は夜八時すぎ帰つて来たので、消灯したのは十一時少し前だった。

二月四日 火曜 晴

一昨日、日曜日の代日休暇。昨夜消灯が遅かつたので、今日は特に起床午前七時のところ、火災呼集演習に六時前起床させらる。：今日も素的な上天気だ。二月四日立春。全く春の様な麗かさに春風吹いて、青い大阪湾を離「隔」て、六甲の峯々、神戸、芦屋の街々がくつきり見える。外出者は楽しげに出て行つた。：連隊本部へ来て今日は暇な事。窓から射し込む太陽についこくりとやる。明日の日を夢みつゝ……。

二月五日 水曜 晴

別に特筆す可き事なし。今日も素的な上天気だ。全く春の様な。自分がやった暖ろに始めて火がついた……。連隊当番にも馴れた。今夜も又公用で前の郵便局へ行く。僅かな時間だが、地方の夜の風は素的だ。一度、師団司令部へ公用で行きたいと思つてゐるが。明日から二泊三日で初年兵の演習だ。起床は何でも午前二時だとか……。もう中隊では消灯してみんなは楽しい夢路をたどつてるかも知れない。連隊本部の机に向つて、もう暫くして自分も寝台に足を伸せると思ふと……。

二月六日 木曜 晴

：六時二十分発急行にて信太山へ帰る。月がこうと照り輝いて居る。昨日手にした懐かしい加納和夫先生の便りを何度も何度も視めつゝ……。海軍の至宝大角大將は、南支戦線視察中飛行機と共に遭難せりと。

二月十一日 火曜 晴

紀元節。朝から素的な日和だ。春の様な麗かさ……。午前十時より御真影奉拝式が行はれ、今日の外出者は正午より嬉しそうに営門を出て行く。天気はよし。午後八時半までの外出に、全く羨ましい限りだ。さすが今日は仕事もなく、日当りのいい室で雑談にふける。余りの暖かさにこくりとする。昨年紀元二千六百年の今日今頃、樞原の神前に力一ぱい唱つたあの感激を思ひ出しつゝ……。今頃心齋橋は賑つてるだろう。面会所も一ぱいだ。

二月十二日 水曜 雨

目を覚ませば雨だ。今日こそは内務検査の準備に、洗濯しなくてはと思つたのに。……。冷い雨は心なくも上りそうにもない。顔も何もかもびしょぬれだ。靴にまで水が入つて来る。……。

二月十三日 木曜 曇

昨日の雨は上つた。然し今にも泣き出しそうな灰色の空より思ひ出した様に雪がチラつく。冷へる。六甲の峰は真白だ。いよいよ明後日に迫つた内務検査に、今の劇「激」しい勤務に全く

だ。起床ラッパが鳴る十分前、五分前、三分、二分、一分、起床ラッパは鳴る。…夜中に目が覚めて又寝れると知った喜び。睡ってる事を意識してる間がもつともつと長ければと思ふ。夕、思ひがけなく母が面会に来てくれ、福井に便りを書く。

一月十九日 日曜 晴

四週間にわたった医務室当番も、昨夜の達しで遂に前田と交代、今朝引継を終へる。残念だったが仕方ない。今日より又厩へ。馬手入：明日より演習に：内務班：点呼：いよいよ衛兵にも当るだろう。守則：……勤務。今日は昼から面会所の使役に行く。春の様な日和に面会人の多い事。博哉が来てくれるかも知れないので待ってたが来てくれなかった。又夜が来た。もう水飼呼集があるだろう……。

一月二十日 月曜 晴

午前中演習及び使役、外は銃剣術で、残った者僅か四人です。全く完全な員数外だ。昼食後「十二時四十分、七月以前入隊兵にして工務兵以外事務室集合 F曹長」に、若しかと胸をときめかしたが：事務室でふと見た勤務割表に、今夜達し、明日上番火薬庫、二番衛兵勤務に全く驚く。医務室当番が明けて覚悟はしてたが、こんなに早いとは。守則は全く覚えてないし、上げた上げた。午後は給養庫の使役。仕事の暇々に手帳を開けて守則を暗記する。

一月二十一日 火曜 晴

二月ぶりに友井と共に外出出来る事を嬉しく思ひ、床に入って明日のプランを練る。

一月二十六日 日曜 晴

カーネーションの夢を見た。どうしてるのだろうか。今一度逢ひたく思ふが……。待ち遠しかった今日の外出。目を覚ませば非常に寒い朝だ。厩の水槽場は厚い氷が張って居る。手など千切れそうだ。氷を割って水概〔飼〕をさす。友井と二月ぶりの外出。S少尉の週番に八時半兵営を出る。寒さも外出の喜びにふき飛ばして、二週間目に見る懐かしい大阪。まず地下鉄で店へ行き、入隊以来のプラン、タンゴを一時間近くも聴いてパーラーへ行く。心斎橋を通過して昼すぎ帰宅。ピアノを弾き昼食をし、一時すぎ家を出、再び心ブラをして勉さんの宅を訪ね、丸井と家へ行く。そして思はざる歓待を受け、省線で天王寺へ出、四時発急行で信太山へ。或は最後の外出になる様な気がして……。

一月二十七日 月曜

厩当番一番（上番）。初年兵の浜寺海岸に於ける実弾射撃。中隊全員、午前四時半に起きる。幸暖い朝だ。起床して九時呼集までの長かった事。今日はやつと？獣医室の使役でありつける。そして暖い隔離厩の前で一日を過す。昼食に中隊へ帰ったが初年兵が居らぬので静かな事。食事が無茶に余ったのでうんと喰はされたのには全く弱る。後、やつと

最初の衛兵勤務。本日上番火薬庫二番。

消灯後床に入って覚へる積りだった衛兵守則。そのまゝ睡って仕舞って目が覚めて驚く。いよいよ今日となったのに、午前中又銃剣術。休みの間に間に手帳を出して守則の研究をす。午前中は間たゞく〔瞬く〕中に過ぎた。午後準備をして三時衛兵呼集準備を待つ。三時半舎前に集合。表門にやはり始めてつくひと、週番下士官に引率されて衛兵集合所へ行く。限りなき不安を心臓にまかして。副官が来て、トップに火薬庫特別守則を問〔尋〕ねられる。…思った程でもなかった。無事交代を終へ、衛兵所へ入った時の嬉しさ。…反〔ママ〕和。でも喰っては全く申訳ないから……。五時交代で始めて立った火薬庫の歩哨。何だか自分の姿が勇しく感じられ愉快だった。

一月二十二日 水曜 晴・雨

火薬庫二番（本日下番）。夜中相当に冷へたが素的に晴れた夜空に無数の星が物凄く輝いてる。火薬庫構内の動哨。余り気味のいいものではないが……。午前二時ごろ、裏山の真暗な森の上より三ヶ月が出て構内を薄く照す。歩哨に立ってる自分の影……。いろいろのメロディを想ひ出し、そして又種々考へる……。二十日も過ぎたのに自分等はもうなるのだろうか？歩哨交代の靴音を耳にし、衛兵所に帰ってだんろにあたり、そして仮みんの喜び……。下番となって雨が降り出したのには一寸弱ったが全く愉快だった。無事勤務を終へ中隊に帰った時、

手に入れて喰ったまんぢうの美味かった事。五時半より、厩当番一番につく。暖かな夜だ。明日は雨かも知れない。最後の望み、一月中の噂も其後急に消へて仕舞った。むしろ悲観説の方が有力になって来た。自分は望みを失はないが……。

一月二十八日 火曜 晴

厩当番一番（下番）。午前一時半、厩を交代して中隊に帰り床に就く。昨日起床が早かったのと疲れでぐっすりと睡り、起床ラッパに驚き起床。再び厩へ行く。午前九時すぎ、突然「会報ラッパ」が鳴り響いた？？？？胸は高鳴る。「一月二十八日」入隊して満半年の今日：一月の動員：一まず解除の噂：思ひがけないラッパに：しばらくして古兵の立話しに「七月の補充兵の召集解除だ」と聞いた時の気持……。そして又上等兵の話では「百四連隊より二年兵二〇〇帰還」、又他の者は「召集解除併びに満期通達の件」だと自信ありげに語る。……微笑を忘れた皆の顔も急に生々として如何にも嬉しそうだ。いずれにしろ百四連隊よりの帰還は、いよいよ近きを感じず……。

一月二十九日 水曜 晴・曇・雨

指揮班演習に参加（岸和田東方）。一月二十九日。入隊して丁度六ヶ月。歓呼の聲に送られて入隊したあの夏の日の朝を思ひ出し、過ぎにし半年を想ふ時、感慨無量だ。本日

誰も彼もが浴せてくれた「御苦労様」の言葉に。

一月二十三日 木曜 晴

衛兵勤務の疲れでさすがぐっすり睡って「起床」の聲に驚いて起きる。無事肩の荷を下した気持ちで迎へた朝。昨夜相相当雨が降り冷へたのに、立哨の苦勞を思ひやる。今までそのな事を感じた事はなかったのに。だが雨は上った。春の様な麗かな陽が照って来た。今日幼な友人福岡は入隊するのだ。自分等が味った、あの入隊当日の感激を思ひ出し、彼も今其気持を現に味ってる事だろうと思ふ。二十三日。ふと自分等に召集が来た日である事を思ひ出す。あれからもう半年も経ったのだ。今日は獣医室の使役。

一月二十四日 金曜 雨

昨日やつと獣医室の使役にあつたと思つたら、今日は行場所なしに、止むを得ず午前中給養庫の使役に、午後砲手班演習の助手に立つ。助手と云つても全く何も知らない助手なんだから、只立って居たのみ。艦載砲が懐かしい。

一月二十五日 土曜 曇・雨

午前中道直しの使役に、全く糜〔腐〕り切って仕舞ふ。全く自分等の使ひ場所がないのだから。大陸へでも行ってするのならいざ知らず。全く命令の一日を早からん事を神に祈る。だが雨となつて十時すぎ終る。冷たい雨だ。午後、自分とUと二人、給養庫の使役。雨は上ったが風が出て来た。おゝ寒い。明日は楽しい外出だ。

より三日間にわたる指揮班演習に、仮設敵を命ぜられ、七時半雨の中をトラックにゆられ、演習地たる岸和田東方へ向ふ。冷い雨に寒かった事。だが午後雨は上り、陽がさんと照り輝いて来た。……四時すぎ一まず今日の演習を終へ、帰路は行軍にて帰営す。明日は宿営とか。牡丹江飛行隊の若村より手紙が来る。入隊して半年。期待してた今日も過ぎた。二月七日と云ふ説もあるが、昨日の会報ラッパの噂も急に消へ、全く絶望説が有力になって来た。どうなるのだろうか。……。

一月三十日 木曜 曇・雪

指揮班演習（第二日目）。今夜は村落露営だ。昨日と同じく午前七時半、折柄降り出した吹雪の中を耳も千切れる思ひにトラックにゆられて昨日の演習地日直村に向ふ。今日は観測陣地の方に勤務を命ぜられ、大隊本部と仮設敵との連絡につく。雪はやつと上ったが、灰色の雪空に寒風身を切る如し。三時ごろ一まず演習を終り、山を下って昼食。後、今日の宿泊所青年会館へ案内さる。五時すぎ、村民の接待で喰った夕食のうちまかった事。六時、夜間演習開始に、ほろ酔ひ気分再び山に登る。七時演習終了。宿泊所に帰って民家に入浴に行く。温い風呂に温り、今夜点呼なしに、餅を喰ひ乍ら、火鉢に当ってラヂオを聴く。宅孝二のピアノ独奏を。全く思ひがけなく嬉しかった。

一月三十一日 金曜 晴・曇

医務室勤務を命ぜられて第三週に入る。今日も医務室へ。待望の七日も明日に迫ったのに、其後何の噂も出ず、派遣取止めなどの説も出て全く悲観す。

果して自分等は船舶砲兵隊の一員として再び海に還り、戦線へ征けるのだろうか。征ける。事を人一倍信じきつてた自分まで、ふとこんな事を考へたりする。只知るは神のみだろう。命令の一刻も早からん事を心より神に祈るのみ。

一月七日 火曜 雨

雨。冷たい雨が目を覚せば降っている。激しく。遂に来た七日が……。雨の中を医務室へ行く。冷たくじめじめした暗い一日だった。命令は遂に出なかつた。四時すぎ、突然鳴った会報ラッパに一寸胸をときめかしたが、雨の為明日の陸軍始観兵式中止命令にガッカリする。夜に入つて雨は一層激しく降つて来た。……………。

一月八日 水曜 晴

陸軍始観兵式中止。だが昨日の雨は上つて今日は素的な冬晴れ。思ひがけなかつた休日に、外出者は嬉しげに出て行く。友井もそして前田も。彼等と外出は完全に互異ひになつて仕舞つた事を残念に思ひかつ淋しく感ず。全く春の様ならさかだ。外出者が羨ましい。医務室へ行つても余りの退屈さに、昼すぎ酒保へ行つて後、庭で陽なたぼっこをす。集る者み

お寒い木枯が吹いて山は雪だろう。……………。

待機を命ぜられて二月も過ぎた。過ぎにし日を反りみれば意外に早く感ずるものの、命を待つ一日一日の長かつた事。来る日も来る日も余りにも意義ない日々、全くきつて今日。南支の戦線に発つた戦友は微風の残骸の影を追つて元気に戦つて居る事だろう。そして今彼等が傷き倒れて居るのを思ひ、又今は護国の英霊となつた懐かしい友に何と云つて詫びよう。召集令を手にして、陛下の御為の為、そして友の甲合戦に一死報国を誓つて出たのに、全く断腸の思ひす。最後の望み。二十日前後の噂も、かつて今まで何度か希「期」待し乍らデマとして過ぎ去つて仕舞つた日の如く去つて仕舞ふのではなかるるかと思ふ時、耐らなき不安を感ず。激しい戦闘に参加して撃つて撃ちまくりたい今の気持。命令の一日否一刻も早からん事を神に祈るのみ。真赤な太陽が大阪湾を離「隔」てた遠い山影に没してゆく。今日も又命令の出なかつた事に悲観し、沈みゆく太陽をうらめしく視めつ……。夜、月がこうこうと照り輝いて居る。冷たく、美しい夜だ……。

一月十四日 火曜 晴

今日も何の変つた噂も耳にせず、無意義な一日を過す。日中の暖かさに比し夜の冷へる事。一日の勤務を終へ、こうこうたる月光を浴びて広い営庭を只一人、今日も「命令」を神に祈りつゝ中隊へ帰る。おゝ冷へる……………。

な「宇品分遣者」のみ。皆の心配顔たるや。：我々はどうなるのだろうか？……。

今日も何の命令も出ず過ぎ去つて仕舞つた。点呼を終へて、只一人、月を浴びて営庭を歩む。命令を祈りつ……。

一月九日 木曜 曇

今日も特筆すべき事なく。何の噂も聞かずに医務室で退屈な一日を過す。夕食後、前田と酒保の裏庭に横になつて話す。おぼろ月に傘がかぶつてゐる。：又雨かも知れない。

一月十日 金曜 晴・曇

種「一字欠、「痘」か」併びにコレラ接收「種」十一日実施？？？に思はず胸をときめかしたが、十二月入隊初年兵と知つて、全くガッカリする……。朝、今にも降り出しそうな空模様の中を、夜中降つた雨でぬかるみの山へ、みんなは分隊戦闘教練に鉄帽を冠つて勇ましく出て行つた。昼すぎより空晴れ、冬の太陽が照つたが風が出て来た。今日も退屈な一日、意義ない一日を過す。

一月十一日 土曜 晴

明日は外出。昨年の夏召集されて入隊して数日の後、思ひがけなかつた福井が支那より帰り、再会の日をどんなにか夢見待ちこがれてたのに、秋只一度逢つて別れて後……。今一度逢ひた

一月十五日 水曜 晴

一月も早や十五日となる。今日も何の命令もない。問題？の二十日もあと数日に迫つたのに。……衛兵の守則を覚へねばならないのだろうか。もう行かないだろうか？と云ふ悲観説の中から、今日何処からか、今月中には必ず行く、が若し命令が来なかつたら、船舶砲兵隊より召集が来るまで一先ず召集解除だと云ふ噂がパツと拡がった。何でも各中隊で名簿を作成して部隊本部に提出したてなんて云ふ。宇品から帰つてすぐにと、派遣部隊が発つて直後、一まず解除説が出て、これで三度目。戦線へも征かず日毎の無意義さはどうしてむずむず選つて行けよう。船舶砲兵隊員として戦線へ発ちたい願ひで一ぱい。だが船舶砲兵隊が改めて召集令を出すまでは、と思ふ時……………。

一月十六日 木曜 晴

一先ず船舶砲兵隊要員は召集解除？と云ふ噂はパツと連隊内に拡がった。船舶砲兵隊員が逢へば其話でもちきりだ。顔を見知らぬ者までがヤアヤアと親しげに話しかけて来る。船舶砲兵隊要員の関係書類を部隊本部で取まとめ、M中尉が打合せの為師団へ行つたとか、W大尉が云つてたとか、まるで自分で聞き見て来た様に語る者。然し動員室兵の話に、中隊人事のS古兵の話、そして事実自分が耳にした兵器庫前で何処かの上等兵連の会話に、班のW上等兵の話と云ひ。：或は？？？と思ふ。この連隊にとつて我

く思ふが……。どうして居るのだろうか？……………。

月がこうこうと照り輝いて居る。夕暮れより吹き出した木枯しがいやに身にしゆみ、月に砲廠、厩、兵舎、そして信太の森がくつきりと浮んで見へる。：美しい夜だ……。朝比奈隆先生と満州の若村より便りが来る。

一月十二日 日曜 晴

外出。めつきり冷へる朝だ。朝来バラついて居る小雪に、外「一字欠、「套」か」を持ってT小尉の週番士官に八時半兵営を出る。今日は何のプランとてなく、大阪へ着いて地下鉄で店へ。谷口とパーラーへ行き、暇なのでブラームスの第三交響曲、チャイコフスキー「ピアノ協奏曲」等を聴き、昼前帰宅すると、母は京都へ行つて不在だ。十九日に帰る様に云つておいたから。博哉を連れて松坂屋へ行き、久しぶりにとんかつを喰ふ。うまかつた。後、朝日ビルに加納先生を訪ねたが不在に。辻本の宅を訪問。御堂筋をバスで心齋橋へ出、心ブラ。福岡を訪ねて地下鉄で阿辺「倍」野へ。四時発急行で帰る。点呼時、船舶砲兵隊要員は明日帯剣にて集合の達しある？？？この隊で船舶砲兵隊の名称を聞いたのは始めてだし、最近戦用被服庫が動いて居るので、急に嬉しくなつて来た。明日の集合？？？或は、最悪の再教育なんかではないのだろうか？？

一月十三日 月曜 晴

々程役に立たない兵隊を、もうこれ以上は置いて居かないだろうと思ふ。転属命令が出てあこがれの船舶砲兵隊へ行けるか。船舶砲兵隊より改めて召集が来るまで一先ず召集解除か？？？今月中には何とかなるだろう。昨年十月末から高田が云つてた、船舶砲兵隊要員は一月の動員計画にのつてると云ふ動員室の言が、今はつきり裏書されて来た様な気がする。

一月十七日 金曜 晴

朝夕相当地に冷へるが日中の暖かさ、全く春の様な日和だ。昼食後、友井と酒保の裏庭で視めた地方のうららかさ。遠くの森を見へかくれしつゝバスが走つて居る。懐しい南海電車も見へ、六甲の山々に神戸の街、汽船までがはつきり見へる……………。

夜、酒保でやつと手に入れて喰つた一袋の切パンのうまかつた事。正に此頃の酒保は死ぬものぐらいだ。我乍ら、賤しくなつたとつくづく感ず。今日前田が営倉歩哨に、又明日はMが表門の歩哨に。いよいよ衛兵守則を覚へねばならない。

一月十八日 土曜 晴

親友M・Kが突然支那へ発つて仕舞つた夢を見た。だが目が覚めて夢と知つた時の嬉しさ。時計は午前一時を過ぎてた。起床時間までまだ五時間半もある。限りなき喜び。楽しい消灯ラッパが鳴つて床へ入る。やつと開放された喜び、安堵、そして安らかな夢路……………。だが一日の疲れですぐ睡つて仕舞ふ。睡つたと思つたら朝

冷たい雨は、今朝も激しく降って居る。冷たい。  
……………

十二月二十五日 水曜 晴

昨日の雨は上った。今朝は素的な冬晴れの大正天皇祭の朝。急に達しがあつて外出す。友井は前の日曜に外出し、一人。以前より楽しみにしてたプランの実行出来ない事を残念に思ひつゝ、案外遅く、九時すぎ隊を出る。天王寺着十時すぎ。まず店へ行って、店より福井に電話する積りで、地下鉄で店へ行く。一月ぶりに訪ねる店。今日こそはと福井に電話したが、もう引越して居ないとの事に残念に思ひ、昼から丸井に会ふ可く電話す。早く帰宅する積りだったが、谷口に誘はれるまゝにパーラーへ行き、意外に時間を費す。正午すぎやつと帰宅すれば、母が数日前より病氣だったとの事に全く驚き、藤田がよく看護に来てくれたとの事に、心から嬉しく思つた。一時半、心齋橋。パーラーにて丸井と会ふ約束に、落付く暇もなく中「昼」食を済し、丁度訪ねて来てくれた藤田に会ひ、感慨無量の心持でオーソレミオの伴奏をす。後、共に家を出、心齋橋パーラーにて丸井と会ひ、間もなく小島と奥さんが来てくれ楽しき一時を過す。彼等は正月早々赤倉、燕方面へスキーに行き、明夜、歌舞伎座で新響、中央、其他合同による二千六百年祝典曲の大演奏会があるとか。彼等とそして師走に賑ふ街に別れを告げ、折柄急に降り出した雨の中を兵営へ帰る。おゝ寒い夜だ。  
……………

太山へ……。今年最後の日夕点呼時、明日上番厩当番二番の達しがあり、明日の外出は三日に変更されたが、結局厩当番は交代で明日の外出に。全く嬉しかった。午後九時三十分、静けさを破って今年最後の消灯ラッパは鳴る。再び還る静けさ。物凄く無数に輝く星くず。刻々と迫る歳末に外は賑つて居る事だろうに……。時折急行らしい電車の警笛が聴へる。真暗な宮庭に只一人星を仰ぎつゝ生涯忘れ得ぬ皇紀二千六百年を：思ひ出はつきぬ。午後十時三十分よりラヂオではローゼンシュトック指揮日本放送交響楽団が、光輝ある皇紀二千六百年最後の夜ベートーヴェン「第九交響曲」が高かに、演奏放送されてゐる事だろう。……………

【日記③】

一月一日 水曜 晴

午前四時起床。物凄く輝く暁の星を仰ぎつゝ、全員駆（駆）走で山の神社に初詣をし帰営。朝風呂に温まり厩へ行って、六時、ぞうにを祝ふ。初日の出。素的な夜明け。輝く皇紀二千六百年元旦の朝は、静かに力強く明ける。感慨無量。：。兵営に立つて視む。午前十一時より御真影奉拝式が行はれ、午後一時より外出。満員の電車でゆられて大阪へ。人々。何処も彼処も一ぱいの人々。帰宅。どてらにくつろいで静かに祝つた嬉しさ。：何処へも行かず「皇帝」と「南へ」を聴いて、夕食後、母に送られて天王寺へ。八時前帰営す。八時半消灯。楽しかった昨年の

十二月二十六日 木曜 晴

起床。外は未だ暗い。月が東の空に掛つて居る。冷へる。……今日も医務室の務め。明日こゝが内務検査との事に、午後大掃除をやる。中隊の内務検査もいよいよ明後日に迫つたのに、準備すら出来ぬ。医ム室の務を終へ点呼後、折柄吹き出した寒風の中で作業衣の洗たくをす。手が千切れそうだ。……身も心も疲れた。……

十二月二十七日 金曜 曇

内務検査の前日になった。毛布にも敷布にも片布すらない。昼食事（時）、寒風の中やつと時間を割いて袴下の洗たくをしようと思つたら、折柄の俄雨に、やつと乾いたばかりの作業衣も共にびしょぬれになって仕舞つた。せめて点呼後と思つたのに。消灯。万止「事」休す。

十二月二十八日 土曜 晴

遂に来た。内務検査の当日が。万事止「休」す。だが不思議にくそ度けう？が出て、医ム室へ行く。……昼すぎ、中「昼」食に中隊へ帰ると検査の最中。其時の気持。：検査終了。無事との事に全くホットす。

十二月二十九日 日曜 晴

今年度最後の日曜日。朝から素的な天気。早く朝手入を済して、初年兵は始めての引率外出に大阪へ。友井も前田も牧村も、早くから外出して行つたのを羨しく思ひ乍ら。……今年も

元旦の夜を想ひ出しつゝ。

一月二日 木曜 晴・曇・雨

一月二日。午前九時すぎ。外出者・外泊者は嬉しそに正月の地方へ出て行つた。友井も前田も。古兵で残る者、自分とM一等兵のみ。なす事もなく退屈な正月の一日を過す。外は賑つて居る事だろうに……。

昼あんなによい日和だったのに、夜に入つて遂に雨となる。冷たい雨。点呼時、正月早々入浴の使役に行く。只待望の命令の一日否一刻も早からん事を神に祈るのみ。今払暁、丸井、小島、狩野は赤倉、燕、関方面へのスキーに発つた事だろうに……。

一月三日 金曜 晴・曇・雨

一月三日。昨夜の雨は上った。午前八時、外出者は珍しく早く出て行つた。三ヶ日最後の日に賑ふ地方へ、友井も前田も。成す事もなく退屈な事。朝、余りの退屈さに医務室へ行くと、病室より流れ出るタンゴの調べに、廊下に立つてしばし耳をかたむく。後、酒保の裏庭芝布に、折柄雲間よりさんと照る陽を浴びて時を過す。退屈で長かった一日。正月の三ヶ日もまたゝく中に過ぎた。

夜になって又しても冷たい雨が激しく降つて来た。点呼八時。九時消灯。

一月四日 土曜 曇

午前十時より宮庭に於て勅諭奉読式が行はれた

いよいよあと二日。大阪は師走に賑つて居る事だらう。……………

十二月三十日 月曜 晴

今年もいよいよ明日限り。今日はいやに冷へる。金剛山脈の峯に白雪が光つて居る。おゝ寒い。初年兵は演習。平日と変らぬ静かな夕暮。外はあわたゞしい事だろうに。外泊の夢は消へた。：楽しみにしてたのに。だが元旦外出を許され、突然明日休暇決定し、外出の達しある。家に帰つても忙しだろうし、今年の最後の日、映画でも見に行こうと思ふ。

十二月三十一日 火曜 晴

十二月三十一日。輝かしかつた皇紀二千六百年もいよいよ今日限り。思ひがけなかつた今日の外出。九時すぎ兵舎を後に、外へ出る。さすが歳末のあわたゞしさを感ず。歳末の大阪。地下鉄で店へ……。散髪をしようと思つたが満員で止し、上へ上る。外の人出の割に思つた以上な暇。：さすが時局の反影の大なる事を痛感す。谷口とパーラーへ行き、心齋橋筋を歩いて十二時前帰宅。中「昼」食後ゆつくりくつろぎたかつたが明日の外出にゆずり、最後にベートーヴェン「第九交響曲」のフィナーレを聴いて三時前家を出、南海ニュース館をのぞいて、入隊して始めてニュース映画を見、もう一度心齋橋を「ママ」歩き、バックして難波より地下鉄で阿辺「倍」野へ。四時発の急行にて、歳末に賑ふ大阪、二千六百年最後の大阪に別れを惜みつゝ信

が、医務室当番の為参列出来ず、医務室で過す。明日の楽しい外出のプランを消灯後床に潜つて考へる、楽しさ。兵窓より、夜空晴れて無数の星がチカチカ輝いて居る。明日は晴れだろう。……。

今日は四日。問題の七日もいよいよ迫つて来たのに、其後消息が全く消へて仕舞つた。今まで何度かうわさされた日が何事もなく過ぎ去つた様に、最後の希望、最も有力とされてた七日も単なるデマとして過ぎ去つて仕舞ふのではなからうか？みんなの期待が大きかつただけに……と思ふ時、耐らなき不安を感ず。

一月五日 日曜 晴

待ち遠しかつた今日の外出。絶好の外出日和だ。起床後大掃除だなんて全く面くらつたが、N少尉にしては珍しく、九時當門を出る。全く春の様なうららかさだ。阿辺「倍」野より地下鉄で例に依つて心齋橋へ出、不二屋でケーキを買つて十一時前帰宅す。どてらにくつろいで、午前中福井が訪ねて来るかも知れないので、ピアノを弾き乍ら待つたが、遂に来ず、一寸悲観した。久しぶりに逢ふ事を楽しみにしてたのに。手紙を見たのだろうか？田舎へ帰つてゐるんだらうか？今一度逢ひたく思ふ。後、すき焼をして「田園交響曲」を聴き、二時前家を出、未だ正月の晴着に賑ふ心齋橋筋を店へ行き、正月のあいさつをし、シヨパン「ピアノ協奏曲一番」を聴いて、心齋橋より地下鉄で帰営す。

一月六日 月曜 曇

十二月一日。早や十二月となる。今日いよいよ初年兵が入隊して来るのだ。準備は完了した。午前九時南門外に集合し各中隊長各班長に引率され、十時すぎ舎前に到着。各内務班に来る。友井と二人で食事準備のエラかった事。全くアゲて仕舞った：エライ。：自分等の入隊当日の感激を思ひ出す。：綿の様に疲れきった体を、やっと床に潜れた時の嬉しさ。今夜北野劇場で、音楽コンクール入選者発表大演奏会があったとの事。

十二月二日 月曜 曇  
エライの只一語に尽きる。食事当番。班長当番。：全くアゲて仕舞った。：むしろ厩当番にでもつけばとすら思ふ。

十二月三日 火曜 晴  
エライ。只命令の一日も早からん事を神に祈るのみ。今夜厩当番に勤務す。だがむしろ嬉しくすら感じた。

十二月四日 水曜 晴  
午前一時十分起床して、三十分より再び厩勤務につく。寝く、そして寒かった事。星が無数に輝いている。明け方非常に冷へた。今後の勤務が思ひやられる。今朝より初年兵が始めて厩へ来、寝わらを出すのでうんと楽になった。だが爪を洗ふ。今日、一日の代日休暇だとか云つてたが、なかった。  
十二月五日 木曜 晴

長がとてもしいい人だので愉快な一日を過す。

十二月十二日 木曜 晴  
今日も又常用被服庫の使役。夜、入浴の使役をす。

十二月十三日 金曜 晴  
常用被服庫の使役。愉快に過せるので、ずつとも来たい気持がする。夜、連隊本部の不寝番に務すが、寝むかった事。

十二月十四日 土曜 曇  
今日も常用庫。使役使役に命令の一日も早からん事を只神に祈るのみ。

十二月十五日 日曜 晴  
楽しい日曜。朝から素的な上天気だ。公用で出られる様に云つたのが、急に炊事と交たいを命ぜられ弱る。：久しぶりの休みを。くつろぎたかったのに。：全く憂鬱になって仕舞った。エラかった事。だがいい体験をしたと思つた。三時すぎ母が面会に来て、不二屋のシュークリームを持って来てくれ、全く嬉しかった。なほ面会所で音楽学校時代の友、保田（ペコ）によく似た男を見た。：はたして彼だった。何年ぶりだか。此一日に召集で入隊したとの事。懐かしく思ふ。

十二月十六日 月曜 晴  
今日も常用被服庫の使役に、意義ない一日を過

西園寺公の国葬の今日。一日の代日休暇が出た。今日より食事当番を初年兵に手伝はしたのでうんと楽になった。外出があつたが今日は出なかつた。何処へ行つても今日は休みだろう。久しぶりに一寸くつろぐ。今日、母が面会に来る様に云つてたので待つてたが、来てくれなかつた。

十二月六日 金曜 晴  
昨夜の達しで急に行はれた今日の中隊教練に砲手として参加、信太山へ行く。造兵廠よりの見学に見せる為だ。先月終日行軍をやつた時、砲と共に歩くのも最後だろうと思つてたのに……。だがもう最後だろう？午後は又使役……。只命令の一日否一刻も早からん事を神に祈る。

十二月七日 土曜 曇  
朝冷たい雨が降つて居た。十二月も七日を過ぎ、今日も又意義ない一日を過す。派遣兵は今日発つたかも知れない。が、其後何の消息もない。どうしてるのだろうか。明日の外出を達せられ、楽しい消灯ラッパが鳴つて、床の中で明日のプランを考へた嬉しさ。

十二月八日 日曜 晴  
昨日の雨は上つた。素的な冬晴れの朝だ。七時五十分外出者呼集など、思ひもよらなかつた早い呼集に朝食もせず飛びだす。だが結局宮門を出たのは八時半。やはり嬉しいものだ。九時十分天王寺へ着く。いつもなら未だ兵舎に居る頃だろうに。大鉄で好きな志「し」るこを喰つて、

す。狩野より手紙が来、嬉しかった。正月スキ―に赤倉、燕へ行くとの事。羨しく思ふ。

十二月十七日 火曜 曇  
常用被服庫の使役。昼ころよりめつきり冷へて、遂にひよが激しく降り、雷鳴も共「伴」ふ。いよいよ師走らしくなつた。点呼後、久しぶりに時間があつたので湊に手紙を書く。どうしてるだろうか。

十二月十八日 水曜 曇  
今日も常用被服庫。めつきり冷へて来た。寒い。夜、厩当番に付く。……。

十二月十九日 木曜 曇  
午前一時すぎ起床して、一時半より再び勤務に付く。冷へた事。：やつと夜が明けて勤務を終へた嬉しさ。今日も常用被服庫。正に被服庫専門「門」だ。寒い。じつとして居られない寒さ。今後が思ひやられる。寝むかった。今夜はぐつすり寝られる。……。

十二月二十日 金曜 曇  
非常呼集に飛び起きる。午前五時全員武装に、全くアゲる。電灯が消へた。おゝ冷へる。暁の星が物凄く輝いてる。……。今日も被服庫。午前中エラかつたのには全く参つた。寒い。今日も陰気な空模様だ。ジツとしてられない寒さ。二十日の希望も吹き飛んだが、一月十日までに命令が出ると云ふ説が、パツと広がつたが……

地下鉄で心齋橋まで出る。今日は店が休みでさずが淋しい。友井と心ブラをして、福井には友井の宅から電話をして貰ふ事を願つて、彼と別れる。十時すぎ家に帰つたが、母は京都へ行つて不在に。淋しかった。せめて今日はゆつくり出来る事を喜んでたのに。姉が来て、すき焼をしてくれた。ドテラにくつろいで、久しぶりに大の字になってレコードを聴いた時の嬉しさ……。一時すぎ家を出て、一時半、福井と会ふ可く難波へ行く。待つてるだろうか？だが居なかつた。待つた。来ない。二時、友井に電話して、二時すぎ友井と会ふ。電話してくれたが、掛らなかつたのだそうだ。楽しみにしてたのだが……。……。四時発の急行にて懐かしい大阪に又暫しの別れを告げて信太山に帰る。愉快な外出だった。風が出て来た。寒い夜だ。厩当番に勤務す。

十二月九日 月曜 晴  
起床。厩当番一番で早速勤務に付く。今日は演習なく、エラかつた事。全くアゲて仕舞ふ。よく放馬するには弱つた。勤務を終へた後の開放された気持。そして酒保。今夜はぐつすり寝られる喜び。

十二月十日 火曜 晴  
別に特筆す可き事なく、意義ない一日を過す。

十二月十一日 水曜 晴  
常用被服庫の使役を命ぜらる。体はエライが班

。只神に祈るのみ。城より便りが来、嬉しかつた。

十二月二十一日 土曜 晴  
今日も常用庫。今日は暖い日と和だ。明日より医務室当番を命ぜられたが、明日の外出を楽しみにしてたのに、達せられず悲観して仕舞つた。

十二月二十二日 日曜 晴  
医務室当番で、起床同時、医務室へ行く。今日も素的な冬晴れ。友井も前田もそして牧村も、嬉しそうに外出して行くのに。全く悲観して仕舞つた。何日も前から床に入つては、友井と今日のプランを立て、居たのに。プランは目茶苦茶だ。医務室で一人閉ぢこもつて加納先生と若村に便りを書く。四時すぎ、みんなは帰つて来た。夜、久しぶりに中隊で演芸会がある。軍隊のみでなければ味へぬこの風意「雰囲」気……。

十二月二十三日 月曜 曇  
色んな夢を見、何度か目が覚めた。目を覚まして未だ外が真黒だった時、夢を見る事が限りなく嬉しさを感じ。起床……外は冷たい雨が降つてる。医務室へ。退屈すぎる程だ。いい班長……。愉快な一日の勤めを終へ、夜は班長より雑誌を借り読む。

十二月二十四日 火曜 雨後曇  
起床。外は未だ暗い。今日は日の短かい最中だ。

十一月十七日 日曜 晴

朝手入後、外泊者全部に人手がないのに古兵の外泊者も多数あつて、結局居残る者僅か数名。掃除の忙しかった事。午前中まぐらの手入に過ぎ、午後残留者のみで野球が始まったので、酒保の横で日なたぼっこをする。残留する者すべて分遣者のみ。さすが非常な懐かしさを感じる。再び懐かしの船舶砲兵隊へ征ける皆の喜びたるや。残留者少く久しぶりに酒保で腹一ぱい喰べる。三時半、母が面会に来てくれ、五時すぎまで面会す。嬉しかった…。

十一月十八日 月曜 晴

朝刊にて日比谷に於ける音楽コンクールの発表あり。ピアノでは黒田睦子が大臣賞を、稲村が入選し、声楽に網野さんが第三位に入選して居た。夢にみえたコンクールだが。午前午後通じて寝台のわら入れをし、夕方、突然発表された明日の行軍の準備をす。

十一月十九日 火曜 晴

終日行軍。午前中行軍と午後陣中勤務とある。起床後準備をして、八時半兵舎を正門より出る。第一分隊三番砲手として、信太山より助松へ出、国道を北上し、懐かしい浜寺に出、東へ大鳥神社に参拝す。幼き日小学校の頃、この神に参拝し、この境内で兵隊ごっこをした事を思ひ出しつゝ。後、阪和鳳町に出、信太山演習場東端に出、馬けい場せつち、天幕、飯ごう水さん等に別れて各々教育を受ける。午後三時前やつと中

〔昼〕食し、休む暇もなく、四時兵舎に帰る。数日前より足傷み、エラかった事。夜、派遣者の被服其他の返納がある。いよいよ発つのも早いらしい。酒保が完成し移転す。

十一月二十日 水曜 雨

目を覚せば冷たい雨だ。寒い。午前中、中西教官より、中隊戦闘教練の学科。午後、各教官より、学科と戦地へ行つての注意がある。こんなたる教官の注意。…：自分等の命令の一日も早からん事を只神に祈るもの。戦線へ行くみんなが羨しく思ふ。派遣者の面会がめつきり増した。各班に戦用被服が支給され、夜、各自の被服に帯剣まで返納した。感慨無量だろう。

十一月二十一日 木曜 曇

十一月も早や二十一日となる。いよいよ派遣者の発つのも近いらしい。午前中兵器庫の整理に行き、午後持場の清潔をす。其間派遣者は遂に各自に戦用被服を支給せられた。立派な姿だ。羨しく思ふ。面会所は満員だ。これから増々増へる事だろう。夜、中隊主催で各班毎に送別会を催す。上等兵がすべて用意してくれたこの席。酒も出て、七時前より点呼時まで歌ひして雑〔騒〕ぐ。酔つた。羨しい限りだ。我等への命令の一日只一刻も早からん事を神に祈ると共に、入隊して以来幾月苦楽を共にした彼等の武運長久を心より祈りつゝ。

十一月二十二日 金曜 晴

起床後一日中暖い陽を一ぱい浴び乍ら、新しく入隊して来る現役兵の入隊準備をす。朝、中支の野砲兵第三十四連隊より大部隊が帰還して来る。…：最後の夜、更けるまで話し声はつ

きなかつた…。

十一月二十九日 金曜 曇

派遣兵出發の朝は来た。さすが緊張の色があふれている。最後に朝手入を共にして、最後の朝食をす。派遣兵呼集…：各々準備を整へ営庭へ出て行つた。残留兵呼集…：各々準備を整へ営庭へ出て行つた。…：号令一下、意〔威〕風堂々、力強く、そして元気に我が戦友は新たな皇軍精鋭の一部隊として営門を出て行つた。戦線へ…：感慨無量だった…：。彼等の武運長久を心より祈ると共に、我等の命の一日も早からん事を神に祈りつゝ。皆征き、そして去つた。淋しかった。後、中隊編成替が発表された。相当移動があつたが、自分等は其まゝで嬉しかった。友井と、班長当番と食事当番を命ぜられ嬉しかった。厩へ行かなくてもいいのだ。夕方、思ひがけなく母が面会に来てくれ、シュークリームを持って来てくれ全く嬉しく有難く思つた。みんな去り、静かな夜だ。淋しく思ふ。

十一月三十日 土曜 雨

静かな朝。だがいよいよ明日初年兵を迎へるのだ。朝、最後の清潔と準備を整へ、大隊長より検査がある。明日入る者の今頃の気持。過ぎにし日、自分等の其日を思ひ浮べる。午後になつて雨は増々激しくなり、夜になつて風も出て来た。寒い。風雨だ。

十二月一日 日曜 晴

来たドンバルへ入りお茶を飲んで楽しく語る。昔の様に。…：楽しかつた一時…：。三時すぎドンバルを出て心齋橋まで歩き、次の外出日に再び会ふ事を約して地下鉄入口で別れる。再び店へ行き、地下で戦線に立つ親しき戦友に送る可く「ウキスキー」を買つて、地下鉄で阿辺〔倍〕野へ。四時発急行にて連隊に帰る。…：楽しかつた今日の外出を思ひ出しつゝ…。

十一月二十四日 日曜 曇

昨日の神嘗祭に次いで今日は日曜。今日は友井と前田が喜んで出て行つたので淋しかった。別になす事もなく、楽しかつた昨日の外出を思ひ出しつゝ、気楽な一日を過す。夜の楽しかつた事。ドンチャン雑〔騒〕ぎをす。全く愉快だった。派遣者の命令は今日も出なかつた。何日行くのだろうか。

十一月二十五日 月曜 曇

元老西園寺公、昨夜九時五十四分遂に薨去。午前中各個教練と分射、午後学科に、今日も一日暮る。

十一月二十六日 火曜 曇

十一月二十六日 火曜 曇  
今日も陰気な天気だ。風がめつきり冷たくなつた。午前中学科、午後銃教練。もう数日にして現役兵が入隊して来ると云ふのに、未だ派遣者に命令が出ない。半月も前、明日にも発つ様に云つたのに。我等はどうなるのだろうか。それより我々に命令の一日も早からん事を神に祈

午前中分射をやり、午後厩の清掃をす。楽しい。点呼後、みんなと別れるのもあと二日。点呼時、明日の外出を許さる。

十一月二十三日 土曜 曇

神嘗祭。外出が許され、今日ぞ二年ぶりに懐かしい福井に再会出来る喜びに寝むれなかつた。夜が明けた。美しい朝だ。朝手入…：休日の朝の日課を済して外出者呼集す。週番士官の注意があつて、九時、今までになく早く営門を出る。嬉しい外出。其嬉しい外出の何層倍か、今日の外出を嬉しく思ふ。阪和にて大阪へ出、思ひ出の天王寺駅より電話をす。約二十分近くも待つて通じた時の気持…：。懐かしい福井の声。…：午後二時、朝日ビル入口で会う約束をす…：。天王寺線にて久しぶりに藤田を訪ねて、十一時前帰宅す。思ひがけなく京都より姉と子供が再び来て居たのには嬉しかった。何年ぶりにか母と姉と共に頂いた食事のうまかつた事。ベートーヴェンの「熱情奏鳴曲」を聴き、ピアノを弾く。午後一時、家を出て地下鉄で店へ行き、谷口とパーラーでお茶を飲んで、タクシーを捨〔捨〕つて朝日ビルへ行く。午後二時。暫く待つて来た。懐かしい福井が…：。神戸の波止場で別れて二年。一日否一刻も忘れ得なかつた懐かしい福井。…：何度か夢にみたこの一時が、遂に今現実となつたのだ。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。二年前の面影と少しも變つていない福井。演奏会の夜よく歩いた思ひ出の舗道を、淀屋橋に出て御堂筋を歩む。そしてよく

を感ず。三時終了し、班長室に入って退屈な時間を費す。昨日の腹一ぱい喰ったマンヂュがたゝったのか、又腹具合が悪い。夜、狩の、小島に端書を書く。

十一月六日 水曜 晴

午前九時より正午まで、午後一時より二時半まで、二回にわたり昨日に引続いて幹候試験がある。余りにも大き過ぎてつかみ所のない問題に面くらう。相変らず呑気な試験場風景だ。筆記試験も終り、酒保の芝ふに行く。夜、久しぶりに酒保でマンヂュが買へた。うまかった事。突然、明日の幹候試験無期延期との事。：幹候無期延期？？明日一日に迫ったのに？？又デマが飛ぶ。一体自分等はどうなるのだろうか。戦地へ発つのか、召集解除か？デマがデマを呼ぶ。近日中戦地へ発つにしては余りにも落付きすぎと思ふが？？？？？

十一月七日 木曜 晴後雨

夜中、南京虫の襲撃と誰かが寝言で叫んだ。「満期ダ満期ダ」の巨声に夢を破らず「れ」、ホトンドが起きて仕舞った。笑へぬ風景だった。起床点呼後、全員十日祝典当日の準備だが、幹候は待期の中に、又しても何もなす事もなく退屈な一日を過す。明日はいよく「樞原神宮参拝だ。帰路行軍との事。夕方より遂に雨となる。」

十一月八日 金曜 晴

昨夜の雨は上った。素的な秋晴れだ。午前六時

起床。八時前兵舎を後に信太山駅へ向ひ、阿辺〔倍〕野で大鉄に乗換へて樞原へ。天気はよし。阿辺〔倍〕野附近は群衆で一ぱいだ。山へ野へ、楽しい一日を過すのさ。八日。店の休みで皆も何処かへ行つたかも知れぬ。久しぶりに車窓より大和の秋を賞でつゝ、十時すぎ樞原へ着く。樞原。樞原神宮へ。神前にはすでに大阪師団全将兵が整列して居た。何と云ふ意〔威〕よう。十一時、各部隊の吹鳴らすラツパの中、李師団長宮殿下御参拝あらせられ、終つて全員、

「君が代」「紀元二千六百年頌歌」の大合唱をす。紀元二千六百年のよき年。先に二月十一日この神前に奉納合唱を行い、今日又この歌を捧ぐ。軍人として：感激無量のものがあつた。参拝終了後、各部隊神武天皇陵参拝して国道へ出る。歩兵部隊、騎兵部隊、自動車隊、そして我砲兵部隊。えんえんたるこの意〔威〕風堂々たる行進に感激し、自分も其一員なるを思ふと限りなく嬉しさを感じた。八木町に出て、各部隊各々大阪へ。自分等もカーネーションの故郷を真近に視めつゝ、八木町より高田町へ出、二上山の峠を越へて、七時前富田林町に着き大休止となる。

十一月九日 土曜 晴

午前一時半起床。三時富田林町を出発。信太山に向ふ。晩秋の暁の星は無数に輝き、非常に冷へる。おゝ寒い。もうこんな季節だろうか。早いものだ。行軍を続ける中に温まって来た。長い間樂をした為エラかった事。寝い。真黒な路

子と其樂団を聴く。久しぶりに味はうタンゴの調べに耐らなく嬉しく感じた。演芸会も終り、五時ごろ、母に姉を宮門まで見送つて行く。無数の地方人がどつと帰つて、再び薄暗い電灯がついた。何となく淋しさを感ず。今夜外では奉祝の嵐にうずまいて居る事だらう。夕食後、酒が出たが：。心齋橋は賑つてる事だらう。

十一月十一日 月曜 晴

紀元二千六百年祝賀会。今日のよき日を祝して一億国民こぞつて祝賀会が催されて居るのに、今日はもう平常通りの演習。起床後より消灯時限まで戦医室当番につき、今日の一日を過す。午後体格検査がある。いよいよ征くらしい。検査名簿に分遣者のみ別だったとか何とか。又しても嬉しい風説。今夜いよいよ命令が出るこの事だったが遂に出なかつた。

十一月十二日 火曜 晴

一昨日の代日休暇が発表され、今日の外出者の一部が昨夜発表され、朝手入後、自分の名が発表された時の嬉しさ。正に二十日ぶりの外出だ。呼集があつて午前九時すぎ宮門を出る。素的な天気……。大阪へ着いて友井と先ず大鉄で喰つたしることおはぎのうまかつた事。気になつた写真を取りに行く可く、友井と別れて久しぶりに省線で玉造へ向つたが、途中足を伸して大軌に乗換へてカーネーションを訪問すべく弥刀へ行く。思ひ出の弥刀：アパート。だが丁度大阪へ行つて不在との事に、残念に思つた。久し

ぶりの再会を夢みてたのに。後、再び大阪へ出、玉造の写真屋へ行く。思つた以上よく撮れてたのに断然気をよくし、丸井と会つてバスで戎橋へ出、昼すぎ帰宅。焼肉で頂いた昼食のうまかつた事。時間なくすぐ家を出、店へ寄つて、四時発急行で信太山へ。

十一月十三日 水曜 雨

午前中、砲列をひいて後の中隊戦闘教練をやる。午後、反対教育で砲手班は馬術だったが雨となり、乗らずに厩内で要了〔領〕の説明があり。早く済んだので舍内に帰つてカーネーションに便りを書く。

十一月十四日 木曜 曇後晴

昨日の雨は上った。冷へる。午前中、反対教育で馬。始めて乗る馬。：愉快だった。午後は銃剣術で試合をす。そして五時半より、又厩当番一番につく。明日の夕五時半までと思ふとぞつとする。だが点呼時まで二番の友井と共だので嬉しかった。色んな話をす。酒保からルンバ、タンバのメロディが流れて来、酒保へ行つてる連中が羨ましく、淋しかった。点呼ラツパが鳴つて友井は帰る。夜が更けて月がいやにさえて来た。いい月だ。冷へる。

十一月十五日 金曜 晴

午前一時半、一先ず勤務を終へ就寝。起床、同時に再び勤務につく。だが午前午後通じて中隊戦闘教練で馬の大部が演習に行つたので樂だつ

を黙々として歩く。夜明け。待ち遠しかった太陽が昇つた。暖くなって汗ばんで来た。太陽の有難さを痛感した。いくら歩いたか、七時すぎ平野田町、大美野田園都市へ到着す。美しい町だ。文化住宅街。大休止が出て、附近の人々の接待で喰つた朝食の美味かつた事。八時すぎ出発。再び行軍を続け、十時やつと信太山の原隊に帰る。午後休憩もなく、明日の祝典の準備に半日を過す。

【日記②】

十一月十日 日曜 晴

紀元二千六百年祭典。

全員二装用着用。午前九時當庭集合。遙か皇居に対し奉り遥拝を行ふ。今日このよき日を祝ふが如く初冬の陽さんさんと降りそゞぎ、遠く山の峯の白雲が如何にも神々しく感じられ、吹き鳴らす「君カ代」のラツパははるかこたます。敵かな朝だ。終、二千六百年頌歌を合唱。連隊長の訓話があり式を閉ぢ、午前十時営内を一般地方人に開放。どつと雪崩込む人の群に、午前には當庭に於て各種競技と馬術を、午後は連隊講堂にて映画と演芸会の催が行はれる。面会の家族や知人が来て、営内を案内する人々。其中にひるすぎ、母と姉を見出す。京都から、わざわざ来てくれたと思ふと嬉しかった。営内を案内し、酒保の横の芝の上で今日は大びらに御馳走を出して喰つた。うまかつた事。演芸会では大辻司郎や秋山右楽左楽などが来たが、淡谷のり

た。午後五時半やつと勤務を終へる。こゝでのもう勤務も最後だと思ふとホットした。：来る可き時が遂に来た。突然夕刻、外泊許可者の発表があつた。明朝より、二泊三日或は一泊二日で帰郷するのだ。前段と後段に別けられ、ほとんど補充兵全員が出るこの事。いよいよ来る可き時は来た。自分等もこの部隊と共に戦線へ発つ事だらう。外泊。：外泊によつて発表された派遣。緊張の空気の中に、外泊出来る喜びに満ち満ちて居る。月がいやにさえて居る。感慨無量だ。厩当番の疲れを、床に潜つて外泊のプランを考へる。

十一月十六日 土曜 晴

朝礼時、中隊長の精神訓話があり、後、今度の発表について種々注意と説明があり、大部分は、第一線に近く発つ予定だが、「艦載砲分遣者は、別命に依つて戦線に発つ為残留する」との事。遂に夢に見た事が実現するのだ。：この一言をどんなにか夢に見、待ちに待つた事だらう。その言葉が今遂に、中隊長の口から出たのだ。我等は船舶砲兵隊の一員として戦線へ発てるのだ。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。起床前より用意をし、起床同時に外泊者は喜んで出て行つた。午前中は散開教練。午後、幹候有資格者の口頭試問のある予定だったが中止となる。点呼時、明朝よりの外泊者の発表があり、結局分遣者を外いて補充兵全部発つ事となつた。外泊の夢は破れ、厩、そして勤務勤務で忙しくなるだろうが……。

い休みに、外出者は喜んで出て行ったが、間もなく劇〔激〕しい雨となる。

十月二十一日 月曜 曇

紀元二千六百年記念大観兵式の今日。大阪では御堂筋で大阪最初の大市中観兵式が行はれるが、我部隊は同時刻十時より南練兵場にて型ばかりの観兵式を行ふ。せめて市民の歓呼の中御堂筋へ行きたかったが、この記念す可き観兵式に参加できた事を光栄と思ふ。午後は明日の検閲の為各個教練。

十月二十二日 火曜 晴

いよいよ第一期検閲第一日の今日。補充兵全員軍装検閲を受け、各中隊の済むまで訓練して、正午近く第六中隊の検閲を受ける。講評は「優良」との事。午後、二十五日の分隊戦闘教練の為に信太山へ行って猛訓練をする。明日延刻外出が許可されるとの事。耐らなく嬉しく思ふ。

十月二十三日 水曜 晴

今日は靖国神社例祭で又休み。午前中は演習で、午後延刻外出の許可が出る。午前五時半起床。信太山へ分隊戦闘教練に行く。全く激烈だ。演習成績思はしくなく、外出時間が刻々短縮するのにいつ終るともなく、やっと帰途につくと溝に砲車をはめこんだりし、一時前兵舎へ帰り手入れして、二時前やつと外出す。信太山駅へ駆けつけて乗ったのが普通車二時半天王寺着。例により友井と地下鉄で難波へ出、「月ヶ瀬」へ

よりついに当った当番勤務につく。馬馬馬。放馬放馬。泣くにも泣けなかった。午前一時半、やつと交代が来て兵舎に帰って床についた時の気持……。

十月二十九日 月〔火〕曜 曇雨

床についたと思つたら夜が明けた。起床ラッパ。再び当番につく。午前六時より午後五時半までの長かった事……。昼すぎより遂に雨となり増々激しくなる。五時頃、面会の通知に代つて貰つて行くと、思ひがけなく店の若場さんと北尾さんが待つて居てくれた。暇なので店を早く引いて来てくれたのだそうだ。この雨の中を遠くから、全く嬉しく思つた。時間なく余り話も出来なかつたのには残念だ。兵舎に帰つて当番勤務も終へた喜びもつかの間、秋季演習参加を命ぜられる……。だが昨夜に引替へ床に入った時の気持。

十月三十日 火〔水〕曜 雨

防空演習の慰労休暇。朝から雨。今日は外出出来るだろうと思つたのに出られず、友井と全くゆううつになる。母が待つて居るだろうに。だが雨だのでせめての慰めにもなる。休養だが、一日中馬具のみがきに過す。夜、演習参加の準備をす。

十月三十一日 水〔木〕曜 晴

紀元二千六百年記念大観兵式に賜つた勅語奉読式の為、全員午前八時集合。連隊長の奉読の後、

行ったが休み。友井と別れて、今日こそ二年ぶりに会ふのを楽しみにカーネーションに電話す可く、公衆電話で番号を問合せが不明で、全く悲観す。入隊して以来楽しみにしてたのに。三時帰宅。着物に着換へて四時半までくつろぎ、店へ行く。そしてショパンピアノ協奏曲とチャイコフスキのピアノ協奏曲を聴いて、思ひがけなかつた夜の心齋橋を楽しく散歩する人々の群に、過にし日を思ひ出しつゝ帰營を急ぐ……。

十月二十四日 木曜 雨

寝苦しい夜だった。熱があり、寝汗が出て悪寒がした。寝冷へでもしたのだろうか。起床すれば雨。冷い秋の雨だ。だが明日の検閲の為雨の中を軍装検査を受け、午前中分戦をやる。午後は明日の銃教練検閲の為の訓練を受ける。

十月二十五日 金曜 曇

いよく検閲の今日。悪かつた気分もすっかりよくなつて、元気に兵舎を出る。午前中は検閲準備に忙殺され、午後三時より練兵場に於て銃教練と分射を受ける。講評は非常にいいとの事。最後の明日をガンバろうと思ふ。

十月二十六日 土曜 晴

いよく最後の検閲の日。午前五時起床。用意を整へ信太山へ行く。最後の、そして最も重要な今日の検閲。皆の緊張。最初馬術訓練急坂登降等があつて、分隊戦闘教練をやる。検閲は終つた。講評は優良。皆の歓喜と安堵。正午兵舎

精神訓話があり、解散後、昼からの軍装検査の準備をせんとすると、急に演習不参加残留を命ぜらる……。後、暇だった事。昼から参加部隊の軍装検査中■ぎに時間を費す。今日母が来てくれるかと思つたのに。いよいよ十月も終り。明日から十一月だ。

十一月一日 木〔金〕曜 晴

十一月。遂に來た十一月が……。思へば早いものだ。六時全員起床すれど起床ラッパ鳴らず、十一月より六時三十分起床との事に、思ひがけなかつた三十分を再び床にもぐりこむ。嬉しかつた三十分だ。馬手入をして後、九時呼集だ。九時より突然、中隊の幹部候補生試験がある。後、練兵場の毒ガス実験室へ行き、催涙ガスの中で訓練をうけ、泣いて仕舞ふ。苦しかつた。午後、散開教練をする。今日こそは母が来てくれると思つたのに。いよく明日演習参加部隊は出発する。

十一月二日 金〔土〕曜 晴

第三大隊今朝演習参加に、午前五時全員起床。馬手入して朝食後、残留部隊見送りの中をさつそうと出発して行つた。今夜は塚口宿営だそうだ。後、午前中舎内の大掃除をし、午後箱馬場の堀返し作業をす。残留馬二頭。厩へ行く事もなく、時間が余つて仕方ない。こゝの隊に入つて始めて退屈さを感じず。待望の夜が来て酒保に行けど又買へず。就寝後、限りなき淋しさを感じず。明日の明治節に外出なしとの事。面會に來

へ帰る。全くホットした気持だ。静かに激しかつた三ヶ月の猛訓練を回こする。二時すぎ、突然の面會通知に面會所へ行けば、思ひがけない、満州の西村がマンヂユを持って来てくれた。二三日前帰り、俺の入隊を知つて来てくれたのだ。久しぶりに学校時代の思ひ出話を時を過し、四時すぎ、今度は店の小林君がバアさんよりのシュークリームを持って面會に来てくれる。思ひがけなかつた。大好物のシュークリームには全く嬉しかつた。六時近くまで話す。今日は愉快だった。なほ若場、田辺、北尾さんからのレターを床に入つて読む。今夜、新響の第二夜「ペーローヴェンの夕」。今一度聴きたいと思つた新響が、ローゼンシュトックの指揮で今夜ペーローヴェンの第三交響曲「英雄」を演奏するとは、余りにも皮肉だ。

十月二十七日 日曜 晴

素的な秋晴れ。外出者は八時すぎより出て行つた。時間は早し、天気はよし。羨しい限りだ。午前中たまった洗たくと溙に手紙を書き、午後酒保の横の芝の上に久しぶりにくつろぐ。楽しい一日だった。

十月二十八日 月曜 晴

検閲は優秀な成績裏に終つた。肩の重荷を下した気持だ。もう劇〔激〕しい演習もない。午前中銃剣術、午後砲廠にて砲の手入に過す。今日、店の休みに誰か来てくれると思つたら、思ひがけない母が来てくれ嬉しかつた。午後五時半

てくれるだろうか。

十一月三日 十〔日〕曜 晴

明治節の今日。午前九時より家庭にて残留部隊遥拝式が行はれた。日曜と重なつた今日の明治節。素的な秋晴れなれど外出なく悲観す。だが馬手入なく、盛会の極み。友井、前田、中のと、思ひがけなくオハギとマンヂユを腹一ぱい喰つた。うまかつた事……。時間が余つて退屈に耐へず。入隊して始めての退屈さを感じず。今日こそは母が面會に來てくれるだろうと待つてたのに、悲観して仕舞つた。

十一月四日 月曜 晴

残留者全部演習に行つたが、幹候有資格者のみ居残り、明日に迫つた試験勉強を命ぜられたが……。退屈の極みだ。昼食時誰も居らず、僅か八名で思ひも寄らなかつた盛會な昼食をす。軍隊に入つて始めてのこんな昼食。うまかつた事。昼食後再び酒保の芝ふに秋の陽を一ぱい浴びて横になつて居ると、思ひがけなく母が面會に來てくれた。昨日姉が大阪へ來たとの事。残念で耐らなかつた。

十一月五日 火曜 晴

午前中雑談に過し、午後一時より愈よ幹候試験を受ける。一時、有資格者一同集合訓示の後、試験場へ入る。試験だと云ふのに、皆の朗かさ。この試験のみの試験風景だろう。さすが幹候だと思つた。何処か他の者と異つた所がある事

灯後まで楽しく雑談にふける。思ひ出はつきぬ。この素的な船舶砲兵隊に再び来れる日を神に祈りつゝ床につく。

十月九日 水曜 晴

十月九日が来た。今夜いよ／＼懐かしいこの船舶砲兵隊を後に、信太山の原隊へ帰るのだ。こゝに於ける最後の起床ラッパを聞き、朝の点呼後、いつもの様に馳(駆)足をして堤防へ上る。体操。めつかり冷へる。前の紫色の山から朝日が昇った。美しい夜明けだ。だが今朝が最後だと思ふと。…午前十時より軍装で輸送司令部へ申告に行く。そして、参謀長より訓示を受け兵舎に帰る。よく通ったこの道この浜。部隊長の訓示あり。班長に申告す。中(昼)食後整頓をし、午後四時、この懐かしい兵舎に限りなき名残りを惜しみつゝ、市中を行進して広島駅へ。五時より約三十分解散あり、ビールを飲んだ。うまかつた事。午後六時五十分、わざ／＼見送りに来てくれた各班長班付の心からなる見送りに心から感謝し名残りを惜みつゝ思ひ出の広島を後に一路大阪へ向ふ。楽しい車中。愉快な一夜。明日の日知れぬ我等は腹一ぱい喰つてそして雑(騒)ぐ。歓声と爆笑。…だが、いつか疲れてか、一人睡み一人寝り、余程静かになった。一体自分等はどうなるのだろうか。原隊へ帰つても野砲の事は解らぬし、今日の参謀長の訓示にあつた様に、再び船舶砲兵隊へ改めて入隊するのだろうか?? 只知るは神のみだろう。でも再びあの思ひ出深い素的な船舶砲兵隊に一日

も早く入隊出来る日を神に祈ろう…。糸崎と尾道の国防婦人会の接待には嬉しかった。ガンバラねばと思ふ。岡山を過ぎ、深夜の山陽路を一路大阪へ。眠くなつた。一寸やすもう。

十月十日 水曜 晴

うつゝとした。午前三時だ。列車は明石附近を通過して居る。神戸を通り、いよ／＼大阪へ。懐かしい大阪だが…。大阪着四時五十分。省線にて未だ真黒な大阪市内を懐かしく視めつゝ天王寺へ出、阪和で信太山へ。阪和で思ひがけなく母と姉、博哉が出迎へに来てくれ嬉しかった。駅へ問合せたとの事。六時前阿辺(倍)のを発車して、六時すぎ信太山へ着く。いよ／＼原隊へ…。申告を済し、福谷教官、高橋曹長に別れを告げ、それ／＼中隊へ。久しぶりに会ふ戦友は心から迎へてくれ労をねぎらひ、全く嬉しかった。懐かしい原隊。だが…。午前中、二装用其他の支給と整頓に過し、午後、明日の実弾射撃の為の演習だ。前夜寝て居ない疲(れ)れい。全くエラカツタ。演習後、いよ／＼馬手入。馬馬馬。久しくサワラなかつたので恐しかった。全く一寸の暇もない。明日午前五時起床、演習参加とか。中隊長ですら宇品に於ける自分らの訓練が何であつたか、毛頭知らない事を思ふと一寸痛快だ。

十月十一日 金曜 晴

午前五時起床。上野芝の射撃場へ実弾射撃に行く。久しぶりの行軍。冬服で汗だく。一寸伸びつた。一日中内務班で寝る。そして家の事や色々の事を考へる。疲も大分に出てるのだろう。苦しかった。今日も食事せず。

十月十六日 水曜 晴

腹具合悪し。だが明日明後日は休みだったのでガンバツて訓練に出る。午前中分射、午後は前の練兵場に於ける戦闘教練、夜夕食後夜間射撃演習あり弱る。全く激烈だ。点呼時、明後日の外出を発表さる。明日一日静養したいと思ふ。

十月十七日 木曜 晴

神嘗祭。午前五時半起床。全員練兵場にて各個教練がある。午前七時終了、馬手入。外出残留者のみで、午前中兵舎内外の清潔、午後は雑務に時間を費す。腹具合一行(向)に思はしくなく、明日の外出も残念乍ら見合そうかと思ふ。

十月十八日 金曜 晴

靖国神社臨時大祭の今日。午前九時半より連隊全員集合。連隊長よりの精神訓話があつて、午前十時十五分、陛下御親拝の時刻、遥拝、黙禱を捧ぐ。この超非常時下、二千六百年のよき年の大祭日、軍人としてこの式に列するのも感激一しほ深し。式後十一時頃より外出が許さる。今日は遅刻外出の予定だったのに中止になり、皆全く悲観す。時間なくプランも目茶苦茶だ。とにかく大急ぎで信太山へ馳(駆)つけけ阪和で大阪へ。阿辺(倍)野より地下鉄で友人と難波へ出、「月ヶ瀬」へ行つたが未だ開店前で、

る。午前中射撃をし、昼前一部兵舎へ帰り馬手入をす。後、暇があつたので新しく支給された二装用にエリシヨウを付ける。この服で明後日外出できると思ふと耐なく嬉しい。僅か四五名で夕手入をす。エラかつた事。後、母が面会に来てくれて嬉しかったが、ついに来る可き日の来た事を話さる。……………。

十月十二日 土曜 晴

午前中分射をやる。だが分遣中、一月に於ける残留者の進歩ぶりに驚き、自分等は全く操作が解らなかつた。午後は毒ガスマスクの使用法の教育を受ける。馬馬馬。一分の暇もない。何日再び「船舶砲兵員に命令…」の命令を聞く日が来るだろうか。時計を視ては過ぎにし日々の日課を思ひ出す。船舶砲兵。明日、待ちに待った外出日だ。明日の日を入隊して以来どんなに待ち夢みた事か。だが皆の緊張をカイで居るとの事で、全員外出禁止を命ぜられ、其前夜半を期し行はれる非常呼集演習参加の砲手として編成を命ぜらる。分遣して何も解らぬのに。全く悲観す。母は御馳走をして明日の始ての外出を待つて居るだろうに。

十月十三日 日曜 晴

午前四時、非常呼集があつて仏曉演習に参加す。寝い所へ腹具合悪く、外出止に全く気をくさらし乍ら。実にエラかつた。七時前やつと演習が終り、馬手入を済して舎内へ帰ると、外出すべしとの命令だ。思ひがけない命令。さすが嬉しい。

高島屋の名物食堂で「しる粉」を喰べ十二時半帰宅。今日は巻焼で中(昼)食をし、ピアノを弾き、リストのピアノ協奏曲を聴いて二時前家を出、心齋橋を歩いて阪根へ行き、後、西村の写真屋へ写真を撮りに行く。バスで戎橋まで帰り、散髪をして、今一度心齋橋を歩いて地下鉄で阿辺(倍)野へ出、四時発の急行にて信太山に帰る。時間が少なかつたが、写真も撮り散髪も出来、又今日は余程腹具合がよかつたので嬉しく愉快だつた。新響の秋季大演奏会、日時曲目決定し、今一度聴きたいと思つてた新響が、ベートーヴェンの「英雄」、ピアノ協奏曲「四番」、ドボルザーク「新世界」そして「ペトルシユカ」をやるとは、余りにも皮肉だ。

十月十九日 土曜 晴

午前午後を通じて各個教練。腹具合依然思はしくなく、寝冷へしたのか体が綿の様に疲れきつて仕舞つた。検閲が終るまでガンバラねばと思ふが、食事も出来ず(藤本部隊に比し物凄くマジ点もあるが)、目に見へてやせていく様な気がする。点呼中教官に呼ばれて行くと、新しく発表になった国民進軍歌の譜を見せられ、教へてくれとの事。意外でもあり又嬉しかった。

十月二十日 日曜 雨

今日午前中、明日の観兵式予行の予定だったが、起床後各個教練あり、後休みとなる。腹具合の悪い所へ風邪気味で熱があり起床のつらかつた事。綿の様に体が疲れきつていた。思ひがけな

かつた。入隊以来待ちに待つた今日この日。早速二装用を着て整列。九時すぎ営門を出、信太山より阪和に乗る。大阪大阪。日曜でハイカーの群で一ぱいだ。メツチェン、メツチェン。先ず阿辺(倍)のより地下鉄で難波へ出、待望の不二屋へ行つてクリムソーダを飲んで、南海にて帰宅。三月ぶりの懐かしい我家、我部室。飛つく思ひにピアノを弾き「皇帝」を聴く。嬉しそうな母の顔。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。畳の上に大の字になり、腹一ぱいすぎ焼を喰ふ。また／＼く間に一時前となり、くつろぐ暇もなく家を出難波へ出て地下鉄で懐かしい店へ行く。突然の訪問に皆の驚きたるや……………。間もなく丸井が来、谷口に皆の連中と皆で、懐かしい二階のパラーでお茶を飲み、店を出て丸井と心ブラをす。心ブラ。嬉しかった。後、心齋橋パラーでコリアを飲んで丸井と別れ、阿辺(倍)野へ出て午後三時出発の急行にて信太山の連隊へ……………。

十月十四日 月曜 晴

午前中検閲の為の各個教練をやり、午後は前の練兵場にて戦闘教練をやる。腹具合いぜんとして悪く、砲車にゆられて全く弱る。夕食から食事せず、苦しい一日を過す。

十月十五日 火曜 晴

腹具合悪く耐へ得ず、今日は早朝より演習だのでついに休ませて貰い、検閲前でもあり外出後の事だったのでガンバツたのだが、体には勝てな

賑はつてるだろうに。

九月二十四日 火曜 曇  
今日は朝から陰気な空模様。工兵棧橋より乗船して今日は船へ行く。五百トン余りの小さな船に砲が十門も備はつて居るのだ。この船で近く玄海灘へ実弾射撃に行くと思ふと痛快だ。朝から分射だが、午後雨となつて早く兵舎に帰れば、母から便りとチョコレートにする粉が小包に来て居た。嬉しかった。藤田が召集解除になつたとの事。

九月二十五日 水曜 晴  
昨夜母が送つてくれたしる粉を朝食食べた。うまかつた事。夢にみたしる粉を。：今日は素的な天気。むしろ暑い程だ。今日も船へ行き、一日中分射をやる。夜、酒保でふと新聞を見ると、今夜新響のペトルシユカの放送があるのだが。

九月二十六日 木曜 曇後雨  
又カーネーションの夢を見る。：みんなどうして居るだろうか。今日は別に特筆す可き事なく、長らく照り続いた空も夜ついに雨となる。

九月二十七日 金曜 雨後曇  
目を覚せば雨。こゝへ来て始めての雨だ。兵舎内で点呼を済し、練習船へ行くのを止して、午前中手旗と重機関銃をやる。午後、雨が上つたので練習船へ行き分射。四時過、訓練を終へて兵舎へ帰ると、思ひがけない成田さんが面会に

衛兵に立つ。闇の海と：波の音。外衣を通して雨がしゅむ。午前十時起床。甲板へ出ると、船は正に関門に入らんとして居る。壇の浦。右に下関左に門司の街を視めつゝ、久しぶりに見る関門。ビル、台湾航路の新造船高砂丸や日新丸、外国船の群を通つて投びよう。演習にうつる。午前十時ばつびよう。いよく、関門海峡に入る。後、夕方まで投びようし、朝鮮海峡に入る。：夜に入つて相当にゆれだして来た。：駆逐艦が波をかぶつて同行して居る。銀河が美しく無類の星が輝いて居る。

十月四日 金曜 晴  
六時起床して甲板へ出る。今日は素的な秋晴れだ。はるか彼方に陸が見へる。何処だろう？船は島々をぬつて進む。美しい島。白く輝く灯台。まるでお伽の国の島の様だ。きり立った絶壁に「フィガロの洞くつ」を想ひ出す。やがて船は静かな湾に入った。眼前に広がつた美しい街。釜山だ。満州旅行の時を想ひ出す。ビルが朝日に美しく見へた。デパートだろうか。汽車が走つて山の頂まで美しい道がつき、住宅らしい家が無数に見へる。美しい港の街、釜山。すぐ側の山の頂から砲撃を受けつゝ、七時すぎ港に投びようした。上陸は出来ない。羨しく眼前に視めて演習をやる。ひる前演習は終了。正午、この美しい港の街、釜山に別れを告げて港を出る。遠ざかる街、美しい島々。船は再び朝鮮海峡へ。―さらば朝鮮。朝鮮海峡。朝鮮の山影はすでに水平線に没した。波が高く相当動よす。

来てくれた。わざわざ九州から面会に来てくれ、家の事母の事を非常に心配して居て下すつた。後の事は必ず引受けるから心配せずにとの事。感謝の言葉もない。とても忙しいとの事。一時何分かに広島に着いて、六時過ぎの急行で帰られた。

九月二十八日 土曜 晴  
今日新しく補充兵が入隊するとの事。我々は古兵となる。朝から例の如く練習船「よりひめ」へ行く。この船での訓練も今日限り。いよく、朝鮮海峡へ行くとか。一日の訓練を終へて帰ると、今日入つたばかりの補充兵が沢山居た。早速敬礼されたのには、一寸まごつきもし又限りなく嬉しかった。自分らは古兵なのだ。明日、待望の引率外出がいよく、許されるとの事。

九月二十九日 日曜 晴  
九月二十九日。入隊して早や二月。思へば早いものだ。午前三時起床して不寝番勤務につく。昨日入隊した補充兵兼務で、起床ラツパ前起床する者等々、丁度二ヶ月前の自分等の姿を想ひ浮べつゝ微笑する。敬礼されるし、古兵殿なんて云はれたのには弱つた。だがもう古兵なんだ。午後ついに外出の許可が出、午前中一同再び金輪島へ行きハリキつて演習。午後の外出を楽しんで居たが遂にお流れに。全く悲観す。昼からの長かつた事。久しぶりに谷口に便りを書く。外出出来なかつた変りに酒保で皆喰つた喰つた。夜、演芸会がある。日独伊遂に同盟せり

午後には休与「養」。四時頃、濟州島を右げんに見る。美しい夕暮。真赤な太陽が紫色の雲に見へかくれし乍ら、濟州島の後方に沈んで行つた。

十月五日 土曜 晴  
起床すれば、船は静かな瀬戸内海を滑る様に進んで居る。夜半、関門を通過したとの事。美しい島々。画の様な瀬戸の海を鑑でつゝ一路宇品へ。今日も演習なく甲板につどいする我々の上に、秋の陽がさんくくと降りそゞいで居る。十時すぎ秋の宮島を左げんに視めつゝ、十一時宇品港に帰る。昼食を船でして、正午上陸。兵舎に帰る。午後には休与「養」。酒保がないので怪しい。楽しみにしてた明日の外出も又ないらしい。

十月六日 日曜 晴  
今日は日曜だが、検閲を前にして午前中は金輪島へ行き最後の分射を、午後は軍装検査と各個教練をやる。いよく、あと三日。明日の実弾射撃はガンバロウと思ふ。八日午後、今度は外出できるらしい。

十月七日 月曜 晴  
今日はいよく、実弾射撃。午前五時起床。未だ真黒な空に星を仰ぎつゝ準備。六時、兵舎を出て工兵棧橋へ。七時、よりひめ丸に乗船。宇品港を出帆してカプト島へ。再び瀬戸の風景を賞でつゝ、約二時間にしてカプト島沖二千米へ着く。実弾射撃開始。耳をつんざく砲声。水中高

――と。  
九月三十日 月曜 晴  
九月もいよく、今日限り。明日は十月、早いものだ。今日も金輪島へ行く。明後日はいよく、朝鮮海峡へ出帆するとの事。

十月一日 火曜 曇後雨  
十月一日。早や十月の声を聞く。早いものだ。興亜記念日に五時半起床。馳「駆」足で神社に参拝す。今日は浦塩丸へ行く。この船で朝鮮海峡へ行くのだ。午後雨となり兵舎へ帰る。今日から防空演習で、灯火管制下点呼を受ける。いよく、明日出帆だ。

十月二日 水曜 曇  
今日はいよく、船に乗るのだ。待ち遠しかった今日。目を覚せば今日も雨。午前中乗船準備に過す。昼頃より雨は上る。午後一時すぎ兵舎出発。午後二時浦塩丸に乗船す。御用船の船室様。映画「麦と兵隊」を思ひ出す。午後三時いよく宇品の港を出帆す。遠ざかる宇品の港。この港より何百万何の兵士が戦線に発つたのだ。：ふと彼等の気持を考へる。出帆後三時間、夕闇迫る海上島影に堂々我艦隊をいようを見る。夜、灯火管制下の船中。少しゆれて来た。船は闇の海上を一路朝鮮海峡へ――。

十月三日 木曜 曇  
雨。激しい雨だ。○時より午前一時まで船首に

く上る水煙り。自分の分隊の番が来て砲手定につく。砲撃開始。：痛快極りなし。弾着成績優秀との事。断然気をよくす。午後二時射撃終了。四時すぎ夕陽の港に帰港。強き自信と来る可き日を夢見つゝ兵舎に帰る。

十月八日 火曜 晴  
今日は検閲。午前九時より前の広場にて部隊長の検閲を受ける。軍装検査、各個教練「優良」との講評を得て無事検閲を終へ、こゝに於ける一斉の訓練を終へる。午後は外出。待ちに待つた外出が遂に許されたのだ。皆の喜びたるや、ほつとした気持で早く中「昼」食を済し、昼すぎ集合して班長の引率で外へ出る。市電で栄町へ。広島。小ぢんまりした案外感のいい街だ。賑かな筋を一巡して、引率で映画館に入れられたのには全く悲観した。だが皆の希望で外へ出、一時間半の自由行動が許さる。待ちに待つた自由行動。皆の喜び。早速友井、前田、中の、井本のグループで、まずしる粉屋に飛込み何度か夢にみたしる粉を喰う。しる粉屋から喫茶店へ。入隊以来始めて紅茶を飲み、思ひがけなくショパン（協奏曲第二番）を聴く。音楽音楽。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。涙が出た。心ゆくまで聴きたかつたが時間なく茶房を出、デパート福屋へ行く。デパート。そして食堂で喰つた喰つた。地階で車中の兵糧を仕入れ、時間があつたので今一軒茶房に入りシユクリームを喰べて、五時集合。六時、兵舎に帰る。最後の一夜、点呼を済して末田班長を囲んで消

得た戦友と別れねばならぬと思ふと限りなき淋しさを感ず。十時半より一時半まで馬や当番につく。

九月九日 月曜 晴

午前四時起床。五時出発。いよ／＼最後の行軍にうつる。待望久しき大阪の市中を通ると決った時の喜び。長い行軍の疲れも吹き飛んで歩む。淀川堤を長柄橋に出、橋を渡って天六を通過。天満天神で三十分の休憩が許され、飛びつく様にして電話をかけ、マンヂュを喰ひ後、天神橋より朝の中の島ビル街を懐しく視めて、松屋町筋を堂々市中行進にうつり、天王寺で休憩後、阿辺〔倍〕野橋のラツシユアワーの中を北畠へ出て大休止となる。其間店へ電話をしたらとても驚いてた。馬手入中、偶然にも小島の奥さんに会ふ。時間があれば訪ねたかったが時間なく出発す。十一時、楽しみにしてた大阪も後に、大和川を渡ると急に気がゆるるんてか、非常に疲労を感じて来た。堺より後の長かった事。日が無茶に照りつけるし全くエラかった。三時、やつと信太山へ着いて、営門を入った時の気持：。

九月十日 火曜 晴

強行軍と長い演習の疲れでぐっすり寝た。今朝は特に六時半起床だが寝い。体は綿の様だ。あれだけの長い演習と強行軍の慰労が一時間だから一軍隊らしい。点呼時、僕と前田の居残りを命ぜられ身体検査をされた。自分も宇品へ行く

のだ。……明日出発の命令が出た。全く突然だ。明後日の外出を楽しみにしてたのに。四時前、母が面会に来てくれた。一月ぶりだ。嬉しかった。

九月十一日 水曜 晴

十一日の朝は来た。いよ／＼今夜出発だ。午後から準備に忙殺される。衣服の返納支給等での廻る様な忙しさだ。三時、全員本部前に集合し連隊長殿に申告す。訓示あり。面会の知らせで行けば、母姉と丸井が急の知らせで来てくれたのだ。夢に見たアイスクリームを喰った。うまかった事。また／＼中に面会時間は過ぎ、夕食の暇もなく武装をす。手伝ってくれる戦友の有難さ。はたして再び会ふ日があるか？班長に申告して、八時集合。八時半、懐かしの営門を後に阪和信太山に向ふ。九時すぎ乗車、九時半天王寺着。省線にて大阪駅へ。十時前ホームへ着けば、急を聞いて馳〔駆〕けつけた見送りで一ぱいだ。一度外へ出、北口で休憩。三十分の面会が許可される。母姉そして勉さんの一家に、丸井、小島、狩のも来てくれた。嬉しかった。丸井に依頼して、カーネーションに知らせて貰ふ様にしたが、電話番号が分らないとの事で一寸淋しかった。十時半集合、隊伍を整へホームを上り乗車す。午後十時五十七分、万歳の嵐に送られついに懐かしの大阪を発車す。芦屋の灯を視め、神戸の灯を無量の感の中に視めつゝ一路列車は広島に向ふ。はたして戦地へ行くのだろうか？？何の為、何の目的で宇品へ

行くのだろうか。

九月十二日 木曜 雨後曇

スキーと演奏旅行で通った山陽線を今度は何とも云へぬ気持で西下す。よく喰った。そして話した。一寸うつゝとしたらしい。岡山で福井と湊に便りを出す。後、非常な雨に出会った。西の方は相当荒れるとの事。軍港呉の街を通過して午前七時三十五分広島へ着き、乗換へて八時、宇品へ無事到着す。……何処へ行くのだろうか。宇品、憲チャンも勉サンもいや何万何十万何百万の勇士が歓呼の声に送られてこの港から船出したのだと思ふと感激した。丁度凱旋があつて、波止場と云ふ波止場は帰還勇士で一ぱいだ。其中に我等の一隊は一寸肩身がせばかった。一度輸送司令部へ行き司令官閣下に申告〔代理〕訓示を受け、藤本部隊〔船舶砲兵隊〕へ入る。小さな兵舎で丁度饗庭の廠舎のスマートな兵舎だ。営庭で部隊長殿に申告、訓示を受け、編成されて舎内へ入る。友井前田と同じ班だ。装具を下し整頓し、昼食後昼寝を許さる。昼寝など思ひもよらなかつた事だ。疲れでよく寝た。四時頃誰か「馬手入呼集」なんて叫んで皆をどつと笑はす。誰もがいやだつたのだ。馬なんて見たくてもない。退屈だ。隣の兵舎よりラヂオの音楽が聴へる。――今度は海だ。限りなき幸福を感じつゝ床に入る。

九月十三日 金曜 晴

こゝへ来て第一夜は明けた。午前六時起床。原

隊より三十分朝寝坊出来て馬手入もない。八時より各個教練。三十分の休みがあつて十一時終了。昼食。一時より再び各個教練。三十分の休みあつて四時終了。夕食。八時点呼、就寝す。

馬馬馬、古兵上等兵に追ひまくられた今までの生活と異り、暇が有り過ぎて退屈な程だ。馬と云つては皆で笑ふ。

九月十四日 土曜 晴

今日よりいよ／＼艦さい砲の訓練を開始す。午前八時呼集後兵舎を出、すぐ前の港より舟に乗り込み金輪島砲廠へ行く。画の様な島々、夢の港を視めつゝ御用船の間をぬつて。全く幸福だと思つた。金輪島棧橋へ上陸。艦さい砲の名しよ／＼とそうさをなす。美しい風景だ。この砲で来る可き日海上警備をなすを思ふと痛快極りない。はるか彼方島の影より戦闘艦二せきと航空母艦の航行を見る。十一時、午前中の演習終了。乗船して兵舎へ一まず帰り、昼食。一時、再び呼集後乗船。金輪島へ行き午前中に続いて演習し、四時すぎ演習終了。乗船。再び美しい夕陽の港を兵舎に帰り、後、酒保に行く。何よりの楽しみの酒保が余りにも何もないには悲観す。点呼後突然勅諭を云はされ弱る。

九月十五日 日曜 晴

今日は日曜。こゝでは休みもない。今日も朝から、船で金輪島へ行く。昨日に引続いて分射をやる。難かしいが痛快だ。午前中の演習を終り、午後二時まで弾丸をみがき、後は休みとなる。

九月十六日 月曜 晴

今日も同じく金輪島で午前午後演習をす。船上看視は愉快だ。我々この船舶砲兵隊に来て、艦サイ砲を訓練し、先の事を色々考へる。一体どうなるのだろうか。一度大阪へ帰つて召集解除にでもなり、再びこの隊へ召集されるのではないだろうか。今夜は中秋の名月だ。美しい月。こんな所で月見をしようとは。母もそして親しき友も今頃何処かあの月を視て居る事だろう。月を視めつゝ一寸ホームシツクを起して仕舞つた。秋だ――。

九月十七日 火曜 晴

六時、起床ラツパに驚いて飛び起きる。よく寝る。今日も平常通り金輪島へ行く。午前は分射。午後は船上看視。午後ハシカが故障で途中で上り歩いて行く。めっきり涼しくなつた。今夜も素的な月だ。

九月十八日 水曜 曇

砲がうんと増へた。朝、懐かしい母から便りがあり、夜、丸井と小島の奥さんから便りが来、嬉しかった。丸井は朝鮮へ行く途だとか。母に手紙書く。

九月十九日 木曜 晴

別に特筆す可き事なし。今日も金輪島へ行く。午後の演習を終へて帰航の途、機関の故障で流される。夜、酒保で久しぶりに喰ったマンヂュのうまかつた事。

九月二十日 金曜 晴

朝めつきり涼しくなつた。薄ら寒さを感じず。はいた息が白く見へた。秋だ。だが日中は少し暑さを感じた。久しぶりに汗ばむ。秋の空はあくまで青く澄み、遠く島影に帆船が浮んで居る。画の様な美しさだ。

九月二十一日 土曜 晴

今日も金輪島へ行く。金輪島へ来るのも今日が最後だとの事。分射で各砲手が決定され、自分は四番砲手となる。願つてた四番砲手。四番砲手には断然自信がある。ほめらる。四時すぎ、よく来た金輪島を後に兵舎に帰る。

九月二十二日 日曜 晴

カーネーションの夢を見た。さすが懐かしかつた。今日は日曜だが午前中各個教練。大阪の連中は皆外出して居るだろうに。今日の日曜に明日の祭日。天気はよし気候はよし、郊外はハイカーの群に、心齋橋は賑はつて居る事だろう。明日は外出があるとか云つたのに、金輪島へ演習に行くとの事。悲観す。

九月二十三日 月曜 晴

秋季皇霊祭。皇軍遂に「仏印」攻撃開始せりと。遂にやった。待望久しきものを。……痛快極りなし。征きたい。仏印の戦線へ――。日曜日に続いて今日の祭日。今日こそは広島見物でも出来ると思つたのに、もう行かないと思つた金輪島へ行き、一日中分射をやる。大阪は

昼から全員、森林中の神社境内にて銃剣術の練習がある。今日も暑い日だった。なほ昼前姉のお父さんが面会に来てくれ嬉しかった。

八月二十二日 木曜 曇後雨

珍しく今朝は六時起床だ。今日明日は食事当番。午前中砲の操さをなし、午後、明日の実弾射撃陣地構築の為、七廻りより山へ行く。昼から俄かに曇り出した天気は夕方ついに雷鳴をとまなつて夕立となり、雨にぞくぬれになつて六時すぎ廠舎へたどりつく。

八月二十三日 金曜 晴

昨夜の雨は上つた。午前四時半起床。午前中、裏の森の中の神社境内で銃操さの教練をす。素直な森の朝だ。「真夏の夜の夢」を思ひ出す。寝むかったが一寸睡みを許された嬉しさ。午後注射をす。何だかとてもきついと事。今夜酒保行を禁じられる。二十三日。先月の今日、召集令状が来たのだ。あの時を思ひ出し感慨無量。

八月二十四日 土曜 曇

午前中兵器検査があり、午後こゝへ来て最初の慰労休暇があり、自分等も入隊して始めて待ちに待ったいんそつ外出が許される。全員の喜び。二装用に着換へて、今津の町へ。見る物すべてが珍しく嬉しく感じた。そして約一時間余りの自由行動が許された。嬉しかった。早速町の菓子屋を襲撃して「もなか」「まんぢゆ」を喰つ

た喰つた。愉快だった。然しこれがこんな田舎町でなく大阪ならば、と思つた。天気なら琵琶湖で水泳しようかと思つたが天気が悪く、二三日来腹の具合が思はしくないので止し、三時一同集合し廠舎へ帰る。

福井ト湊、店ノ若場、田辺ニ手紙ヲ、母ト城ニ葉書、博哉ト毅ニ通葉書ヲ送ル。

八月二十五日 日曜 雨

二十五日。こゝへ来て早や十日になる。今日は朝から雨。午前午後通じて砲廠内に於て分射の操さをなす。二番砲手は難しいが面白いと思ふ。別に特筆す可き事なく、夜兄に便りを書く。いぜんとして腹具合の悪いのに弱る。

八月二十六日 月曜 雨

午前三時半起床。先発隊は午前一時半に雨をういて山へ行つた。自分等残留隊は七時すぎより森の神社で各個教練をなし九時すぎより休みが出る。嬉しかった事。でも、いよく劇「激」しくなつた雨をついて山へ行つた隊が泥まみれになつて帰り、午後其手入に多忙な時間を過す。夕方雨は上つたが、寒い。先月の今夜を思い出しつゝ

八月二十七日 火曜 曇

午前四時半起床。午前中森の神社で各個教練をなし、午後山へ目標せつ置に行く。雨は上つたが道の悪い事。二三日降り続いた雨に薄ら寒さを感じる。高原の秋は早い。秋風にドビッシイ

の「抃（曠）野を渡る風」を思ひ出す。案内暇どつて日が暮れて廠舎に帰る。涼しい。星が無数に輝いて居り、先月の今夜を思ひ出す。湊はどうして居るだろうか。

八月二十八日 水曜 晴

見習士官は全部戦地へ征つた。朝食後、木銃を以「持」て何処へ行くかと思つたら、山とは反対に今津の町へ出て美しい琵琶湖畔へ行く。嬉しかった。休憩。午後、今度は山へ目標てつしゆうに行つたが、道を迷つて物凄く歩く。六里程は歩いたろう。今夜不寝番。丸井より便り来る。

八月二十九日 木曜 晴

二十九日。入隊して早や一月は経つた。思へば早いものだ。午前四時半起床。山へ射撃見学に行く。時計を視めつゝ、先月の今頃の感激を思ひ出しつゝ。

八月三十日 金曜 曇後雨

入隊して一月と一日。一部は今朝も夜明けを期して山へ行く。午前中、馬けい場せつ置の説明あり、十時すぎより休み、二時半呼集注射まで久しぶりにつろぐ。夕方より又雨となり、ついに蒙雨となり、泥まみれになつて山より砲車帰る。明日再び外出が許されるとの事。母より便りが来る。

八月三十一日 土曜 曇後雨

今日は休みだと思ふと久しぶりにぐつすり寝れた。午前中嚴重なる衣服検査があり、午後外出が許される。大阪なればと思ひつゝ、途中より激しい雨となり、ぬれぬずみになり弱る。小さな街だ。四時すぎ、雨の中を廠舎に帰る。

九月一日 日曜 曇

早や九月の声を聞く。早いものだ。足掛け三月。午前中琵琶湖畔へ。帰途行軍の為の飯ごう水さんと菓筒みがきに行く。：昼前一度帰つて、午後山へさんごう構築に行く。琵琶湖から吹く秋風は、とても涼しく心持よかつた。

九月二日 月曜 晴

珍しく午前六時起床に、嬉しくぐつすり寝る。午前中雑草をかり、午後山へさんごう構築に行く。昨日に比し太陽はカンカン照りつけ、汗と泥にまみれ六時前に廠舎に帰る。

九月三日 火曜 曇

午前四時起床。一部は山へ出発し、朝手入のエラかつた事。午前中廠内の清掃をし、午後久しぶりに時間があつたので、湊、福井、加納先生、店等に便りを書く。

九月四日 水曜 曇

午前五時起床。今演習最後の今日、連隊集中射撃がある。一部は早く出発。我々見学隊は六時廠舎出発、山へ行く。午前八時、師団長李王殿下の御台臨あり、射撃開始。一撃射撃のすさま

じさに驚く。痛快の極みなり。午前中演習終了。よく来た草原に別れを告げて廠舎に帰る。今夜、最後の酒保。心ゆくまで「ぜんざい」「最中」を喰べたかつたが、Tに貸したG、未だTの家より送金なく、全くの文無し。帰路行軍もあり、全く泣くにも泣けない気持だ。全く弱つて仕舞ふ。

九月五日 木曜 晴

饗庭野廠舎生活に於ける最後の日。長いと思つたここでの生活も早や過ぎ去り、激しくも又愉快だつたこゝに淡い名残を惜しみつゝ、朝から帰営準備に忙殺さる。

九月六日 金曜 曇後晴

激しい雷雨の後、午前〇時半起床。二時半、思ひ出の廠舎を後に帰路強行軍の途につく。未だ真黒な湖畔を遠く雷鳴を聴きつゝ。美しい夜明け。始めて出た大休止に、民家へ飛込み接待を受けた茶の美味かつた事。後、小雨となり、雨の中を行けど行けど湖を視めつゝ行軍す。白ひげ神社の前をへて近江舞子青柳を經、堅田へ出、コースを山中にとつて湖と別れる。其頃より晴れて秋とは思はれぬ炎熱。：還來神社に参拝して、六時前、京都大原露营地へ着く。行軍距離正に十三里。

九月七日 土曜 晴

強行軍第二日。午前四時起床、五時、八瀬大原露营地を出発。比叡山ろくを一路京都市へ向ふ。

深い森林をぬつて。何日だったか、店からハイキングに来たコースを。：京都の市街へ向ひ、今夜は民家宿泊と云ふので足も軽い。大原より下鴨へ出、市街に入つて加茂川の畔を二条へ出て、河原町筋を東本願寺へ行く。よく通つた道。スケート場、京宝等、思ひ出はつきぬ。本願寺で休んでいよく向日町へ。其間相当疲労す。案内早く三時すぎ向日町に入り、小学校へ入る。馬と砲車の手入をし、六時前、各宿舎が割当てられる。自分と前田、嬉しかった。解散して宿舎へ案内される。意外に立派な家で、もう用意をして迎へていて下さつた。早速入浴し湯衣にくつろぐ。一月ぶりに着る着物、畳の香、何もかも嬉しく懐かしかつた。早速すき焼で夕食に入る。酒も相当飲んだ。途中八時よりの点呼で席を外し、後再びぜんにつく。うまかつた。食べた食べた。十一時ごろ床につく。やわいふとんが限りなく懐かしく嬉しかった。

九月八日 日曜 晴

四時集合に、三時頃やわいふとんに名残りを惜しみつゝ起床。朝食を頂いて家を出る。馬手入をして五時出発す。昨夜の宿泊に行軍の疲れも長い演習の疲れも消し飛んで皆の元気な事。向日町より桜井宿せきを經、山崎高槻茨木吹田を通過して淡路へ出、国分町へ到着。馬けい場を造つて小学校に宿泊す。大阪の灯を目前に視めつゝ、せめてもう少し市内ならばと残念だつた。突然命令が出て、一部砲射班が緊張して電車で帰る。宇品へ発つとか。友井も行った。始めて

サラサーテのヴァイオリンを聞き、遠く朝日ピルの航空標示の光を見た時……。  
朝、長井齊先生、丸井ノ姉、浅井サン、夜、懐しい加納先生が皇大神宮ノオ守リト、姉ヨリ手紙来ル。

八月六日 火曜 晴

平日と同じく別に特筆す可き事なし。夕食後酒保へ行く。昼間の激しい演習の後に与へられた、我等の一時……。阪和電車の灯をながめ、遠く大阪の空を視め乍ら：懐しい我家我友を想ふ。

八月七日 水曜 晴後雨

今日も昨日と同じ砲身に弾丸が炎熱に焼けきつて居る。教官の心使ひで一時演習開始を二時に繰下げ其間休憩で耐なく嬉しく手紙を書く。夕食が終つて酒保へ行くのをどんなにか楽しみにしてたのに今日は休みで悲観した。夕方より俄に曇り出した空はついに激しい雨となる。大阪も雨だろうか。

八月八日 木曜 曇後晴

朝の手入を済して帰り、楽しい朝食の時、嬉しい便りが届けられた。ふと手にした自分の便りの差出人は福井としてあるではないか。福井。夢にも忘れなかつた福井よりの便りだ。只簡単に自分の応召を城から聞いた。驚いてる。体を悪くして大阪へ帰つた。一度会ひたいと書いてあつた。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。夢かと思つた。今日は、先日の経理検

始す。全員汗にまみれつゝ。：大変だ。：阪和電車が走つて居る。大阪行のこの電車に乗れば大阪へ行くのだ。みんなの居る懐かしい大阪へ。：九時すぎ、積込みを完了し軍歌をうたいつゝ帰営す。

八月十五日 木曜 晴

午前三時、起床ラッパが鳴り起床。午前四時半、隊伍を整へ曉の兵営にしばしの別を告げて営門を出、一路阪和「信太山駅」へ。五時すぎ、入隊して始めて久しぶりに電車に乗り、大阪へ。——大阪の街。何処「度」か夢に見た天王寺駅。大鉄。懐しい大阪は未だ寝つて居る。六時、天王寺駅より軍用列車に乗り込み、城東貨物線を走る。弥刀のつい際を走つた時：、我々戦地へでも行くとも思つたのだらう、沿線の人々が万歳万歳で送つてくれる。何だか嬉しくもあり、又くすぐつたく感じつゝ答へる。懐かしの大坂城をはるかながめ東海道線に入る。省線はラッシュアワーだ。背広の人々、メツチェン：。京都の街を過ぎ大津より江若鉄道に入る。美しい朝だ。静かな港を水泳やキャンプに行く人々を満さいして遊覧船は出て行く。軍用列車は湖畔に沿つて一路今津へ。いつ来ても美しい琵琶湖が限りなく美しく感じた。遊覧船は行く。白道雲湧いて白い帆のヨットが風は一ぱいはらんで走つて居る。白砂のキャンプの群。若人の楽しいつどい。美しいメツチェンが赤いハンケチをふつて送つてくれた。みんな青春を讃へ、そして夢見て居るのだらう。一寸羨しく感じた。は

查の慰勞の意味で休暇。思ひがけない休みに一同大喜び。朝から、加納先生始め丸井、店等、手紙を書く。昼が来て酒保へ行つて居ると面会の知らせが来た。面会。喜んで行くと、やはり懐い母が昌三と共に来てくれた。四時頃湊が来るとの事で耐なく嬉しかった。一度帰つて二装用に着換へ写真を撮つて四時前再び面会所へ行くくと、来てた来てた。待つてくれた。湊とお母さんが。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。湊も会へた事を心から喜んで居た。十一日に高松へ帰るとの事。もう会へるのも最後だろう。五時すぎ名残り惜しうに別れた。湊の幸福と健康を神に祈る。今日は嬉しかった。思ひもかけなかつた福井から便りが来、又湊が最後に訪ねて来てくれたのだから夢の様な一日だった。

八月九日 金曜 曇後雨

昨日の喜びは未だ覚めない。午前四時非常呼集ラッパが鳴つてはね起き営庭に集合す。薄ら寒く曉の空に金星が物凄く輝いてた。今日も平日と同じだったのが午後雨となり中隊長殿の精神訓話があつた。

八月十日 土曜 曇後雨

別に特筆す可き事なし。午前中砲の訓練に午後各個教練があつたが、雨となり講堂にて衛生講話あり。

八月十一日 日曜 雨後曇

たして自分も何日の日再びこの湖畔に楽しく過せる日が来るだろうか。——只知るのは神のみだろう。でもふと向ひの戦友の戦闘帽を見、長く続く軍用列車を見た時、別の限りない幸福感を感じた。一小时前、今津着。汗みどろに馬、砲車を下り廠舎に入る。静かな美しい森の中にある廠舎で、山小屋の様な感じがする。夜、月に琵琶湖が銀色に輝いてとても美しい。素的な夜だ。

八月十六日 金曜 晴

ここ饗庭野へ来て第一夜は明けた。素的な夜明けた。琵琶湖が朝の陽に美しく輝いて居る。：平常と同じく朝の馬手入をして後、溝を掘つたり草を切つたりして一日中準備に忙殺される。入道雲が湧いて太陽がズリ／＼照りつける。暑い。今夜も美しい夜だった。月に琵琶湖が：。

八月十七日 土曜 晴

午前中砲車の訓練をし午後もしたが、昼の休みが相当あつたので久しぶりにくつろぎ、酒保に葉書があつたので母に便りを書く。今夜は酒保行を禁ぜられて居るので淋しい。一寸風「風邪」を引いたらしい。

八月十八日 日曜 晴

午前四時半起床。五時すぎ、実弾射撃演習の為一部が演習場へ出発したが、編成にもれて甚だ残念だった。残留部隊は各個教練に銃剣術基本をす。暑い。カンカン照りだ。今日は日曜であり、店の休み。浜寺はさぞ賑はつてる事だろう。

待ち遠しかった日曜。朝から雨だが古兵共は楽しうに外出して行く。一寸羨しい。朝雨の中に再び注射を受け、午前中馬具の手入に過ぎ、昼食後懐かしい福井に手紙を書いて居ると、母が面会に来てくれる。今日は大変な面会者だ。もう一月も会へないと思ふと、とても名残り惜しかった。六時近く母は帰る。今日湊がいよく高松へ帰るとの事だ。

八月十二日 月曜 曇

いよく明後日に迫つた演習の為、八時より全員武装検査があり、今始めて我砲兵部隊の威力を見、感激して仕舞つた。午後は教官より鉄道輸送の学科があつた。

八月十三日 火曜 曇

別に特筆す可き事なく一日中方々の使役や何やかや混「梱」包其他饗庭の行の準備に多忙な一日を過し、夜久しくお別れに酒保へ行く。

八月十四日 水曜 曇

十四日朝早く先発部隊の出発をトップに全部隊饗庭野へ——。昨夜の命令で自分等は朝食後、予備いん車に中隊の混「梱」包をせきさいして貨車積込みに行く。初めて出る営外。：：何かも見るものすべてが懐かしく又うれしかった。府中の街へ出る。：阪和電車。荷物を下して帰途、よびいん車に乗車を許され、走つた気持ちは素敵だった。午前中二度運び、午後準備して夕方より、いよく馬と砲車の積込みを開

母より便りが来る。辻本の父親が訪ねて来て、大阪市長直筆の国旗を下すつたとの事。光栄の至りだ。大いにやろうと思ふ。

八月十九日 月曜 晴

昨夜の通達に依り、午前七時半より我等砲手班の一部は射撃目標せつちに出発す。廠舎を出て深い森林を上りつめると饗庭野演習地だ。見渡す渡「限」りの大草原。昨日馬で受けた傷がいやに傷むが、何くそと思ひつゝ足を引ずりつゝ歩く。片道約三里。小さな山の中腹に目標を作る。土を掘り木を切つて。カンカン照りの太陽は焼ける様だ。水が飲みたい。でも一滴の沢水すらない。この高原の眼下に琵琶湖が満々と水をたゝへて居るのは余りにも疲肉だ。この何十倍かの苦しさで戦ひつゝある戦線の勇士を偲びつゝ三時すぎ、汗とほこりで真黒になつて廠舎に帰る。夕入浴す。

八月二十日 火曜 晴

午前三時半起床し、実弾射撃の見学に行く。琵琶湖の対岸、伊吹の頂より、太陽が昇ると今日も又カンカン照りだ。汗にまみれて砲列を引いた。点へやと到着。目前に、我十糧榴散弾砲の威力を見る。耳をつんざく音。はるか彼方に、中天高くふき飛ぶ土煙。連隊長の視察があり、夕方近く、廠舎へ帰る。

八月二十一日 水曜 晴

今日は、午前中各分業に別れ、分隊教練をなし、

山北繁松軍隊日記

日記について

日記は三冊あり、記載される期間は左記のとおり。

①昭和十五年七月二十九日～十一月九日

②昭和十五年十一月十日～十二月三十一日

③昭和十六年一月一日～七月二十六日

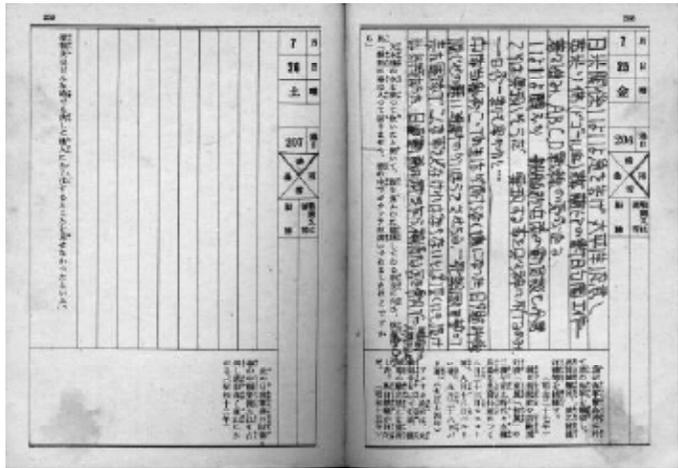
入隊を機に書き始め、約一年間にわたり書き継がれた。

①と②は、市販のポケットサイズの日記帳で表紙に「SHOKO DIARY」とある。寸法は、いずれも縦二九ミリメートル×横七八ミリメートル。①は、四十八紙九十六頁のうち八十六頁を使用し、縦書きで九月三日まで濃紺の万年筆、四日以降は鉛筆で記される。②は、六十紙百二十頁のうち四十八頁を使用し、横書きで濃紺インクの万年筆で記される。裏表紙見返しの署名は①は「山北繁松」だが②には「山北隆一」とある。ペンネームであろうか。

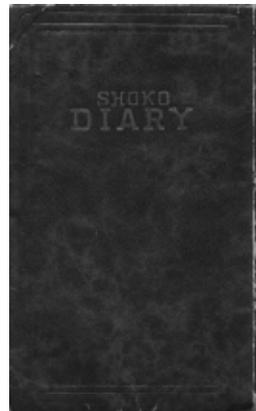
③は、陸軍少将櫻井忠温が編纂し、春秋社から発行された『軍隊日記』昭和十六年版を使用している。寸法は、縦一五〇ミリメートル×横一〇九ミリメートル。濃紺と黒のインクの万年筆を併用し横書きで記される。一日一頁の記入欄のほか軍人便覧などを付し全四百七十八頁である。



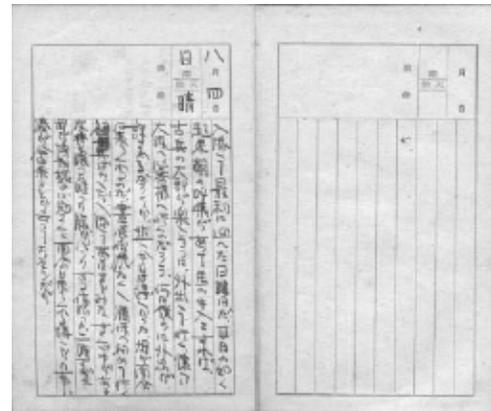
日記③ 表紙



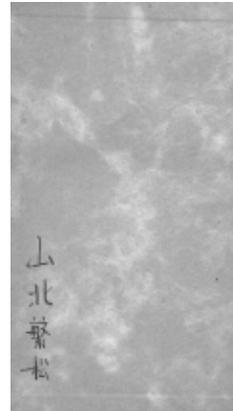
日記③ 七月二十六日条



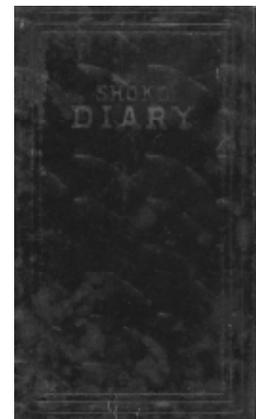
日記① 表紙



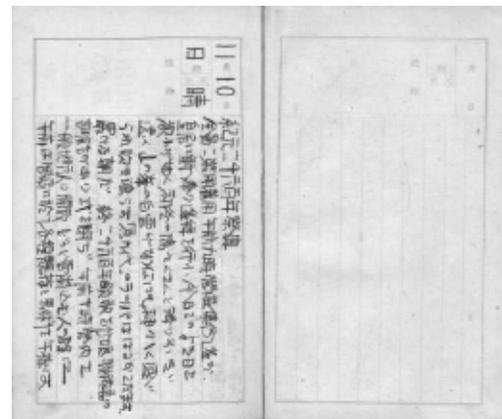
日記① 八月四日条



日記① 見返し署名



日記② 表紙



日記② 十一月十日条



日記② 見返し署名

凡例

- ・ 仮名遣いは旧仮名遣いのままとしたが、旧字体は新字体に改めた。
- ・ 適宜、句読点を補った。
- ・ 誤字、当て字は、意味の通るものは原文のままとしたが、一部「」で補った。編者による注記も同様に「」で括った。
- ・ 判読できない箇所は、■とした。
- ・ 日付欄は、日記①、②は手書き、③は印刷だが、翻刻にあたり様式を統一した。
- ・ 一部日付が重複する箇所がある。これは日付欄とは別に本文にも日付が記入されているため。日付の一部、特に横書き部分でアラビア数字が使用されることが多いが、すべて漢数字に統一した。
- ・ 日記③の気候欄は上の写真のように枠を囲みあらわすタイプだが、すべて文字化した。
- ・ 資料の性格上、現在では配慮が必要な表現も見られるが、この時代をありのままに伝える歴史資料としてご理解いただきたい。

本報告書は、木内小季が担当した。

【日記①】

七月二十九日 月曜 晴

〔七月三十日～八月三日 無記入〕

八月四日 日曜 晴

入隊して最初に迎へた日曜日だ。平日の如く起床。朝の呼集があつて馬の手入をすれば、古兵の大部が楽しそうに、外出して行く。懐しい大阪へ、心齋橋へ行くのだろう。何日僕らに外出が許されるだろうか。然し今日は嬉しかった。母が面会に来てくれるのだ。昼食後洗たくし酒保へ初めて行く。初年兵ばかりだ。入隊して夢にまでみた、まんじゅうがある。友井と喰つた喰つた。腹がパンクする位喰つた。二時すぎ、母が博哉、稔子に、勉強さんと面会に来てくれる。嬉しかった事。湊が今日来るとか云つてたそうだが。

八月五日 月曜 晴

今日も雲一片すらない炎熱だ。平日の如く朝の日課を済して八時より各班に別れて初めて演習にうつる。自分は砲手班として教官の訓示を受ける。演習開始前後、我々が生死を共にする砲に最敬礼をし、淡白なる精神を以て日本一の砲手に満足せず世界一の砲手になる様との言葉に感激して仕舞つた。午前午後共に砲のそうさの訓練。名しようとするさの難しさに勉強しなくてはと思う。夕食後酒保へ行くと、第二放送で

せの悪い准尉のかいほうをさせらる。一死報国を誓って来た軍隊で、こんな事をせなければならぬとは、泣くにも泣けぬ気持ちだった。日直勤務に就き乍ら、神清〔聖〕たる可き舎内で。准尉の人格たるや全く〇だ。

最後の記述は昭和十六年（一九四一）七月二十六日であるが、天候の「晴」に印をつけたのみ。よって右が残された最後の日記とも言える。ABC D戦線とは、東アジアにおいて日本と利害を争ったアメリカ・イギリス、オランダと対戦国である中国の頭文字で、日本に対する経済制裁を指す。こうした情勢からいよいよ出征の日が近いことを予感する一方、夕方の点呼後に酒癖の悪い上官の准尉（日直に就きながら飲酒していた）の介抱をさせられ、やるせなさを味わっている。

これ以降日記本文の記述がないのは、出征に向け多忙となったためか、理由は定かではない。繁松がいつどの戦線へ出征したのか、その足跡をたどることはできない。

繁松は昭和十六年（一九四一）十二月十六日、中国の海南島沖にて戦死した。太平洋戦争の開戦より僅か八日後のことであった。

昭和十八年（一九四三）十月十六日付の朝日新聞一面は、靖国神社秋の臨時大祭中に発表された支那事变死没者第七十一回（陸軍第五十一回）・大東亜戦争死没者第十八回（陸軍第十一回）論功行賞について、千九百四十六人に対し金鵄勲章が与えられたと報じる。そして三面では、「郷土勇士に輝く恩賞」という見出しで、大阪の戦没者に対する恩賞を顔写真とともに紹介する。他の百二十五名と並んで西成区の欄には繁松の名もあり、大東亜戦争の論功で「功七旭八」を与えられたこと、一階級進級して上等兵になったことが分かる。

その後、昭和二十年（一九四五）十一月十九日に靖国神社に招魂され、昭和三十二年（一九五七）十月十七日に合祀されている。通知は、記念神杯と合祀御璽とともに母・齊藤ふみに届けられた。

#### 《参考文献》

##### ◇軍事関係

- 近現代史編纂会編『陸軍師団総覧』新人物往来社 二〇〇〇年  
百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』吉川弘文館 二〇〇四年  
加藤陽子『徴兵制と近代日本 一八六八―一九四五』吉川弘文館 一九九六年  
藤原彰『日本軍史上巻 戦前篇』日本評論社 一九八七年  
吉田敏浩『赤紙と徴兵―一〇五歳、最後の兵事係の証言から』彩流社 二〇一一年  
吉岡平助『訂正改訂 壮丁教育 入営準備教科書 全』宝文館 一九〇八年  
一ノ瀬俊也編『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集―昭和編―第一巻（徴兵検査と兵営生活のために①）』柏書房 二〇一〇年  
一ノ瀬俊也「佐倉連隊の日常生活 昭和九年のある上等兵日記から」『国立歴史民俗博物館研究報告 第一三二集』国立歴史民俗博物館 二〇〇六年  
一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』講談社 二〇〇九年  
藤田昌雄『写真で見る 日本陸軍 兵営の生活』光人社 二〇一一年  
大津喜一『軍隊末期の初年兵と戦争』一九六八年  
渡邊勉「誰が兵士になったのか―兵役におけるコーホート間の不平等―」『社会学部紀要第一一九号』関西学院大学社会学部・社会学研究科 二〇一四年  
杉本竜「日本陸軍の馬匹問題―軍馬資源保護法の成立に関して―」『立命館大学人文科学研究紀要八二号』立命館大学人文科学研究科 二〇〇三年  
◇地域・学校関係  
久世仁士・高岡裕之・竹内三郎・玉谷哲・中村正明・南川孝司編『目で見る泉州の一〇〇年』郷土出版社 一九九四年  
和泉市史編さん委員会編『和泉市の歴史四 地域叙述編 信太山地域の歴史と生活』和泉市 二〇一五年  
野砲兵第四連隊史編纂委員会『野砲兵第四連隊史並びに関連諸部隊史』信太山砲四会 一九八二年

#### おわりに

戦後七十年にあたる平成二十七年（二〇一五）は記憶の風化に警鐘が鳴らされ続けた一年であった。もとより博物館もこうした動向と無縁ではない。同年は全国各地の博物館施設で、先の戦争に関する展覧会が開催された年であり、その試みは当館においても、来館者数に表れる数字を見る限り、一定受け止められたのではないかと見られる。少なくとも市民の関心をひく内容であったと言えると思う。

戦争資料にリアリティを持つことが難しくなった現代。特に展示室という空間において、学芸員の意図によって並べられた資料からリアリティを感じ取ることは二重の意味で困難である。金子淳氏は、展示という行為は資料の再文脈化だと指摘する（「戦争資料のリアリティモノを媒介とした戦争体験の継承をめぐる」。学芸員自身が、展示が見る者をミスリードする危険性について自戒を持つべきであるのは当然として、展示の可能性についてつい考えてしまう）。

今般、先の展覧会を振り返り非常に勇気づけられたのは、船越幹央氏が「【展示批評】戦後五〇年・戦争展を見て」の中で述べられた言葉である。戦争資料には、見る者の心を打つ資料が多い。このような資料は、過去の個人の気持ちや現在の私達に伝える媒体だと言える。その媒体がうまく働くようにしてやることも展示者の役割ではないかと思う。

例えば、出征記念の家族写真を展示したとする。見る者は、そこから様々な情報を読み取る。周囲の風景、人物の表情や服装などから状況や気持ちを想像する。その想像が正しいかどうかはひとまずおき、資料に向き合い寄り添おうとする態度、そうしたものを引き出せるよう努めることが大切なのではないかと思うのである。

当館の戦争遺品展で『山北さんの軍隊日記』を紹介するコーナーでは、日記本文を一行でも多く紹介したいとの思いから、たくさんの文字パネルを展示した。結果、「見せる展示」とはほど遠いものとなったかもしれないが、観覧者に興味や関心を持っていただき、少しでも印象に残る展示となっていたら幸いである。

栗原俊雄『勲章 知られざる素顔』岩波書店 二〇一一年

大阪中央電話局『大阪市及近郊電話番号簿 昭和十二年四月一日現在』大阪中央電話局 一九三七年

井村雅宥編『逋信省公認 京阪神職業別電話名簿』報告出版社 一九四一年

大阪之商品編輯部『大阪案内』一九三六年

大阪市総合計画局調査部行政調査課編『大阪市政八十年の歩み』大阪市総合計画局調査部行政調査課 一九六九年

近畿日本鉄道株式会社『近畿日本鉄道 八〇年のあゆみ』一九九〇年  
今津町史編纂委員会編『今津町史 第三巻 近代・現代』今津町 二〇〇一年

広島市役所編『新修広島市史 第二巻 政治史編』広島市役所 一九五八年  
福井崇時「私の小学生時代」学術文化同友会・アルスの会 アルス文庫 二〇一〇年 (<http://tipswatanaby.files.wordpress.com/2013/03/fukuji-23.pdf>)

創立九〇周年記念誌編集委員会編『創立九〇周年記念誌』学校法人大阪貿易学院開明中学校・高等学校 二〇〇四年

大阪音楽大学八〇年史編集室編『大阪音楽大学八〇年史―楽のまなびや―』大阪音楽大学 一九九六年

大阪音楽大学音楽文化研究所編『大阪音楽文化史資料 明治・大正編』大阪音楽大学 一九七〇年

#### ◇その他

金子淳「戦争資料のリアリティモノを媒介とした戦争体験の継承をめぐる」『岩波講座 アジア・太平洋戦争六 日常生活の中の総力戦』岩波書店 二〇〇六年

船越幹央「【展示批評】戦後五〇年・戦争展を見て」『地方史研究 第二五八号』地方史研究協議会 一九九五年

食事(炊事)当番、不寝番、既当番、獣医室当番、班長当番、医務室当番、連隊本部当番、中隊当番、火薬庫当番がある。また、常用被服庫・戦用被服庫・給養庫・兵器庫・医務室・獣医室・面会所・浴室・工場など兵営内の各部署の使役や、舎前・舎内の掃除や砂取り・石取りの使役、舎前の修理や道直しの使役を行ったとの記述もある。班長当番は②従兵の意味合いが強く、舎前・舎内の掃除や砂取り・石取りの使役、舎前の修理や道直しの使役は③臨時使役に当たると思われる。

初年兵が入隊してきた昭和十五年(一九四〇)十二月以降、使役に従事する日が圧倒的に増える。演習には減多に参加することがなくなり、使役続きの毎日となるのである。「エライの只一語に尽きる。食事当番。班長当番。全くアゲて仕舞った」(十二月二日条)、「今日も常用庫。使役使役に命令の一日も早からん事を只神に祈るのみ」(十二月十四日条)。日記には、営内の雑用に使われ疲労困憊し、時には退屈な使役をサボって昼寝に耽る様子も描かれる。入隊後早い段階で、饗庭野や宇品における演習を経験した繁松にとって、船舶砲兵隊の一員として戦場へ赴くことが希望となり、その命令を待ちわびる日々が続く。

昨日既当番中間交代をしたのに、今日は上番既当番、しかも一番だ。三十日の外出を二十九日にこみ上げられ、当然明日は外出の番だのに。全く無茶だ。無茶にも程がある。中間交代と勤務は一日置きなんだから。まるで召集されて既当番をしに来たかの様だ。戦線へ征きたい。そして思ふ存分戦ひたいのだ。おゝ懐かしの船舶砲兵隊。

〈五月三日条〉

単調な軍隊生活の中では、兵営の外の空気に触れることが何よりの楽しみ。日頃、新聞や雑誌を読んだり、手紙の往来や面会で情報を得ることは可能だが、行きたい場所に自由に行くことが許される外出の喜びは格別だったに違いない。

#### 楽しい外出

日記を見る限り、休養日に外出を許可されたのは、二十七回(引率外出を除く)。いずれも、繁松の気持ちの高揚を表すかのように、行動の仔細

とができる。



繁松が訪れた朝日会館—中央の黒い建物 (絵はがき「(大阪)近代建築の美を表はせる朝日ビルディング及其付近」)

を綴り他日よりもひとときわ記述が長い。また、日夕点呼までに帰営する必要のない延刻外出や外泊は、減多に許可されることがなく、それゆえ無上の喜びであった。

繁松は、外出時には母の待つ家と店に行くことが多いが、その他にも時間の許す限り大阪の街を歩き回る姿が浮かび上がってくる。

以下、繁松が立ち寄った場所を列挙してみる。「不二屋」・「心齋橋パーラー」(十月十三日条)、「月ヶ瀬」(休業)・「高島屋」・写真屋・床屋(十月十八日条)、「月ヶ瀬」(休業)・「十月二十三日条」・「大鉄」・カーネーションのアパート(不在)・写真屋(十一月十二日条)、「パーラー」・「朝日ビル」・「ドンバル」(十一月二十三日条)、「大鉄」(十二月八日条)、「心齋橋パーラー」(十二月二十五日条)、「パーラー」・「南海ニュース館」(十二月三十一日条)、「不二屋」(二月五日条)、「パーラー」・「松坂屋」・「朝日ビル」・辻本の宅(一月十二日条)、「パーラー」・勉さんの宅(二月二十六日条)、「シヤトウ」・「カレドニヤ」・「不二家」(二月九日条)、「アルハンブラ」(二月十六日条)、「明治製菓」・映画館(三月三日条)、「アルハンブラ」(三月十日条)、「大鉄」・丸井の新居(不在)・「三月二十三日条」・「フランス屋敷」(四月三日条)、「大鉄」・丸井の新居(四月十三日条)、「映画館」・支那そば屋(四月二十七日条)、「平野屋」・「新ぎんざ」(四月二十九日条)、「新ぎんざ」・「アルハンブラ」(五月二十五日条)、「大鉄」・「松坂屋」(六月五日条)、「兄宅」(六月十五日条)、「バー」・「新ぎんざ」(六月二十六日条)、「朝日会館」・「不二家」(六月二十七日条)。

信太山からは、阪和線で天王寺へ出、地下鉄で心齋橋へ行く経路をとることが多い。昭和八年(一九三三)に梅田ー心齋橋間が開通した地下鉄は、昭和十年(一九三五)には難波、昭和十三年(一九三八)には天王寺まで延び、梅田ー天王寺間を十三分三十秒で結ぶようになっていた(『大阪市政八十年の歩み』。信太山から心齋橋へも一時間程度で行けたようである。喫茶・音楽・映画などの文化に親しみ、「心ブラ」を楽しんでいた繁松。友人より「朗らかな山北君」(三月十六日条)と評されるように、交友関係も広がったと思われる。想いを寄せる女性を、無垢で深い愛という花言葉をもつ「カーネーション」と呼ぶところにも、若者らしい一面を見るこ

馬は開成山競馬場に集められ、各部隊が徴発に来ていた。饗庭野と郡山の合間、七月六日から九日までは一切日記を書いていないが、四日条によると、大阪城公園内にある第四師団司令部の防空演習に参加を命じられたとある。そして、司令部から帰営する際に見た光景を七月十日条に綴る。

中部軍司令部に於ける最後の夜は遂に明けた。準備をして十時すぎ、楽しかったこの生活に名残り惜みつゝ、〇〇でひっかへつてると云ふ噂と馬の待つ信太山へ。城内より森の宮へ出、省線で天王寺へ出て驚いた。山の手線停車場は応召兵と歓送者の群で一ぱいではないか。やはり噂は本当なのか。何とも云へぬ気持ちで特別電車で信太山へ。応召者の見送りはこゝまでしか許されならしい。続々歩んでゆく応召兵の群。連隊へ一歩入って驚いた。この応召兵の群。営内には天幕が方々に張られ、営外との連絡電話が設置されてつゝある。あわたしき将校の歩み。緊張しきった顔。続々入隊して来る応召兵。やはり噂は事実だった。〇〇は下令されたのだ。さすが急だったので、背広や着流しの軍衣の姿がいやに目につき、思はず頭が下る気持がする。誰の顔にもサツと緊張の色が浮んだ。来る可き日は遂に来た。この大〇〇。高射砲員の大召集。防空演習。日〇宣戦布告の日のいよいよ近きを感じず。サアやるぞ。命を捨て、我が大君の御為に。。

〈七月十日条〉

この場合の省線は、現在の大阪環状線。山の手線はJR西日本阪和線で、二線は天王寺駅で連絡する。駅は応召兵とそれを見送る人で溢れかえっており、皆が信太山に向かってる。営内も設営作業や応召兵でこったがえしている。新しく入隊した兵は、急な召集のため、背広や着流し姿の者も多い。対米宣戦布告を示唆する個所は「〇〇」を使って伏せているが、繁松も、「来る可き日は遂に来た」と気合を入れ直すのである。

日米関係いよいよ急を告げ、太平洋波高し。英米ソ仏(ドゴール派)蔣蘭印の対日包圍工作々々進み、ABCDEF戦線の完成迫る。

いよいよ闘ふか。船舶砲兵隊の動員説も今度こそは実現しそうだ。実現する事を只々神に祈るのみ。一日否一刻も早かれと。中隊当番、否こゝでの生活が耐らなく嫌になった。日夕点呼後、酒ぐ

#### 緊迫する情勢

日記は終盤になって急展開する。昭和十六年(一九四一)六月十七日から二十五日まで、再び饗庭野演習場へ。七月十三日から十八日まで、郡山に出張する。目的は軍馬を受領するため。福島県郡山近辺で飼育された

番がつけられた。

だがそれ以外の時間については、休養日らしく、仲間と酒保へ行ったり面会者に会うなどして、寛いだ時間を過ごしているのがわかる。酒保とは兵営内の売店のこと。便箋や手拭など様々な日用品の他、パン・まんじゅう・うどん・カレーや酒などの飲食物を市井より廉価に提供しており、兵士にとって憩いの場所であった。繁松もこの日、入隊後始めて友井（内務班の同期）と一緒に酒保に行き、自分と同じ初年兵ばかりの中で、ついに念願のまんじゅうを腹一杯食べたのである。

しかしこれが平日となると忙しさは全く違ってくる。軍隊における初年兵教育は、一年を四期ないしは六期に分け、計画的に行う（『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』）。また、一期が終わるごとに連隊長あるいは旅団・師団長による検閲を実施し、兵士の習熟度を点検する機会を設定していた。

- 第一期（四ヶ月） 基礎教育・各個教練・分隊教練・小隊教練  
検閲…連隊長
- 第二期（二ヶ月半） 前期までの科目の他、中隊教練・衛兵勤務  
検閲…連隊長
- 第三期（二ヶ月半） 前期までの科目の他、大隊教練  
検閲…連隊長
- 第四期（五ヶ月） 前期までの科目の他、連隊教練  
検閲…連隊長

- 前期までの科目の他、旅団教練
- 前期までの科目の他、旅団教練
- 秋季演習
- 検閲…師団長

右は一月入営の現役兵の場合である。繁松の日記には、十月、二月、四月に検閲の記事が見える。時局の悪化に伴い、現役兵のみならず予備役や補充兵役にある者まで召集されるようになった結果、計画的な初年兵教育という建前は次第に崩れていったのではないだろうか。繁松ら臨時召集された者は、入隊後早い段階で営外の演習に参加させられており、実戦に役

にしばしの別を告げて営門を出、一路阪和「信太山駅」へ。五時すぎ、入隊して始めて久しぶりに電車に乗り、大阪へ。―大阪の街。何処「度」か夢に見た天王寺駅。大鉄。懐しの大阪は未だ寝つて居る。六時、天王寺駅より軍用列車に乗り込み、城東貨物線を走る。弥刀のつい際を走った時：、我々戦地へでも行くとも思っただのさ。沿線の人々が万歳万歳で送ってくれる。何だか嬉しくもあり、又くすぐったく感じつゝ答へる。懐かしの大坂城をはるかながめ東海道線に入る。省線はラッシュアワーだ。背広の人々、メツチェン…。京都の街を過ぎ大津より江若鉄道に入る。美しい朝だ。静かな港を水泳やキャンプに行く人々を満さいして遊覧船は出て行く。軍用列車は湖畔に沿って一路今津へ。いつ来ても美しい琵琶湖が限りなく美しく感じた。遊覧船は行く。白道雲湧いて白い帆のヨットが風は一ぱいはらんで走って居る。白砂のキャンプの群。若人の楽しいつどい。美しいメツチェンが赤いハンケチをふって送ってくれた。みんな青春を讃へ、そして夢見て居るのさ。一寸羨しく感じた。はたして自分も何日の日再びこの湖畔に楽しく過せる日が来るだろうか。―只知るのには神のみだろう。でもふと向ひの戦友の戦闘帽を見、長く続く軍用列車を見た時、別の限りない幸福感を感じた。一時前、今津着。汗みどろに馬、砲車を下り廠舎に入る。静かな美しい森の中にある廠舎で、山小屋の様な感じがする。夜、月に琵琶湖が銀色に輝いてとても美しい。素的な夜だ。

（八月十五日条）

演習地への移動とはいえ、入隊後始めて見る大阪の街、そこに暮らす人々の日常生活、そして琵琶湖の景観が、繁松らしい伸びやかな筆致で描かれる。

しかし翌日から過酷な訓練が始まる。繁松は砲手班に配属されたため、演習は専ら砲車の操作を習得するものとなる。すなわち、砲車を運ぶための溝掘や草刈、射撃目標の設置、実弾射撃の見学、実際の分射など。その合間には勿論日課の馬手入があり教練や当番もある。饗庭野演習場で二十二日間を過ぎた後は、徒歩で帰路につく。一日目は堅田から山を越え、京都の大原で露営。二日目は向日町で民家泊。翌日は高槻・茨木・吹田を経

立つ兵士の育成を急ぐ様子がうかがえる。



営内馬場にて 後方の建物は廠舎  
陸上自衛隊信太山駐屯地提供

#### 演習―饗庭野・宇品へ

入隊十八日目の八月十五日、繁松らは饗庭野演習場へ向けて出発。同演習場は現在の滋賀県高島市にあり、現在も陸上自衛隊饗庭野演習場となっている。

午前三時、起床ラッパが鳴り起床。午前四時半、隊伍を整へ暁の兵営

て「国分町」で小学校（正しくは大阪市北区国分寺町の済美第六尋常高等小学校、現・管北小学校）に泊まるなどしながら四日かけて行軍し、九月九日の午後三時ようやく信太山に帰営した。

饗庭野演習場より戻り、中一日を置いた九月十一日の夜八時半には宇品に向けて出発することとなる。宇品（現・広島市南区宇品町）は、日清戦争の頃より軍港として栄え、外地への輸送基地・補給基地の役割を担ってきた土地。この時期、兵士を戦地に送る海上輸送の拠点としての重要性が増していた。繁松は、この地で同期の友井や前田とともに、船舶砲兵隊の藤本部隊に入隊する。出発当日まで「はたして戦地へ行くのだろうか？？何の為、何の目的で宇品へ行くのだろうか？」（九月十一日条）と、宇品行の理由を知らされていなかったのが、到着後の訓示により、はじめて船舶砲兵隊で訓練を受けることが明らかとなったようだ。

宇品到着の翌々日、九月十四日より本格的な艦載砲の訓練が始まる。すなわち、宇品港（広島港）の沖合約一キロに位置する金輪島周辺で、練習船よりひめ（重量五百トン余りの小型船、砲十門を備える）を使用した分射の訓練である。「画の様な島々、夢の港」（九月十四日条）を眺めながらの日々の訓練、「御用船の船室」（十月二日条）のような浦塩丸に乗り、玄海灘（朝鮮海峡）にて演習をするなど、繁松にとって宇品での日々は活気に溢れ充実したものであった。名残りを惜しみつつ、信太山の原隊へ帰営の途についたのが十月九日のこと。宇品滞在は二十七日間に及んだ。

#### 使役の日々

すぐにも戦地に赴くかと思われた繁松であったが、その後は信太山での軍隊生活が続く。日課の作業、銃剣術の教練や砲の操作等の演習以外にも、軍隊内の規律を正し円滑な管理運営を行うため、様々な雑務を担うようになる。これら雑務の総称を使役と言う。使役は、①当番、②従兵、③臨時使役に分類される。当番は命令の伝達や書類の送達、その他の雑務に服する。従兵は従卒とも言い、将校の身辺の世話や伝令の任務に従事する。臨時使役は営内の草刈や清掃など、通常の当番以外の業務が発生した時のもの（先掲『写真で見る 日本陸軍 兵営の生活』）。日記中に出てくる当番に、

同校の昭和八年（一九三三）の学校規則では、本科（二年）、専攻科（二年）、高等科（四年）、師範科（三年）、研究科（二年）、特別専門科（年限なし）、幼稚園保育養成科（二年）、選科（二年）、特別選科（一年）があり、本科から高等科を経て研究科、更には特別専門科へ進むコースと、本科から専攻科あるいは師範科を経て研究科、特別専門科へ進む、小中学校教員養成のためのコースに分かれていた。入学金は三円、納付金は本科が年額八十八円（授業料五十五円、校費・楽器使用料三十三円）、専攻科・高等科・師範科が年額九十九円（同六十六円、三十三円）と大学の授業料並みであった。昭和十三年（一九三八）の教授陣には、長井齊（合唱・楽曲・音響学）、朝比奈隆（楽式・音楽史・美学）、加納和夫（ピアノ）などの名前が見られる（『大阪音楽大学八〇年史―楽のまなびや―』）。

繁松は、この朝比奈隆ら諸氏を先生と呼び手紙の遣り取りをしているのである。「朝比奈隆先生と満州の若村より便りが来る」（一月十一日条）、「車中、偶然乗合してた三中隊 「二字欠」 より入隊以来巡り会ふ日を持ってた、放送局文芸課の佐々木氏を紹介された。全く思ひもよらなかつた奇遇。コンダクター大沢壽人と親友で、加納、朝比奈、長井の諸氏とも知合ひとか」（二月十六日条）、「朝、長井齊先生、丸井ノ姉、浅井サン、夜、懐しい加納先生が皇大神宮ノ才守リト、姉ヨリ手紙来ル」（八月五日条）。日記に登場する回数は、加納和夫氏が八回と最も多く、朝比奈隆氏、長井齊氏はともに二回。繁松と最も深い関わりがあるのは、やはりピアノ担当教員の加納和夫氏であったようだ。しかしながら、現在、大阪音楽大学に残された卒業生名簿の中に繁松の名はない。召集により学業が中断されたのかもしれない。

### 信太山へ

昭和十二年（一九三七）の盧溝橋事件を発端に拡大した対中全面戦争の長期化は、軍隊の所要人員を急増させた。昭和十五年（一九四〇）における陸軍の徴集人員数は現役兵三十二万八千八百一十一名、補充兵十四万七千二百名、合計四十七万六千一百一十一名で、昭和十年（一九三五）の約一・五倍となっている（『徴兵制と近代日本 一八六八―一九四五』）。

繁松が召集の知らせを受けたのは、昭和十五年（一九四〇）七月二十三日午後二時頃、香櫨園の「スカールハウス」において（七月二十三日条）。召集令状は軍より警察・役場の兵事係吏員の手を経て、応召者本人もしくはその家族に交付される。家よりなんらかの方法で知らせて寄越したものと思われる。

召集令状を受け取った者は、期日までに指定された部隊の駐屯地に到着しなければならぬ。繁松も一週間後の七月二十九日に入隊、信太山の陸軍野砲兵第四連隊の中部第二十七部隊有田隊第二班に配属された。

信太山の部隊は、現在陸上自衛隊信太山駐屯地となっている一帯で、当時の敷地は伯太・黒島地区にまたがり、営舎十六町（約十五万八千六百七十八㎡）、練兵場十五町（約十四万八千七百六十㎡）という広大なものであった。大正九年（一九二〇）の国勢調査では営内居住者七百三十三名。営外居住者を含めると凡そ九百名が常駐していたとされる（『和泉市の歴史四 地域叙述編 信太山地域の歴史と生活』）ので、この時代には更に大勢が居住していたことは間違いない。

中部第二十七部隊は、野砲兵第四連隊本隊の補充（留守）隊として発足し、昭和十五年（一九四〇）九月十五日より中部第二十七部隊と呼称されるようになった。二個大隊（六個中隊）で編成されていたので、この部隊だけで四百名前後の兵数だったと思われる。同部隊の基本的な任務は、①新設部隊の動員・編成改正、②兵員馬匹の教育訓練、③本隊ならびに関連諸部隊に対する兵員・馬匹・兵器・被服等の補充・送付および復員諸業務、④傷病将兵の受入・再教育・帰郷処置、⑤内地防空・自衛警備、⑥その他の雑件であった（『野砲兵第四連隊史並びに関連諸部隊史』）。

兵営内の配置については、図および航空写真のとおり。左は昭和十一年（一九三六）「信太山営内要図」、右は昭和二十一年（一九四六）に撮影された信太山付近の航空写真である。後者は戦後米軍により撮影されたものだが、営庭を取り囲むように配置された兵舎などの建物、特に厩舎の姿がはっきりと確認できる。通称鍋塚と呼ばれた松の木の生い茂る古墳も残る。



昭和21年（1946）撮影 信太山付近空中写真  
国土地理院米軍撮影空中写真より



昭和11年（1936）信太山営内要図  
陸上自衛隊信太山駐屯地提供

### 兵の一日

昭和十五年（一九四〇）七月二十九日に入隊した繁松であるが、この日は日付・曜日・天候（晴）について記すのみ、その後五日間は一字も記さず五頁分が空白となっており、この間いかに慌ただしく過ぎたかがうかがえる。ようやく日記を書けるようになったのが八月四日。入隊してはじめての日曜日のこと。

当時の一般的な兵士の休日を参考に繁松の一日を振り返ると、だいたい次のようになる（『写真で見る 日本陸軍 兵営の生活』）。

五時	起床	洗面、服装や寝具の整理整頓
起 床	直 後	人員点呼後、馬匹の手入、班内の清掃等
六時半	朝食	朝食
朝 食	後 休	馬匹の手入
正 食	午 休	休養
昼 食	後 休	洗濯、酒保
十四時	過ぎ	面会
十七時	十八時	夕食
二十時	前後	馬匹の手入、入浴等
二十時半	二十一時半	訓示や翌日の予定等の伝達
		就寝

通常、日曜や祝祭日等は、勤務・演習を休み身体の休養をはかる日とされたが、起床時間や朝夕の点呼、馬匹の手入は平日と変わらず日課であった。なお、「班」とは軍隊生活の基本単位である内務班のこと。軍曹の班長を中心に三十人程が寝食を共にし、教育訓練を受ける。

馬匹の手入に休日はない。この時代においてもなお、軍馬は物資の輸送に不可欠で、砲や弾薬などを運ぶ貴重な戦力であり大切にされた。軍隊では厩での作業が大変な重労働。兵士たちがひき出し、ブラシをかけたたり蹄の泥を洗うなど手入れをし、餌を与える。天気が良ければ馬の寝糞を干す。これらの作業にほぼ一時間を費やし、それから自分たちの朝食となったのである。日に三度の食事の後や演習後には馬に十分な水を飲ませる。馬具の手入や厩舎の清掃も兵士たちの仕事で、厩舎には二十四時間体制の厩当

### 3 ある音楽青年の軍隊日記 ―紹介と翻刻―

はじめに

本稿で紹介する日記は、宇治市平和都市推進協議会が、平成七年（一九九五）戦後五十周年の節目に際し、広く市民に呼びかけ収集した戦争遺品のひとつで、現在は宇治市歴史資料館に寄託されている。日記を含め、ご遺族から提供を受けた資料は左記のとおりである（『收藏資料調査報告書8 戦争関係資料』No.5〇―1―1〇―1〇―9）

日記（昭和十五年七月～十六年七月）

勲功章箱（大阪市萩之茶屋町会連合会銃後奉公部）

応召のぼり

日の丸寄書き

朝日新聞「郷土勇士に輝く恩賞」（戦没者名簿掲載）

たすき「帝国在郷軍人会精華分会」

靖国神社合祀通知・記念神杯・合祀神璽

大阪貿易学校卒業証書

真珠湾軍神写真

これらの一部は、平成二十七年年度企画展『戦争遺品展―戦後七〇年―』（会期 平成二十七年七月十八日～九月六日）において、「馬とピアノとカーネーション『山北さんの軍隊日記』」のコーナーで公開したところである。

ここでは、日記の内容とその解説にあたり実施したこれら一連の資料群の調査で判明したことを報告する。日記本文を読むにあたり参考にしていただければ幸いである。

生い立ち

日記の筆者である山北繁松氏（以下、繁松）は、大正七年（一九一八）



昭和前期 大阪ミナミの繁華街（絵はがき「(大阪) 歓楽境の道頓堀」)

音楽家をめざす？

繁松は休日に出外許可が降りると、友人や家族に会うため、電車に乗って大阪の街に戻っていた。繁松の家にはピアノがあり、彼自身ピアノ奏者

三月十二日生まれ。大阪市西成区で母親とともに暮らしていたと思われる。資料「勲功章箱」に見られる「萩之茶屋」地域である。一方、資料「たすき」には「精華分会」とあり、日記本文にも見られるように、繁松が精華小学校の出身であることは明らかである（三月一日条）。同校は難波の繁華街に位置し、飲食業や商家の子弟が多く通う学校であったが、卒業後すぐに家業を継ぐ者だけでなく、中学校や商業学校に進学する者も三分の一程いたという（「私の小学生時代」）。繁松在学中の昭和四年（一九二九）二月に校舎が新築竣工している。地域の寄付金で建てられたもので、地上四階地下一階鉄筋コンクリート造。エレベーター二基や廊下を含む全室にスチーム暖房設備を整えるなど、当時最先端の設備を誇った。

日記には、山北家がこの界限で何らかの商売をしていたことを示唆する記述が度々見られる。「今日は日曜であり、店の休み」（八月十八日条）、「五時頃、面会の通知に代って貰って行くと、思ひがけなく店の若場さんと北尾さんが待つて居てくれた。暇だったので店を早く引いて来てくれたのだそうだ」（十月二十九日条）、「二時前家を出、未だ正月の晴着に賑ふ心齋橋筋を店へ行き、正月のあいさつをし、シヨパン「ピアノ協奏曲一番」を聴いて、心齋橋より地下鉄で帰営す」（二月五日条）。しかしながら、当時の電話帳に山北家の番号はなく、家業を特定することはできなかった（『大阪市及近郊電話番号簿 昭和十二年四月一日現在』）。

資料「大阪貿易学校卒業証書」からは、繁松が昭和十年（一九三五）三月八日に大阪貿易学校の支那語科を卒業していることが確認できる。同校は、もと社団法人私立大阪貿易語学校。大正三年（一九一四）に大阪商業会議所（現在の大阪商工会議所）が中心となり、貿易に関する実務と外国語に長けた人材育成の理念の下に設立された。教育課程は本科と専修科があり、本科は英語科と支那語科（中国語科）、専修科はロシア語・スペイン語・フランス語・ドイツ語などのカリキュラムがあった。大正十四年（一九二五）に実業学校令による商業学校の認定を受け、大阪貿易学校と校名を変更した（『創立九〇周年記念誌』）。繁松が在籍したとされるのは、昭和五年（一九三〇）から昭和十年（一九三五）の五年間。大阪市北区東野田九丁目（現・都島区中野町二丁目）にある校舎に通っていた。昭和十年

であったこと、音楽コンクールに出場する夢を抱いていたことなどが記される。

三月ぶりの懐かしい我家、我部室。飛つく思ひにピアノを弾き「皇帝」を聴く。嬉しそうな母の顔。嬉しくて嬉しくて耐らなかつた。畳の上

〈十月十三日条〉

今日時間があるので、久しぶりにどてらにくつろぎピアノを弾き、博哉のヴァイオリンの伴奏をしてやる。音程はタヨリナイが自分一人で練習したとしては…。家に居ればみてやるのだが。

〈三月二十三日条〉

朝刊にて日比谷に於ける音楽コンクールの発表あり。ピアノでは黒田睦子が大臣賞を、稲村が入選し、声楽に網野さんが第三位に入選して居た。夢にみてたコンクールだが。

〈十一月十八日条〉

大阪の楽器店三木楽器の「ピアノ販売年表」（明治三十五年～昭和十七年）によると、年間の販売台数が最も多かったのは昭和十二年（一九三七）。輸入品十四台、和製品七百九十一台、合計八百五十五台が売れたという（『大阪音楽文化史資料 明治・大正編』）。輸入ピアノの平均単価約二千五百二十四円に対し、和製ピアノは約二百九十七円と低価格で普及するようになってきていた。とは言え、小学校教員の初任給が五十円前後だった昭和十年（一九三五）当時、一般家庭においてピアノはまだまだ高級品である。繁松の家は、大阪の繁華街で商売を営んでいただけあって、比較的裕福な家庭であったようだ。

実は、繁松は大阪貿易学校を卒業後、音楽家をめざし勉学に励んでいたらしい。

三時すぎ母が面会に来て、不二屋のシュークリームを持って来てくれ、全く嬉しかった。なほ面会所で音楽学校時代の友、保田（ベッコ）によく似た男を見た。…はたして彼だった。何年ぶりだか。此一日に召集で入隊したとの事。懐かしく思ふ。

〈十二月十五日条〉

日記の他の箇所には、「朝比奈隆先生」、「加納和夫先生」、「長井吾先生」も登場し、この音楽学校が、当時大阪市東区味原町（現・大阪市天王寺区味原本町）にあった財団法人大阪音楽学校であることが判明する。

## 収蔵資料調査報告書

収蔵文書調査報告書 1	「白川金色院」と恵心院	1998年(平成10)
収蔵文書調査報告書 2	笠取地域の古文書	1999年(平成11)
収蔵文書調査報告書 3	上林三入家文書	2000年(平成12)
収蔵文書調査報告書 4	宇治上神社文書	2001年(平成13)
収蔵文書調査報告書 5	巨椋池漁師仲間文書	2002年(平成14)
収蔵文書調査報告書 6	上林春松家文書	2004年(平成16)
収蔵文書調査報告書 7	白川・藤川家文書	2005年(平成17)
収蔵資料調査報告書 8	戦争関係資料	2006年(平成18)
収蔵資料調査報告書 9	上林春松家文書 2	2007年(平成19)
収蔵資料調査報告書 10	幕末の銅版画	2008年(平成20)
収蔵資料調査報告書 11	宇治市の写真資料 1	2009年(平成21)
収蔵資料調査報告書 12	宇治市の写真資料 2	2010年(平成22)
収蔵資料調査報告書 13	宇治市の写真資料 3	2011年(平成23)
収蔵資料調査報告書 14	絵ハガキ 1	2012年(平成24)
収蔵資料調査報告書 15	片岡道二家文書	2013年(平成25)
収蔵資料調査報告書 16	宇治市の写真資料 4	2014年(平成26)
収蔵資料調査報告書 17	京都社寺境内図	2015年(平成27)

※ 7 までは、『収蔵文書調査報告書』として刊行した。

### 収蔵資料調査報告書18 戦争関係資料 2

2016年(平成28) 3月31日

編集・発行 宇治市歴史資料館

〒611-0023

宇治市折居台 1-1

TEL (0774) 39-9260

FAX (0774) 39-9261

E-mail : shiryoukan@city.uji.kyoto.jp

